
ファンタシースターポータブル2 ∞ 偽神達の転生（日常編続き）

コーラ大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2[∞] 偽神達の転生（日常編続き）

【Nコード】

N5272Y

【作者名】

コーラ大好き

【あらすじ】

コーラ大好きシリーズ。日常編続き。

“狂神の信念”

から1年後……

新たな事件を予感しながらも、

主人公ファントムはいつもの日常を過ごしていた。

しかし“制裁者”と呼ばれる存在と遭遇し、心に重くのし掛かる戦いに身を投じていく……

孤独、絶望、

嘘、悪……全ては仲間の為に背負う……

0 章：裏　　転生　　（前書き）

祝！！

第三部目！！

でも3作品目から変に感じる物です。

（個人の意見ダヨ）

オリキャラが4人程出てくるんですが、プロフィールは次話で書かせてください。

0 章：裏　く　転生く

どこかの建物

ある一室に、ビーストの男がイスに縛られている。
部屋自体は小綺麗だ。

扉がノックされ、ビーストの男が反応する。

カザ

「チヨリース！

元気ですか？

ゴールドさん」

ゴー

「いつまで私を監禁するつもりだ……

何人かのヒトに会わせ、それっきり来なかったが……
何しに来た？」

カザ

「そろそろ良い頃合いなんすよ！
ちよっと待って下さいよ」

部屋の外から大きな袋と、重そうなアタッシユケースを持ってきた。

ゴ―

「何だ？」

カザ

「ゴールドさんの好きな物つす。
それい！」

袋の中身を全てぶちまけた。

中身は宝石、金塊、骨董系のメダルと
高価な物ばかりだ。

ゴ―

「！！！！」

カザ

「こっちも！」

アタツシユケースを開け、中身の札束を掴んだ。
それをばらまき、宙に金が舞った……

ゴー

「か……金……金！」

カザ

「そうです！ アンタが好きな金ですよ！」

ゴー

「うう、オオオオ……」

ゴールドはつめき声をあげる……

カザ

「アンタは

ゴールド・シルバシノ

思い出して下さい！

俺達の指命を……」

ゴー

「グアア……ウツ……

アアアアア……」

叫び声が止むと、首をダランと落とした。

カザ

「大丈夫ですか？」

ゴー

「……………」

大丈夫だカザリ。

さっさと拘束を解け」

カザ

「ハイハイ」

拘束具を外し、ゴールドを自由にする。

ゴー

「ふむ、この拘束方法と器具……
アンナはすでに？」

カザ

「来てるっすよ。」

まだ人数は足りないって感じですけど……

……あ、掃除面倒なんでゴールドさんの部屋はこっそすよ」

ゴ

「構わん。

金に埋もれて寝るのは良いものだ」

ゴールドは近くにあったお札をポケットに仕舞うと、カザリと一緒に部屋を出ていった。

建物内 会議室

楕円形の大きなテーブルに、12脚のイス。

イスに座っているのは3人……

カザリとゴールドで5人になる。

イスに座り、メンバーを確認する。

ゴー

「まだ5人か……」

アンナ・ザ・ブラッド

シェリー・エクスタシー

ロドリゴ・ゼル大佐

カザリ・イリオン

そして私……

……7人も足りないな」

カザ

「今探してる最中っす」

アンナは手錠をクルクル回している。

シェリーはエロ本を読んでいる。

ロドリゴはヤスミノコフ0002を手入れしている。

ゴー

「そうは見えないが？」

カザ

「実際面倒なんす。

でも“虚実”以外の居場所は判明してますよ」

ゴー

「どこだ？」

カザ

「“王権”がガーディアンズの刑務所。

“完全”“愛”“死”

“運命”がリトルウイング。

“食”は1年前の事件のせいで体が存在しません」

ゴー

「“食”はOFMになったんだっとな。

“虚実”の力ならどうにかなるかもしれないが……

………

シヌは私達の邪魔しかないな」

シヌという言葉に強く反応する4人。

ゴー

「地獄で復讐出来るかと思ったが……

………フン、いつか果たす時が来るだろう」

カザ

「そつつすね……

………

さて、最初は“王権”から連れ戻しましょう。
ニューデイズのガーディアンズ刑務所です。

………

始めましょう……

制裁の時つす」

さっきまでやる気の無かった3人が目の色を変え、武器を手にとつて部屋をあとにした。

彼らは転生した……

下らないエゴの為に……

少なくとも……

彼らが行う事は、神がする事ではない……

そのような事はヒトしかないからだ……
つまり彼らは偽神……

偽神達は転生した。

0 章：裏　　転生　　（後書き）

最後の何なんだ？

小説内に出てきた“○○”などは、
制裁者の信条みたいなイメージです。
違う奴もいるけど。

ゝ拒、金、拷、性、戦ゝ（前書き）

緊張感無い書き方だなゝ

く拒、金、拷、性、戦く

カザリ・イリオン

Lv?

性別・男性

年齢・18歳

種族・ヒューマン

身長・175cm

体重・61kg

タイプ・“拒絶”

髪・チャライ 茶（染色）

服装・日によつて違ふが

チャライ

所属・twelve punisher

何から何までチャライ男性。

ファントムの前では紳士になる。

半年前まで高校に通っていた青年。

しかし行方不明になる。

行方不明になった数日後……

ローグスのビーストの男性と銀行強盗を働く。

ビーストの男性を裏切り、屋上に居るところをルシフェルに見つか
る。

（故意）

意味深な言葉を残した後、奪った金品を持ち去った。

因みに、裏切られたビーストはガーディアンズの留置場に居たが、死亡している……
殺したのはカザリ。

ゴールド・シルバシノ
LV?

性別・男性
年齢・45歳
種族・ビースト
身長・179cm
体重・70kg
タイプ・“金”
髪・丸刈り(6mm)、黒
服装・スーツをだらしなく着ている
所属・twelve punisher

喋り方と雰囲気は大人しいが、金や高価な物を見ると目の色が変わる。

モトウブの大富豪で、表だった仕事から裏の仕事にも精通している。

ファントムに対して、緩く接する。

アンナ・ザ・ブラッド
LV?

性別・女性

年齢・27歳

種族・ニューマン

身長・174cm

体重・58kg

タイプ・“拷問”

髪・セミロング、赤

服装・ルナプロフェシー

黒

所属・twelve punisher

超ドSなニューマンの女性。

喋り方も相手を見下した感じ。

カザリと同じで、ファントムに対して忠誠の雰囲気がある。

ザ・ブラッドは
コードネーム。

フルネームを知るヒトは制裁者だけだが、他言無用らしい。

グラール教団の裏組織の一員で、異端者や破戒した者を拷問する。
(カレンやルツは知らない)

普段から鞭とボウガンを携行している。

シェリー・エクスタシー
LV?

性別・女性

年齢・製造から14年

種族・キャスト

身長・140cm

体重・28kg

タイプ・“欲情”

髪・ツインテール、橙

服装・セーラー服

所属・twelve punisher

性欲求に物凄く興味があるキャストの女の子。

快楽を知る為にボディを改造し、性行為が出来る。

元は記憶機能をヒトに近づけたタイプのキャストで、学校に通っていた。

シェリーはファントムに忠誠と言うよりかは、男性として見ている。

基本的にエロ本、官能小説を読んでいる。

ロドリゴ・ゼル
LV?

性別・男性

年齢・75歳

種族・デューマン

身長・190cm

体重・87kg

タイプ・“戦争”

髪・目立つオールバック

白髪

服装・緑の軍服

所属・twelve punisher

元軍人のデューマンの老人。

最終階級は大佐。

話し方は「儂」や「お主」と言う。

数週間前まで隠居生活を送っていたが、

twelve punisherの制裁者になっている。

戦闘狂な一面があり、70代とは思えない動きをする。

ファントム対して嫌悪感があるが、どういつわけか従っている。

“ 12人の制裁者 ”

キリスト教における地獄の長……

堕天使ルシフェルが構成した12人の男女。

ファントム、エミリア、ナギサ、シズルも制裁者だが、そのような自覚は無い。

それぞれに

“ 王権 ” “ 運命 ” “ 食 ”

“ 金 ” “ 拒絶 ” “ 完全 ”

“ 愛 ” “ 死 ” “ 欲情 ”

“ 戦争 ” “ 拷問 ” “ 虚実 ”

と言っ意味がある。

構成理由は神を倒す為。

シヌは全員の正体を知っている。

神は、ミレイ・ミクナと協力して制裁者を抹殺しろと命令している。

ゝ拒、金、拷、性、戦ゝ（後書き）

実はキリスト教の

七つの大罪にしようかと思ったのですが……

キリスト教ばかり入れるのは変なので、独自の物に……

0 章：表　く偽神の力く（前書き）

最初はファントム目線ですが、
途中から第三者目線です。

0 章：表　く偽神の力く

シヌが引き起こした事件から1年経った……

半年前からあのカザリというチャラ男とは、慰安旅行以来会ってはいない。

戯言を言いに来た……？

そう言ってしまうばそう思いたい。

これ以上事件はゴメンだ……

クラッド6

リトルウィング

居住区　ファントム自室

正午

俺は部屋で、昼食の自作クリームスパゲティを食べていた。
マリ、エミリア、ナギサも居る。

エミリアとナギサは俺に対して相変わらずだが……

半年前からマリの態度が少し変わった……

具体的に言くと、干渉が激しくなったのだ。

これまでは、少し干渉したとしても本音を聞こうとする事は無かった。

本音など読心術を使えばわかりそうだが……

現在、出来るだけ口から言わせようとする。

聞く事は決まって……

カザリとロストの事だ……

いつの間にか心を読まれていたらしい。

「アタシを除け者にするな！」

「頼れ！ 1人で背負うな！」

わかってる……

除け者にするつもりはないし、頼りたい……

……

だが……

危険に晒したくはない……

勿論マリだけではない、仲間もそうだし、他人もそうだ。

考え事が最後になると、毎回マ리에言われる事がある……

マリ

「自己犠牲は許さないよ」

エミリアとナギサの前で初めて言った。

マリの言葉にキョトンとする2人。

エミ

「どうしたの？」

ナギ

「ファントムの事か？」

マリ

「何でもないよ」

ファントムの料理美味しい！」

ファ

「……ありがとう」

少し変わってしまったが、不快感があるわけではない。
その内、元通りになるだろう……

ニューデイズ
ガーディアンズ設立
ケイリヨン刑務所

地球で言う、中国の様な名前が多い地域の森に、この刑務所はある。

森を囲む都市の名前は

“都市リクヨ”

金持ちしか住まない都市。

しかし、犯罪発生率が高い。

何故なら違法カジノやヤクザの事務所、非公式な地下都市……
光あるところに闇、とはこの事だろう。

それを牽制、犯罪率低下を理由に刑務所を設立している。

ケイリヨン刑務所があるケイリヨンの森は、凶暴な原生生物に入り
組んだ道……

刑務所には特定の道でしか辿り着けず、外に出る場合もそうなる。
何も知らない受刑者が森を抜けようとしても……

原生生物に跡形も無く食われる。

or

森に迷い、絶望後に自殺。
どちらかだろう。

異常な場所に置かれてるケイリヨン刑務所に入所するのは、言うまでもなく、凶悪な犯罪者。
ほんの一握りだけが出所出来るが、大半は刑務所で人生の幕を閉じる。

そんな刑務所がある森の上空を、今では見かけないヘリが飛んでいる。

搭乗者は

Twelve punisherの5人だ。

ロドリゴが操縦している。

ロド

「狩りを楽しんでこいよ！

ガハハハ！！」

アン

「馬鹿笑いするな

老いぼれ」

ゴー

「アンナ、金をやるからその喋り方止めろ」

シェリー

「刑務所って言ったら

AVの種類であるよね」

カザ

「自由人っすね」

確認しますが、目的は

“王権”の奪還。

狩りは邪魔する“ゴミ”だけっすよ。

……………

カザリ、いきまゝす！」

カザリは一番に飛び降りた。

アン

「酷いパクリだな

口を縫うぞ、チャラ茶髪」

次にアンナが飛び降りた。

シェリー

「“ゴミ”駆除とS*Xは同じ位たのしいってね」

シェリーも飛び降りる。

ゴー

「変わらないな……」

ロド

「変わらんさ。」

時代は変わったがの」

ゴー

「そうだな大佐。」

……帰ったら小遣いやるよ、お爺大佐」

最後にゴールドも飛び降りた。

全員、パラシュートなど着けていなかった。

ロド

「だゝれがお爺じゃ！

ガハハハハ！！」

ヘリを旋回させ、森の開けた場所に着陸した。

ケイリヨン刑務所
入口前

4人はコンクリートの地面に着地したが、骨折はおろか外傷も無い。

カザ

「さつさと“王権”を連れ帰ろう。
長居は無用です。」

……..
と、言いたいですか……」

4人の前に
黒いゴコウバオリを着て、キセルを吸い、自身と同じ名の剣を持つ
男が立ち塞がった。

ルシ

「待ってたぞ。」

カザリ・イリオン」

キセルを吸い、煙を吐き出すルシフェル。

アン

「アンタの知り合いかい？」

カザ

「そうですよ。」

……ルシフェル……

それでわかるっすね？」

シェリー

「へえ」……

ファントムさんのお兄さんね」

ゴー

「私達のファントムに兄弟などいない」

カザ

「そうつすね。」

ファントム様に兄弟はいない。」

……ここは僕ちゃんが止めます。
アンタ達は“王権”を……」

アン

「指図するな チャラ男。
不本意だが私も加わろう」

ゴー

「では私とシェリーで探そう。
行くぞ」

シェリー

「アイアイさ」

ルシ

「まあ待てよ……！」

セイバーを、後ろを通ろうとした2人へ振った。
フォトンの衝撃刃が飛んでいき、回避行動をさせた。

衝撃刃は刑務所の壁に当たり、巨大な裂け目が出来た。

ゴールドとシェリーはカザリ達の場所へ行く。

シェリー

「やってくれんじゃん」

ゴー

「堕メ野郎の名だけはあるな」

カザ

「名は転生に必要な要素ですもんネ」

堕メ野郎は人間じゃないけど、影響はあるみたいっすね」

アン

「どうでも良いけど……」

アンタ、中の奴らの心配は無しなんだね。

人間は同族を庇うんだろ？」

アンナは衝撃刃が作った裂け目を指差して言った。

ルシ

「さっき俺は……」

“待ってたぞ”

と、行ったぞ」

カザ

「既に避難済みですかい？」

ルシ

「そうだ……」

ガーディアンズと協力してお前を見つけたんだ。
迎え討つ準備は出来ているし、もう1人の仲間も取り押さえられて
るだろう」

ケイリヨンの森
開けた土地

ヘリを囲む様に、ガーディアンズが取り囲む。
中には、ルシフェルに協力する数名のローグスがいる。
部隊長はバアルだ。

バア
「船を降りて大人しく投降しろ！」

ロド

「ガキ共が……」

ここで危険なのは部隊長みたいなのとタイラーかの……」

ローグスはタイラー、ヴィヴィアン、リリス、ロスト、がいる。

ケイリヨン 刑務所

カザ

「なめられてるな……」

僕ちん1人じゃ無理だけど、4人も相手取れないでしょ？」

ルシフェルはキセルを消し、ナノトランサーに仕舞った。

ルシ

「雑魚4匹……」
簡単に釣り上げれる」

アン

「言っじゃん!!」
白髪野郎!!」

クイーンヴィエラを、数十本一気に打ち出す。

ルシフェルは衝撃刃で全て落とす。

しかしアンナに後ろを取られ、
刃鞭パラディソを振られる。

そんな事をさせる前に、前を向いたままアンナを蹴った。
壁に激突する。

アン

「ガハッ!」

ゴー

「頭に血が昇り過ぎだな。

………

しょうがない……

私が回復に向かう」

アン

「必要ない!!」

こんな屈辱……

ファントム様に陵辱された以来だ!!」

ルシ

「ファントムはそんな悪い奴じゃない」

アン

「今のファントムじゃない!!」

何も知らない“ゴミ”が……

“鉄の処女”

アイアンメイデン!!」

ルシフェルの真後ろに魔方陣が現れる。

(ルシ)

!?! 何だ!?!

危険を察し、避けようとしたが……

若干遅く、鉄の処女に飲み込まれた。

ガシャン!

扉が仕舞った音……
冷たい鉄の音だ。

直後に聞こえる、
ルシフェルの痛みを堪える声。

ルシ
「グッ！　ウ……グア……！」

アン
「もっと叫ぶかと思ったけど……
大したもんだね」

カザ
「アンナさん！
力は抑えて下さいよ！」

アン
「黙れ！　お前だって銀行強盗の協力者を“拒絶”の力で殺しただけだろ！」

カザ
「チッ……」

ゴー

「喧嘩は止める。

ファントムが見たら、怒られるぞ」

アン

「……わかったよ」

カザ

「……悪かった」

シェリー

「じゃあ仲直り！

握手握手」

無理矢理握手させる。

ゴー

「よし、大佐のところで行こう」

4人が歩き出すと……

バキバキ……

バリン！！

鉄の処女を無理矢理壊し、出てくるルシフェル。
痛々しい針の傷跡が見える。

キセルをくわえ、セレスティアルブレイズを構える。

シェリー

「アンナさんの“拷問”の力を……

……

鉄の処女……

まさに処女喪失……

ゴー

「下らない事を言うな。
これは大問題だ」

カザ

「ですね。

いくら堕メ野郎の名前を持つとしても……
所詮人間……

僕達の力を覆すなんて……」

アン

「ム力つくな……」

ルシフェルは微笑し、
キセルをくわえながら煙をはいた。

ルシ

「言っただろ雑魚共……」

……釣り上げれる位簡単なんだよ。

お前らが何であろうと……雑魚なんだ」

アン

「腹立つねえアンタ……」

……

拷問は無しだ。

殺してやるよ」

ルシ

「せいぜい頑張れ……」

調教してやるよ！」

この日から……

制裁者達との戦いが始まった……

0 章：表　く偽神の力く（後書き）

雪降って寒い……

ストーブ使っていないと指先がおかしくなって書けなくなる……

………

何の話！？

アンナ“拷問”

・鉄の処女

アイアンメイデン

・拷問具

高さ2 m

女性を型どっており、前面には観音開きの扉が付いている。

中には大小様々な針が付いており、致命傷を避ける様に設計されている。

グラールには存在しない。

地球では、

中世のヨーロッパで作られた。

拷問具の中では最も有名だと言ってもいい。

しかし、資料や実物に似せたレプリカによると……

使われた経歴が少なく、復元した物のほとんどは致命傷に刺さる設計になっている。

実用されていたかは、

怪しいところだ。

1章：0 へ使用者へ（前書き）

やっぱり、緊張感が無い書き方だな……

進歩しないと。

1章：0　使用者

ニューデイズ

ケイリヨン刑務所

入口の前に十字架が立てられてある。

それに磔にされている……

ルシフェル……

手と足に杭が刺さっている。
まだ息はある。

アン

「ハア…ハア…ハア……

ざまあ見る……

“拷問”の私の力は……中々死ねないよ」

十字架はアンナの力で出現させたいらしい。

アンナ以外の3人も息を切らし、傷だらけだった。

カザ

「思った通り……
侮れないっすね」

カザリに至っては、腕を斬り落とされている。
片方の腕で落ちた腕を持っている。

ゴ

「攻撃型の力ではない私とシェリーは……
役立たずだったな」

シェリー

「“金”も“欲情”も興味を示さないもんね……」

カザ

「もう良い……」

大佐のところへ行こう」

全員歩き出した。

すると……

ブシャ！

杭から手と足を引き抜き、セイバーで斬りかかる。
瞳孔は開きっぱなしだ。

セイバーはアンナの顔面を捉えた。
顔に突き刺さる。

ルシ
「ハアア！！」

上に振り、鼻から脳天まで真つ二つになる。
よろめきながら、後ろへ距離を取る。

カザ
「まだ動けるんですか？」

ゴー
「他の“ゴミ”とは違うようだな……」

シェリー

「使い回せる粗大ゴミ？」

3人が3人とも、アンナの事など話していない。

ルシ

「仲間の心配は？」

……冷たいな」

“4人”が笑う。

アン

「アハハ！」

ファントム様以外は信じていないけど、死にかけても心配しないのはわかる」

頭を割られながらも悠然と話す。

ルシ

「……………」

どうなってる……………」

アン

「そこまで話す必要は無いわ。

……………」

ここまで奮闘を称して、綺麗な死に方をさせてあげるわ。

“斬首台”ギロチン」

魔方阵からギロチンが出現した。
ルシフェルの首を抑える。

ルシ

「クソ……………」

アン

「拷問器具だけじゃないのよ。

It's show time!!」

レバーを蹴って、
刃が振り下ろされた。

ケイリヨンの森
開けた土地

草は血に濡れ、木はへし折れている。

その土地で立っていたのは、ロドリゴとタイラーとバアルだった。
しかしタイラーとバアルは疲弊しきっている。

ロド

「なんじゃ……」

全然弱いのに」

タイ

「クッ……」

タイラーは手に力を込める。

バア

「ナノブラストはダメですよ。

使っても勝てないだろうし、貴方の体が持ちません」

タイ

「だが……」

ロド

「小僧、それは違うぞ」

バア

「何がだ？」

ロド

「兵士たるもの、死ぬと解っていても戦わなきゃならん。
それが出来なければ兵士ではない」

バア

「まるで道具だな」

ロド

「戦争では道具じゃ。
戦場ではそれ以上の価値は作れん」

バア

「貴様……」

ロドリゴは
コマンドブレザー
を取り出した。

ロド

「お主らじゃ相手にならん。死ね」

巨大な刃が向けられ、射出された。

……ガキン！

光テクニック
グランツによって弾かれた。

ロド

「なんじゃ!？」

タイ

「？」

バア

「誰が……」

ロドリゴの前に、フード付きの白いマントを羽織った人物が降り立った。

ケイリヨン 刑務所

ギロチンの刃は、

ルシフェルの首を切り落とさなかった。

フード付きの黒いマントを羽織った人物が、ルシフェルの拘束を解

い救出したのだ。

ギロチンの横にルシフェルを寝かす。

アン

「誰？ お前……ウッ！」

黒マントは、アンナの首を真つ黒な日本刀で斬った。

返り血を浴びる前に、カザリ達の場所へ蹴飛ばした。

カザリがキャッチするが、腕が一本しかないので器用に足を使う。

ゴー

「傷を負い過ぎてアンナは動けないな」

シェリー

「それより……」

アイツ誰？」

フードを被って顔はわからないが、体付きから男だろう。

ルシ

「……誰だ？」

黒マント

「俺を忘れたか？」

あれだけ復讐しようとしたのに「

ルシフェルは声でわかった。

黒マントが誰なのかを。

それはカザリ達も例外ではなかった。

シエリー

「！！！！

その声……！！」

SUVウェポンの

ガトリングシステム

ラファールバースト

を呼び出し、発砲する。

しかし黒マントは、

漆黒のフォトンの壁を作り、銃弾を遮る。

ゴ

「丁度良い!!」

「やっとお前を殺せる」

後ろに回り、

エンドイフで斬りかかる。

それを避け、足で肘を逆に曲げた。

ゴ

「ガッ!」

頭から踵落としを食らわせ、地面にめり込ませた。

シェリーのガトリングが止む頃、漆黒のフォトンの壁を解いた。

カザ

「何故!？」

「何故アンタはグラールにいる!？」

黒マント

「神のお陰だ。

ちよっと前までは信じてなかったがな」

マントを脱ぎ捨て、姿を現した。

黒い服に黒いコート、

漆黒の髪に目立ちにくいオールバック。

カザ

「シヌ……！！」

ルシ

「……………」

シヌ

「ンフフフ……」

アハハハハハハ！！

遂に舞い戻った！！

人間は滅ぼせないが、

お前達を“また”を殺せる！！

それで墮メ野郎の邪魔をし、居なくなるなら……

こんなに嬉しい事は無いぞ！！！！」

（カザ）

分が悪過ぎる……！

いくら僕達が死ななくても、粉々にされる……！！

カザ

「シェリーちゃん！

アンナさんを！」

アンナをシェリーに託し、素早くゴールドを回収した。

シヌ

「せいぜい逃げろ。

ゆつくりと追い詰めて

殺してやる」

カザ

「ウゼエ……

シェリーちゃん、大佐のところへ行こう」

シェリー

「……わかった」

ゴールドとアンナを背負い、森に消えていった。

シヌ

「……………」

立てるか？ ルシ……

差し出した手を振り払い、M19を向けた。

ルシ

「何故生きている？

ファントムはお前を殺したと……

……クッ……」

銃を落とし、地面に倒れてしまった。

シヌ

「手と足に穴開いてるに……」

無理するのはファントムと同じだな」

シヌはルシフェルを背負った。

ケイリヨンの森
開けた土地

ロドリゴの刃を的確に落とす白マント。

（ロド）
これ程のテクニック……
フォースの上級者でも
中々いない……
一体何者じゃ？

決着がつかないまま時間が過ぎていく。
すると、カザリ達が走ってきた。

ロド

「……！？」

どうしたんじゃ！？」

カザ

「話はあとつす。

へりを出して下さい！」

ロド

「わ…わかった……」

へりに乗り込み、エンジンを作動させた。

白マントは追撃せずに、へりを見送った。

バア

「君………凄いね………

女の子だろ？」

確かに体付きから女の子だとわかる。

白

「ありがとうございます。」

戦闘経験は無かったのですが……」

フードを取る……

白マントの正体……

ミレイ・ミクナ

、その人だつた。

バ
ア

「君つて……」

タイ

「バカな……」

君は5年前に……」

シヌ

「そう！ 彼女は5年前、お父さんに誤って殺された。」

.....
.....

...

意識があるのは君達だけか……」

ルシフェルを背負って、シヌが現れた。

ミレ

「みなさん危険な状態ですね……
救援が来るまでは私が治療しましょう」

シヌ

「みんな面識が無いのに……
星れ……じゃなくて……
幻視の巫女様は慈悲深いですね」

ルシフェルを横たわらせる。
他にも倒れているヒト達を、一ヶ所に並ばせた。

1章：0 へ使用者へ（後書き）

タイラーとミレイって……

面識無いですよ？

ユニバースを詳しく知らないのです……

1章：1 敵↓仲間（前書き）

後半が強引ですが、

カレンは聞き分けが良いんですよ……

……たぶん……

1章：1　↳ 敵 ↓ 仲間 ↳

ロドリゴ私物へリ内

ロド

「なっ
……」

……

……

クソがあああああああああああ！！」

シヌが現れた事に激しく激怒する。

アン

「ごんがいは毒づがない。

わだじも同じぎぶんだからね」

喉を斬られて、何を言ってるかわからない。
それに加え、頭を割られているのだから。

カザ

「無理しない方が良いつすよ。」

死ななくても、痛みはある程度感じるんですから」

アン

「わがっでるわよ」

シェリー

「それよりどうするの？」

アイツがいたら制裁は

無理じゃない？」

ゴー

「フロントムか“虚実”……」

どっちかがいたら、どうにかなるかもな……」

制裁者達は圧倒的な敗北をし……

帰路についた……

ニューデイズ

都市リノヨ 病院
待合ホール

ファントムが現れ、ソファーに座っているバルに近づく。

バア

「ファントム君……」

ファ

「兄貴は!？」

バア

「704号室だよ。」

まだ……

ファントムは最後まで聞かずにエレベーターに向かった。

バア

「……最後まで聞こつよ。」

……

まあ……兄弟だからか……

心配しなかったらおかしい……」

レディ

「私もお兄ちゃんが心配だよ」

売店で買い物をしていたレディが、バアルの元に戻る。
隣に座ると、缶コーヒーを渡した。

レディ

「お兄ちゃんも銃創が多かったんだから……
安静にしていなと」

バア

「まだ余裕さ。
それよりも……」

レディ

「？」

（バア）

何故、幻視の巫女が？
それにシヌという奴……
僕やタイラーさん達が手を焼いた奴らを
4人も倒すとは……
何者なんだ……？

……
ガーディアンズも関わった事だし……
僕も動かないと……

ルシフェル病室
704号室

病室の中には
ヴィヴィアン
タイラー
リリス
ロスト
が居た。
そしてもう1人……

ファ

「!?!?」

「何故シヌがいるんだ!?!」

シヌ

「じー

病院では静かに」

ファ

「貴様！」

リリ

「待って下さい！」

シヌはルシフェルを助けてくれたんです！」

ファ

「な！？」

意外な事実には驚愕する。

狂神の信念時のマガハラで同情したと言っても、シヌを信じているわけではない。

ファ

「ロスト、本当か？」

ロス

「……ああ。
間違いない」

シヌ

「残念だったな」

ファ

「チッ……」

何故生きている？」

シヌ

「まだ話す必要は無い。

今はルシフェルの近くにいるんだな」

シヌはファントムの横を通ると……

シヌ

「（後で屋上へ来い）」

そう言い残し、去ってしまった。

ファ

「……………」

兄貴はどんな状態だ？」

リリ
「……………」

タイ

「意識不明だ……
死にはしないが、当分は目覚めないだろう……」

ヴィ

「手と足に重傷を負って……
血液量が足りてない状態なんです……」

かなり元気が無い
ヴィヴィアン。
5年近くも相棒なのだから当然だろう。

ファ

「一体誰が……」

マリ

「お兄さんは!？」

船を停めに行っていた
マリが、病室に入ってきた。
ファントムを先に降ろし、自分は船を停めていたのだ。

リリ

「ルシフェルは大丈夫よ……
大声出さなくても良いわ」

リリスは落ち着いている。

ルシフェルの心配はしているが、ヴィヴィアンとは少し違う見方なのだろう。

ヴィヴィアンは心配し過ぎ。

リリスは信頼し過ぎなのだろう。

ファ

「……………」

ファントムは場を見計らい、病室をあとにした。

病院 屋上

ファントムは屋上についた。

シヌは手すりによしかかり、景色を眺めている。
夕日が輝いていた。

シヌ

「君はタイラー君とヴィヴィアンちゃんに、俺の事を話したんだな。
会った事は無いから
初めましてだったけど」

ファ

「嫌な目で見られただろ？
貴様のした事は全て話している」

シヌ

「嫌な目しかされなかった……
どうやら俺の信念は、君しか知らないみたいだな。

………
……… 同情は避ける。

これからの戦いは特にな」

ファ

「貴様に指図される覚えはない。
それより、何故呼んだ？」

シヌ

「聞きたい事位あるだろう？
君は主人公だ。
知っておく事はある」

少し前と何も変わっていない様に見える……

しかしファントムは、
違いを感じ取ったのか、信じる事にした。

ファ

「何故生きている？」

シヌ

「神だ。

奴が直接、俺に罰を与えた。
生き返って制裁者達を抹殺しろと」

ファ

「制裁者達？」

シヌ

「通称

twelve punisher
カザリって奴はそのメンバー……
簡単に言うとは

“転生者”だ

ファ

「転生者？」

てか、そのメンバーって俺やエミリア達も……

シヌ

「それは自分で調べろ。

神はそう望んでいる。

………

言えるなら……

君やエミリアちゃん、ナギサちゃん、シズル君はまだ抹殺対象じゃないって事だ」

ファ

「話せる事と話せない事があるのかよ……
制裁者達の目的は？」

シヌ

「人間への制裁。

俺と似た様な事をするつもりだ」

ファ

「……そりゃ凄い。

さっさと潰さないとは」

シヌ

「言っておくが、奴らは1人1人が強い。
一気に相手にしたとしても2人が限界。
ルシフェルは4人相手であの様だ」

ファ

「大丈夫だ。
俺には……」

シヌ

「コクイントウで作った刀があるから余裕？
だが体を酷く酷使用する」

ファ

「！？ 何故知って……
！！」

シヌはファントムの額に触れた。

ファントムの脳に

星霊祭の記憶が流れ込む。

シヌ

「君はこの祭で刀を使った。
無かった事にされた後は1度も使っていない」

ファ

「ロストの話は本当だったな……」

シヌ

「……………」

制裁者達はまだ5人しか集まっていない。

君達を抜かして最大7人。

傷が癒えるまでは仲間探しはしないはずだ、いつでも戦える準備はしておくんだ」

ファントムを置いて、
屋上から立ち去ろうとする。

ファ

「どこへ行くんだ？」

シヌ

「俺と一緒に星れ……」

じゃなくて、ミレイが生き返った。

神は2人1組でいろって」

ファ

「なら亜空間能力を使えば良いだろ」

シヌ

「神が少し前の俺を

そのまま復活させると思うか？

亜空間能力で使えるのは

- ・ 他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す時
- ・ Aフォトンを生み出す時

それと昔みたいに

Aフォトンは纏えない。

自分を亜空間で治せないからな。
不老不死も取り上げられた。

.....

使えると言ったら.....

- ・ 神病の身体能力の強化
- ・ Aフォトンを纏わず使用
- ・ 亜空間から黒餓を取り出す

今回は俺で倒せるLvだったか.....

君か“虚実”.....

どちらかが制裁者の戦力になれば.....

.....

俺達は負ける」

シヌは立ち去った。

ファ

「……俺“達”……
……すっかり仲間だな」

ファントムは微笑むと、手すりに寄りかかった。

ニューデイズ
オウトク山
グラール教団

教団員でも中々通らない通路の端に、カレンがいた。
ガーディアンズ制服を着ている。

カレ

「……
……一体誰なんだ？」

手に持っている手紙を見る。

どうやら誰かに呼ばれたようだ。

？

「カレン……」

カレ

「！？」

誰もいないはずの後ろから声をかけられ、武器を構えて後ろを見た。

そこには白マントを着た人物がいた。

？

「わわわ！

待ってカレン！」

カレ

「……！」

その声……」

フードを脱ぐ。
正体はミレイだった。

カレ

「ミレイ……」

ミレ

「久しぶりね……
5年振りかし……
……！」

何故生きているか？
何故今になつて？

そんな事を一切聞かずに、ミレイに抱きつくカレン。

カレ

「会いたかった……
本当に……
会いたかった……」

ミレ

「カレン……」

……

……

すみませんカレン。

あまり長く一緒にはいられません……」

カレ

「……え……？」

ミレ

「私は死にましたが、
ある理由で生き返りました」

カレ

「どういう事なんだ？」

シヌ

「ここに居たのか。」

ミレイ、神は離れるなって言っただろ」

いつの間にかシヌが居た。

ミレイを探していたようだ。

ミレ

「すみません」

シヌ

「いや、謝らなくて良い。
気持ちかわからないわけではない」

ミレ

「ありがとうございます」

カレ

「彼は？」

ミレ

「シヌです。」

「私達の助けになってくれます」

カレ

「シヌ……」

「………
まさか、ファントムの言っていた……」

「ムサシジサシを構える。」

シヌ

「嫌だなあ全く」

シヌも臨戦体制を整える。

しかしミレイが割って入った。

ミレ

「シヌさん、弁解と言つのを知って下さい。

カレン、ファントムさんから聞いたシヌさんの印象は良いものではないと思います……

しかし、今は仲間です」

カレ

「……………」

わかった……………」

カレンがムサシジサシを仕舞うと、シヌも警戒を解いた。

ミレ

「いいですか？

詳しい事は話せませんが、私とシヌさんはある意思によって生き返りました。

……………」

目的は……………」

「グラールを守る為」

カレ
「！」

ミレ

「グラールを守るには、私とシヌさんだけでは不可能なんです。
……お願いします。
力を貸して下さい」

カレ

「……………」

……………」

双子なのに水くさいな。
協力するに決まってる。
グラールの為でもあるしな」

ミレ

「カレン……………」

カレ

「で……………私はどうしたら良いんだ？」

ミレ

「はい。」

1週間後……………」

ここオウトク山に事情を知った関係者が訪れます。
私も顔を出します。

それまで私の事を話さないで待っていて下さい」

カレ

「それだけか？」

シヌ

「ガッカリか？

アイツらと戦わないだけマシだと思うけど。

.....

俺は下の町に泊まっているぞ。

君達は、仲良く同じ部屋で寝たら良い。

ああ...それと、仲良い奴にも無闇にミレイの事は話すなよ」

立ち去ろうとするが.....

カレ

「待ってくれ。

今気を使ってくれたな？

なら私も気を使おう。

私がここに泊まれるように手配する」

シヌ

「.....

そうか、お言葉に甘えよう」

カレンが手を差し出す。

シヌ
「？」

カレ

「挨拶がまだだったな。
カレン・ミクナだ」

シヌ

「知ってるけどな……
………」

握手をしない……

シヌ
「ゼロ・ブラック・シヌだ。
よろしく」

何故か握手せずに去ってしまった。

カレ
「？」

ミレ

「ごめんなさい……シヌさんに悪気は無いんですが……」

……

私達に触れる事を怯えているです」

カレ

「??？」

ミレ

「私達のような、フォトンに敏感なヒトにわかってしまっんです。
彼の心が……」

カレ

「心……?」

ミレ

「生き返った時に一度触れたのですが……」

……常人には耐えられない闇を感じました……」

それを知られて、仲間が去っていくのが嫌なんでしょう……」

……

……

彼にとって……」

やっと出来た仲間なんです」

1章：1 敵↓仲間（後書き）

シヌはまだ、人類滅亡を考えている節がありますが……
神の監視下なので、そんな事は出来ません。
若干諦めたのか、仲間を求める感じがあります。

く神の使者+12人の制裁者メンバーく（前書き）

t w e l v e p u n i s h e r の紹介は、ネタバレが若干あります。

く神の使者+12人の制裁者メンバーく

ゼロ・ブラック・シヌ

LV250

性別・男性

年齢・18歳

種族・第1人類

身長・183cm

体重・69kg

タイプ・“絶望”

“嘘”

“狂気”

“信念”

“対価”

“闇”

髪・目立たないオールバック、漆黑
服装・黒い服、黒いコート
所属・神の使者

1年前に起こった、

狂神の信念の首謀者。

ファントムに倒され地獄へ落ちたが、神との交換条件により働いている。

交換条件の内容は……

天界に住まわせる代わりに、生き返って制裁者達を抹殺すること。

現在でも人類滅亡は諦めていないが、神の監視下にいる以上は出来ない。

しかしシヌの考え方が変わってきたのか、諦めかけている。その理由は仲間が一因と思われる。

仲間までいなくても、親近感がわいてきているようだ。

決定的なのはカレンと握手しなかった事だ。

ミレイもそうだが、

フォトンに対して敏感な人物だと、シヌに限って心が見えてしまうらしい。

自分の心を知られて、離れていくのを避ける為に握手はしなかった。

現在はオウトク山のグール教団に部屋を持っている。

一緒に生き返った協力者のミレイは、基本的に一緒に行動しなければならぬ。

恐らくミレイに、シヌを近くで見張らせる為。

神によってシヌの力の半分は使えない。

使える能力は、

- ・ Aフォトンを纏わず使う
- ・ 亜空間能力による他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す
- ・ 神病の症状の身体能力強化

タイプは制裁者達の様な力は所持していないが、シヌを象徴する意味がある。

- ・ “絶望”

ミレイやカレンが感じ取るのはこの感情。

少し前は人間を絶望させるのを良しとしていたが、現在は自ら与える事は無い。

・ “嘘”

制裁者の“虚実”とは少し違う。

虚言癖は自重気味。

・ “狂気”

狂神の信念時に、人間の悪で人類を滅ぼそうとした。

その悪が“狂気”。

・ “信念”

自分の悲劇を生み出さない為に、人類滅亡を“信念”にしている。

・ “対価”

シヌのお礼に関する。

永遠なる信念では明かされなかったが、

制裁者達のある1人に

関係がある。

・ “闇”

亜空間の歪みで生まれるAフォトンを示している。

これは制裁者と似ている。

生き返った為、歳をとり始めている。

神が能力を半分封じているので、

LVが現実的に……

ミレイ・ミクナ

LV250

性別・女性

年齢・18歳

種族・ニューマン

タイプ・フォース

容姿・SEED事件時と同じ

所属・神の使者

5年前のSEED事件時に、
誤って父親に殺害されている。

幻視の巫女であり、カレンとは双子。

死亡後は天界に送られ、神に星霊になってほしいと頼まれる。

グラール教団が出来た頃から星霊は存在しておらず、信仰によって
生まれた神々（ヤオロズなど）を統括する為に星霊に任命された。

自分を神の1人としては見ておらず、あくまでもヒトして存在したい
ようだ。

しかし生き返った際に神の力が少し残っており、良くは思っていない。

LVは約250。

年齢は死亡時からになる。

シヌと一緒に生き返った理由は監視の他にも何かあるようだ。

現在はオウトク山のグラール教団で寝泊まりしている。
星霊という事は伏せている。

・神の使者

神が間接的に人類への干渉を行う為の存在。
狂神の信念時のファントムも含まれる。

今回は、優秀な元人間を選抜している。
(シヌ、ミレイ)

目的は堕天使が構成した“12人の制裁者”
(twelve punisher)
の抹殺だが、
そのメンバーである

ファントム
エミリア
ナギサ
シズル

は、今のところ抹殺対象ではないようだ。
しかも、ファントムには協力をしてほしいらしい。

・ twelve punisher

メンバー

“ 象徴 ” L V

名前

力の使用方向

“ 王権 ” L V ?

?

支配型

“ 運命 ” L V 2 0 0

ナギサ

運命型

“ 食 ” L V ?

?

攻撃型

“金” LV200
ゴールド・シルバシノ
支配型

“拒絶” LV200
カザリ・イリオン
拒絶型

“完全” LV?
ファントム・レガス
?

“愛” LV200
エミリア・ミユラー
支配型

“死” LV200
シズル・シュウ
運命型

“欲情” LV200
シェリー・エクスタシー
支配型

“戦争” LV230

ロドリゴ・ゼル

攻撃型

“拷問” LV200

アンナ・ザ・ブラッド

召喚型

“虚実” LV?

?

?

戦闘時にどんな戦い方をするかは、話の進行でわかります。

明確になっていないメンバーは、次の機会にします。

く神の使者+12人の制裁者メンバーく（後書き）

ふと思ったのですが……

今現在、カレンとミレイは歳が違うけど……
これを双子と呼んで良いのか……？

まあ、同じ時に生まれたんだから
双子ですよ（笑）

歳どうこうの話じゃないですもんね。

今の何の話だったんだろう……

1章：2　く嘘〓真実く（前書き）

どっちかと言うと、

サブストーリーに近いかな？

1章：2　く嘘〃真実く

都市リンヨ

地下都市　カジノ

きらびやかに見える汚い裏カジノで、ルーレットにヒトが集まっていた。

青年が1つの番号だけに全チップを賭けたのだ。
換金したら1億メセタはくだらないだろう。

1チップ〃1万メセタ
と、高レート。

ルーレットにおいて、

1つの番号に賭けての配分は32倍。

勝った場合32億メセタと、普通のカジノでは破綻的金額だ。

しかしこの裏カジノでは、問題が無いようだ。

ディーラー

「よろしいですか？」

賭けた青年に問う。

青年

「問題ありません。
早く回しましょう」

その肝が座った態度に、野次馬はざわつく。

ディーラーがルーレットを回す。

ボールが放たれ、だんだんと遅くなっていき……

……

……

……

見事に賭けた番号に当たった。

その瞬間に歓声が響いた。

ディーラーも驚きを隠せない。

……いや、違うところに驚いているようだ。

青年

「どうしました？」

もう一回賭ける前に換金してほしいんですが？」

実はこの青年……

1チップから始めて、連続で1つだけの番号を当てているのだ。

ディーラー

「わかりました……

すぐにご用意致します」

そう言うと、換金所の奥へ消えていった。

ディーラーが居なくなると、野次馬の1人が話しかけてきた。

野次馬

「アンタすげえな！

（なんだい、イカサマしてのかい？）」

耳打ちしてきたが、青年はハッキリと答えた。

青年

「イカサマ？」

……とんでもない。

むしろ、イカサマしてたのはディーラーですよ」

野次馬

「んな事はわかってる。

どうやっ……

青年

「全て“真実”

全て“嘘”

……わかるんですよ。

何となくね……

だからここで止めておくんです」

野次馬

「そうはいかねえ」

カチャ

青年は頭に銃を突きつけられた。

他の野次馬にも。

青年

「そういえば、お客さんの数が減りましたね。貴方達が出ていかせたのですか？

ここを取り仕切るチューザレファミリーですよ？」

チュ構成員

「頭が良いなあ。

俺達のイカサマが通じないわけだ。

……で？ どうやってイカサマしたんだ？」

青年

「言ったでしょう？

何となくわかるって」

チュ構成員

「そうやってヒトは嘘をつく。

俺はそういうのが嫌いだね……」

青年

「その通り、“嘘”です。

しかし貴方に“人間”の何がわかるんです？

貴方も所詮“人間”という“ゴミ”でしょう？」

構成員がスタンモードをOFFにした。

チユ構成員

「10秒以内に答えろ。」

1……2……

青年

「だいたい貴方達の存在意義は何ですか？」

3……4……

青年

「結局愚かしい事をしただけで死ぬ存在」

5……6……

青年

「なら僕が存在意義を与えましょう」

7
……8
……

青年

「貴方達に存在意義は元々無い。
死ねよ……」

クソゴミクス野郎共」

9
……10
……！」

銃の引き金が引かれた。

しかし……

鉛弾が発射されない。
全員がだ。

チユ構成員

「!？」

青年

「全員の銃に弾を入れ忘れた。
それが“真実”です」

両手の袖から鉄扇を取り出して、構成員達の喉を斬った。

血飛沫を鉄扇で受け止める。

青年

「汚い血をかけないで下さい。
どこまで行っても使えない存在だ」

シュッ！

と、血を飛ばし……

生き残りの構成員を探しに向かった。

警備室を制圧。

事務室を制圧。

個室を制圧。

最後に換金所へ行く。

扉を開けて、隠れているヒトを殺していく。
容赦など全く無い。

ある程度始末し終わると、1人だけ生き残りを作る。

構成員

「ヒイ！ 助けて！」

青年

「うるさいですよ。」

「ここ、開けて下さい」

金庫の前に連れて行って開けさせた。
中には大量の現金があった。

青年

「32億メセタ。
早めに」

構成員

「は……はい……」

アタッシュケース32個にメセタを詰め終わる。

青年

「長かったですね。
でも助かりました。

t w e l v e p u n i s h e r には資金が必要なんで……

……

“お礼”として、半分は貴方にあげます。
16個でも重いんですけど」

ケースの大半をトランサーに仕舞い、残りはキャスターを使って運ぶ青年。

ヒトを殺した事を何とも思っていない……

それほど……

すがすがしい顔だった。

♪

ハル

「ハイ！

グラールチャンネル5。

ニュースキャスターのハルです！

今日のニュースを

ピックアップ！」

ハル

「ニューデイズ

都市リンヨで昨夜発生した、裏カジノ襲撃事件。

その新情報が入りました。

生存者のチューザレファミリーの構成員に事情聴取していたところ

……

構成員の方は支離滅裂な事を口走りながら、舌を噛み切ったとの事です。

一命は取り止めたものの精神に異常があるとの事で、今日未明に精神病院に移送された模様です。

手がかりが生存者だけだったとあって、1からやり直しになりそうです。

……尚、裏カジノを経営していたチューザレファミリーのボス……

キログマ・チューザレは、監視カメラの映像の公開を頑なに拒んでおり、ガーディアンズは情報公開を申し込み中との事です。

また、カジノから消えた総額16億メセタの行方と同時に、カジノ自体に異常な違法性があったとして、証拠が集まり次第に強制捜査を始めるとの事です。

この事件に対して、早くも懸賞金をかけるとの事です。
有力な情報がある方はガーディアンズにご一報下さい」

楕円形のテーブルに座っている制裁者達。

カザリは片腕が無くなっており、アンナは頭と首に包帯を巻いている。

中央の3Dテレビで流れているニュースを見終わると、電源を消した。

カザ

「チューザレファミリーの口止めも危ういっすね〜。
強制捜査なんて……」

ゴー

「私が金を払ったんだ。

……それと、心配は要らない。

既に証拠の監視カメラの映像は引き取った」

ロド

「“ゴミ”の中でも

“ゴミ”な輩じゃ……

口止めで400万。

映像はどれ位じゃ？」

ゴールドは手の指を10本立てた。

シェリー

「10メセタ？」

アンナがプラカードを出す。
喋れないからだ。

(アン)

そんなわけないでしょ。

1000万メセタよ。

頭使いなさい、

やり。ん野郎。

シェリー

「1000万!？」

大層な額だね」

カザ

「良いんじゃないの？」

16億になって返ってくる」

ロド

「それはどうかの……」

“虚実”の事じゃ。

我々 twelve punisher の中でもひねくれ者……
うやむやにするかもしれないぞ？

………

それに……

元はシヌの仲間じゃ。

最後に我々についたが、逆も無いわけでは無い」

カザ

「……………」

ともあれ。

こっちの仲間になれば戦力になるし、“食”も復活できる、僕ちん
やアンナさんの怪我也治せるでしょう。

……………」

早く見つけよう」

いつになく真剣な顔をするカザリ。

他の4人も真剣な顔し、
イスから立ち上がった。

1章：2　〈嘘〃真実〉（後書き）

青年

Lv？

性別・男性

年齢・20歳

種族・ヒューマン

身長・178cm

体重・66kg

タイプ・“虚実”

運命型

召喚型

髪・後ろのトゲトゲが

目立ちにくい髪型

灰色

服装・イロハフブキ、黒

所属・twelve punisher

“虚実”を象徴する青年。

ヒトを殺す事に容赦無用かつ、何とも思わない。

カジノで手に入れた大金は、制裁者達の為に使うつもりのような。
しかし元はシヌの仲間だったようで、ひねくれ者のようだ。

“虚実”の力は、

制裁者達の中でも異質でありファントム（制裁者）と同等に近い。
“虚実”は嘘だけではなく、真実までも司る。

・運命型

事実を根本的にねじ曲げれる。
構成員の銃は元から鉛玉が入っていたが、入れ忘れたという
真実を作った。

しかし制限が存在している。
目に見えていない場所でしか影響を及ぼせない。
他の存在に影響を及ぼせない。

・召喚型

嘘を作り出す能力。
非常に強力な能力ではあるが、制限がある。
他の存在に影響を与えられない。
元々存在しないもの
（天界と地獄の存在も含まれる）
は作り出せない。

武器として使う鉄扇は、愛用品。

彼岸島っぽい？

若干意識してます。

雅好きです。

1章：終　　く招待状　　（前書き）

後日談って雰囲気です。

セリフ多め。

1章：終　　ゝ招待状ゝ

ケイリヨン刑務所襲撃事件から4日後……

クラッド6

リトルウイング

居住区　ファントム自室

グラールチャンネル5の

裏カジノ襲撃事件を見終わると、俺はテレビの電源を消した。

ファ

「昨日の事件か……

……

ハア……

嫌な事思い出した……」

実は昨日……

マリと酷い喧嘩をしてしまった。

兄貴が入院した日から質問攻めにされて、ついカツとなってしまう……
今は兄貴の居る病院だ。

マリだけではない。

ロスト、リリース、タイラー、ヴィヴィアン、バル……
あの場に居た知り合いに、かなり不審がられている。

シヌの事を話したのは間違いだった。

ファ

「ハア……」

……
そういえば、オウトク山に行くのは3日後……
マリも呼ばれてるのか……
どうにか仲直りしないと……」

俺はビジフォンの記録機能に、仲直りの言葉を考えて書き始めた。

リトルウィング
カフェ

姉弟揃ったミカとワイナルが、仕事の話をしながら優雅に紅茶を飲んでいる。
いつもの服装だ。

ミカ

「この前の研究は進みました？」

ワイ

「うーん……これが難しくてね」

……シズル君がガーディアンズから貰ったシールドライン……
あれ作ったりゼンって言うヒトは、刑務所に入ってるから進まないんだよね」

ミカ

「では、私の課題が終わり次第に手伝いましょう」

ワイ

「ありがとう。」

姉さんがいれば百人力だよ」

シヌ

「姉弟で午後のティータイム。
幸せそうだな」

ミカ「!？」

ワイ「!？」

気配を消して、シヌが近くに座っていた。

ミカ

「シヌ!？」

何故……!？」

シヌ

「そんな事は別に良い」

ワイ

「君は死んだと……」

シヌ

「死んだ。」

……だから？

些細な事だ。

……

俺がここに居られるのには制限時間がある。
話を済ませよう」

ワイ

「君の話？」

聞きたくないね」

シヌ

「面倒くさいな……」

じゃあ一方的に話す。

3日後にオウトク山に来てくれ。
君達がグラールを救いたいなら」

背中を向けて歩き出す。

ミカ

「どういう事です？」

ワイ

「僕が思うに、君がグラールを滅ぼしそうなんだけど」

シヌは背中をみせながら……

シヌ

「聞く気はあるか？」

と聞いた。

ワイ

「……ある」

ミカ

「正直、心を許せませんが……
グラールに関してなら……」

シヌ

「そう言ってくれると思った」

都市リンヨ

ルシフェルが入院している病院

704号室

病室内ではリリス、ヴィヴィアン、マリが居た。
ルシフェルはまだ意識不明だ。

マリは頭を壁に押し付けながら、頂垂れている。

マリ

「ハア……」

ファントムと同じ様なため息だ。

リリ

「早く仲直りすれば良いじゃない」

マリ

「仲直りしたいけど……」

リリスさんはムカつきません？」

リリ

「副隊長だけじゃないわよ」

マリ

「？」

リリ

「ヴィヴィアンさんにロストさんを観察してもらったら……」

ヴィ

「恐らく何か知っている雰囲気です。」

ルシフェルさんも、少し前と変わったところがあります」

マリ

「……男って……」

Gコロニー

ガーディアンズ

総裁室

総裁室にバルとライア総裁、カーツ司令官、タイラーが集まっていた。

バア

「全員に届きましたか」

バアル達が手紙を、目の前に掲げる。

ライ

「オウトク山……」

「しかもこの面子……」

カー

「昔みたいだな」

タイ

「5年前か……」

「懐かしいものだ」

バア

「……しかも送り手が、ミレイ・ミクナ。
ただ事じゃないですね」

手紙を仕舞う。

バ
ア

「納得できる話を期待しましょう」

1章：終　く招待状く（後書き）

なんか、

中途半端な感じですね。

2章：0 ～ペテン師～

ニューデイズ

オウトク山

グラール教団

この日……

ミレイとシヌによって集められたヒト達は、会議室に集められていた。

マリ

リリス

ロスト

ヴィヴィアン

バアル

カレン

ライア

カーツ

タイラー

ミカ

ワイナール

何故かミカとワイナールがいる……
そしてファントムは別室……

会議室

円形のテーブルに座敷式と日本的雰囲気であり、会議室とは少し違う感じがした。

ミカとワイナールに会った事のないヒトが集まって、珍しいものを見る目で話している。

バア

「ルシフェルから話は聞いてます。
僕はバアル・セレンサーです」

ライ

「ミカが亜空間事件を……
ワイナールが欠片事件を解決したんだっただな？」

ヴィ

「凄いですよね！
お会いできて嬉しいです」

タイ

「ヴィヴィアンもそれと同等の事をしただろう」

かつて起こった事件の解決者であり、現代に生き返った存在……
それで称えられた事は無いので、おどおどしてしまふ。

カレ

「……………」

カー

「君は何か知っているようだな」

カレ

「何の話だ？」

カー

「落ち着き過ぎだ。」

君の双子の妹からの手紙だ。

3日前に届いて知っていたとしても、落ち着いていられないはずだ。

3日前よりも前会っていたのが自然な考え方になる」

カレ

「……………」

まあそれは、皆気づいているだろうな。

……………

…………… 1週間前から会っている。

未だに詳しい話は聞いていないがな……」

ミレ

「皆さん、お待たせしました」

襖を開け、ミレイが姿を現した。

会議室とは違う部屋

部屋にあるモニターが会議室を映している。

シヌ

「ここで見ていてくれ」

そう言い残して出ていったシヌ。
ファントムは不審に思ったが、昔とは違うのはわかっているので、指示に従う事にした。

ファ

「何で俺だけ……」

不服に思いながらも、
会議室の様子を見始めた。

会議室

ミレイも姿を現したが、シヌも後ろについていた。

マリ

「…………シヌ…………」

ライ

「アイツがシヌ？」

まだ子供じゃないか」

カー

「あんな子供が人類滅亡を企てるとは…………」

シヌ

「やあやあ！」

俺にアツサリと仮死状態にされたグラールの代表達。

さっさと修行編でもやって強くなったらど…………痛…………！」

シヌの足を思いつきり踏むミレイ。

ミレ

「少し黙ってて下さい…………！」

シヌ

「わかりました…………」

座布団に座り、揃ったヒトを確認する。

ミレ

「揃いましたね。
ではまず……」

マリ

「あの……！」

話を始める前にマリが声をかけた。

マリ

「ファントムは……
来ないんですか？」

心配している声だ。

(ファ)

「やっぱり可愛いな……」

ミレ

「彼は私の命で動いています。
彼に話はしてあるのでご心配なく」

マリ

「そう…ですか……」

(ファ)

「ミレイ君、嘘をつくなよ」

ミレ

「話を戻しますね。」

………

「単刀直入に言います。
今グラールに……
危機が迫っています」

(ファ)

「いきなりRPGになったな……
いや、ロケットランチャーの方じゃなくて」

ミレ

「私はシヌさんの力によって生き返りました。彼に聞いてわかったのですが、彼は1年前の事件で何とか生き残りグラールに戻ったそうです……ファントムさんに見つかからないように過ごしていたところ、グラールを滅ぼそうとする組織を発見し、壊滅の為に私を生き返らせました」

カー

「わからんな。」

シヌと言う男はグラールを滅ぼそうしたんじゃないのか？」

シヌ

「俺以外にやらせるわけないだろ。考えるポンコツロボ

……痛！」

右斜めにいたシヌに、座布団を飛ばす。

ミレ

「その組織の正体……」

………

それは旧文明人。

旧文明人の意識をその場で引き剥がすには、私の力が効果的だそうです。

………彼らの目的は旧文明の復活。

2年前に、カムハーンと言う人物がしようとした事を行う気です。
私はそれを許すわけにはいきません。
貴方達もそのはずです」

タイ

「愚問だな。

ここに居る全員が許さない」

ミレ

「はい……」

そこで、旧文明回帰を阻止する為に組織を探してほしいのです」

ライ

「なるほど。

アタシ達位の地位なら、探すのは効率的だな」

ミレ

「それだけでは有りません。

組織の人員の中には私達に関わった人物もいるのです」

カー

「もしや、

ロドリゴ・ゼル大佐と

シェリー・エクスタシー少尉も？」

ライ

「誰だい？」

カー

「同盟軍に所属している兵士なんだが、少し前から連絡が取れない

んだ」

タイ

「ローグスにも1人いる。

資金援助をしてくれていた

ゴールド・シルバシノ

彼も数週間前から行方不明……

というか、ケイリヨンの森で見たぞ」

ライ

「私は……

……

そういえば、ガーディアンズから推薦されていた学生がいたな……

名前は

カザリ・イリオン

だったな」

ミレ

「皆さん心当たりがありますが、他にも関わった人物がいます。

彼らを救う為にも力を貸して下さい」

全員が頷く。

誰も否定していない。

ミレ

「ありがとうございます。」

組織の詳細はシヌさんがお教えます。
すみませんが、私はこれで……」

座布団から立ち上がり、会議室を後にした。

別室

モニターを見ている
ファントム。

ファ

「旧文明人……？」

その組織のメンバーに乗り移っている……

エミリア達はまだ大丈夫なのか？

………

待てよ、俺はどうなる？

俺は旧文明人だろ」

ミレ

「お待たせしました」

後ろの襖から、ミレイが出てきた。

会議室

話し手が変わり、シヌが組織について話す。

シヌ

「てことで、俺から説明させてもらう。
組織の名は

e i g h t p u n i s h e r

8人の制裁者だ。

その名通り8人で構成されあり1人1人がLv200、またはそれ以上。

バアル君とタイラー君が戦ったのはLv230のロドリゴだ。

個人的に戦っても死ぬだけだから、見つけたらミレイか俺に連絡しろ」

リリ

「シヌ、彼らが旧文明人なら貴方は知っているでしょう？」

ロス

「俺達は聞いた事が無いぞ」

シヌ

「公にはされていないカムハーンの部下だ。

俺よりかはミカとワイナルの方が知っている。

俺はカムハーンの政治や組織体制には口出ししなかったからな」

ミカ

「乗り移っている旧文明人は、その体の人物と同じ名前をしていますが……」

ワイ

「彼らってカムハーンに忠誠を誓っていたから、カムハーンと同じ事をして不思議じゃないね」

カレ

「……………」

ヴィ

「……………」

シヌ

「まあ、束になって戦えば倒せるかもな。

話せる相手がいるなら話して、協力してもらえ。

……あとは……

メンバーの名前か？

メモしろよ。

カザリ・イリオン

ゴールド・シルバシノ

シェリー・エクスタシー

アンナ、本名不詳だ。

胃呪魔・豪飢

（イズマ・ゴウキ）

アルベルト・キツシャー

リゼン・シュレイド」

バア

「！！ リゼン！？

アイツもなのか！？」

シヌ

「まだ乗っ取られていなかったから、

戦力確保の為にケイリオン刑務所に入っていたリゼンを、奴らは拉致しようと考えた。

もつとも、君達が囚人を移動させたお陰で何ともなかったがな」

立ち上がるシヌ。

シヌ

「怪我したら俺が治してやる。

今日は深入りせずにこれで解散。

気が向いた時で良いから、手伝ってくれ……

じゃあな」

ミレイと同じ様に会議室を出ていった。

別室

ファントムとミレイが居る別室に、シヌも到着する。

ファ

「……………あの話……………」

シヌ

「気づいたか？」

全部、嘘だ」

ミレ

「無闇に神の事は話せません。

この次元のバランスが崩れて、元々無かった事になります。

カレンには神ではなく、星霊によって生き返ったと言いました。

カレンの雰囲気グイグイアンさんに疑われた感じがありますが、

問題無いでしょう」

ファ

「……………」

本当は俺とエミリア達合わせて12人だな？

奴らの正体は何なんだ？」

シヌ

「行っただろ。

それは自分で知るんだ」

ファ

「何故？」

シヌ

「知るか。」

神がそうしろって言ってんだ」

ファ

「……………」

……旧文明人じゃないとしたら……
ミカとワイナルに嘘を言わせてるな？」

ミレ

「ええ、私がシヌさんに許可を出しました。
信憑性が増したでしょう？」

ファントムは呆れ顔をして、壁に寄りかかる。

ファ

「……とんだペテン師達だな」

ミレ

「どう思おうと構いませんが、これは貴方の性格を考慮しているんです」

ファ

「どついう意味だ？」

シヌ

「仲間思いつてのは……」

いつか何かを犠牲にしないといけない。
君の場合は……心だな」

ファ

「心……？」

シヌ

「いつかわかる。」

その時には

twelve punisherの正体がわかっていと思う……

……

話す事は話した。

マリちゃんと仲直りしてこい」

ファ

「何で知ってるんだよ」

しかし仲直りしたいのは山々なので、部屋を後にした。

シヌ

「……………」

ミレ

「今になって仲間を求めれば、貴方は犠牲を払う事になりますよ」

シヌ

「
.....
ああ、そうだな」

ファントム同様、シヌも部屋を後にした。

2章：0 ～ペテン師～（後書き）

twelve punisherの全員の名前がやっと判明しましたが、読みづらくてすみません。

リゼン・シュレイド

胃不魔・豪飢

アルベルト・キッシャー

は別項で紹介します。

ゝ王、食、虚ゝ（前書き）

“王権”追加

“食”追加

“虚実”更新

チューザレ追加

何のインフォメーション？

く王、食、虚く

リゼン・シュレイド

L v 2 1 0

性別・男性

年齢・20歳

種族・ニューマン

身長・173cm

体重・55kg

タイプ・“王権”

支配型

髪・7：3分け、青

服装・燕尾服

所属・twelve punisher?

何百年も昔に起こった

4種族の大戦争を終結させたデイグニティ家の末裔。

バアルの親戚であり、デイグニティ家の先代はレディである。

デイグニティ家に仕えていた頃……

狂神の信念時の惨劇に異常な恐怖を覚え、第2の狂神の信念を阻止する為に、デイグニティ家の当主になってグラールを統治しようと企てる。

しかし誤算が重なったせいか計画は頓挫。

テロリスト犯として

ケイリヨン刑務所に服役していた。

居場所を掴んだ

t w e l v e p u n i s h e rは刑務所を襲撃するも既に囚人は移動されており、現在は別の刑務所に服役している。

現在、t w e l v e p u n i s h e rに対して仲間意識は無い。

胃不魔・豪飢

(イズマ・ゴウキ)

L v 2 0 0

性別・男性

年齢・31歳

種族・ビースト

身長・223cm

体重・209kg

タイプ・“食”

攻撃型

髪・セミロング、緑

服装・橙ジャージ

赤パーカー

所属・t w e l v e p u n i s h e r?

タイプは“食”だが、

別に太っているわけではない。
逆にムキムキだ。

異常にカロリーを消費する為か、行動後は何かを“食”さなければ
ならない。
人間的な食べ者を摂取しないと、ヒトから建物まで何でも“食”し
てしまう。

実は、狂神の信念時にクリンサ街で暴れていたOFMの正体である。
その為、死亡している。

アルベルト・キッシャー

Lv250

性別・男性

年齢・20歳

種族・ヒューマン

身長・178cm

体重・66kg

タイプ・“虚実”

運命型

召喚型

髪・後ろのトゲトゲが

目立ちにくい髪型

灰色

服装・イロハフブキ、黒

所属・twelve punisher?

twelve punisher内でもかなりの実力者。かつ、メ
ンバーから変わり者呼ばわりされている。

制裁者の中でも強力な力、“虚実”を司っている。

（能力については1章：2の後書きに記述）

都市リノヨにある裏カジノを壊滅させた人物であり、それに伴った
ヒト殺しを何とも思っていない。

怒りでもなく、快楽でもなく……

何も感じない。

………

例えるなら、人間が息するのと同じ。

日本的な文化を好んでいるのか、

服にイロハフブキ、

武器に鉄扇を使用する。

その為かはわからないが、日本刀を使うファントム（制裁者）とは
仲が良い。

元々twelve punisher達の仲間ではなく、シヌと知
り合いだったようだが……？

キログマ・チューザレ

性別・男性

年齢・49歳

種族・ビースト

身長・191cm

体重・80kg

髪・後ろに束ねている

茶色

服装・特注のタキシード

白

所属・チューザレ

ファミリー

ニューデイズの

都市リノヨに根付くマフィアのボス。

地下で裏カジノを経営していたが、アルベルトによって破壊されファミリーの2/3が機能していない。

壊滅後……

ガーディアンズにカジノの違法性を追求され、大人しくしている。

ゴールドに買収されており、口止めに400万、監視カメラの映像に1000万を貰っている。

しかしながら罪悪感を感じており、早急に犯人を見つけて舎弟の為に報復したいようだ。

ゝ王、食、虚ゝ（後書き）

“虚実”の能力で
楽しんですみません。

2章：1　く仲直りく（前書き）

自分の変態性が物凄く
出ています。

2章：1　く仲直りく

オウトク山での会議よりも、1日前……

パルム

クリンサ街跡地

狂神の信念時に、惨劇の舞台になった街。

今となつては誰も住んでおらず、血の跡や壊れた建物しか残っていない……

そんなゴーストタウンを誰か歩いている。

アル

「重いですね……」

リアカーにアタッシュケースを乗せて引っ張っている、“虚実”のアルベルトだ。

アル

「……………」

「……………ここですか……………」

やがて、旧倉庫地区のある場所で止まった。
焼けて黒くなっている地面がある。

アル

「“嘘”として。

胃不魔・ゴウキさん……………」

貴方はここでファントムさんに倒された」

そう口に出す……………」

すると、黒い焼け跡が無くなっていき……………」
身長2mを越す大男が突如現れた。

彼が胃不魔・ゴウキ。

ゴウ

「……………ゲホ！　ゲホ！

……？
……「ここは……」

アル

「おはようございます。
つと言っても今、夜ですけど」

ゴウ

「……誰だお前？」

アル

「今のゴウキさんが知らなくて当然ですね」

アルベルトはゴウキの首に手刀を食らわし、気絶させた。

アル

「皆さんと会えば……
自分が何なのかわかりますよ」

リアカーのアタッシュケースの上に乘せると、また歩き出した。

現在

ニューデイズ

オウトク山

グラール教団

会議が終了して各々解散する……

……が……？

ヴィ

「皆さんは……」

変だと思いませんでしたか？」

ヴィヴィアンが、解散しようとするヒト達に問いかける。

ライ

「？……何が？」

ヴィ

「カレンさん、

妙に落ち着いていたし……

……話が……強引じゃないですか？」

募っていた疑問を口に出してしまう。

カレ

「別に……私は……」

リリ

「珍しいわね、ヴィヴィアン。
そんなに強引だった？」

タイ

「そうだな。

強引過ぎるわけでもない。

証言者もいる」

証言者とはミカとワイナルの事だ。

ライ

「まあ裏に何か有ろうと無からうと、グラールの為なら構わないさ。
……そうだろ？」

ヴィ

「

……
そうですね……

……

……
ごめんなさい……」

すぐに立ち上がって、
最初に出ていってしまった。

マリ

「

……
ファントム来てないかな？」

マリも立ち上がって、
出ていった。

バア

「僕はリゼンに会いに行こうかな」

ライ

「まだ仕事が残ってるだろ」

バア

「そうでしたっけ？」

ライアとバアルが出ていく。

カー

「では私も帰還するとしよう」

カーツも出ていく。

タイ

「私は船に戻っている。」

マリがついてくるかどうか聞いといてくれ」

リリスとロストに言い残し、船に戻ってしまった。

カレン、リリス、ロスト、ミカ、ワイナールが残る……

ロス

「ま、ヴィヴィアンが言った事は間違っではない」

突然ロストが喋り出した。

リリ

「どういう意味ですか？」

ロス

「……俺もカレンが何かを隠してるって事はわかる。会議が始まる前から薄々感じていたんじゃないか？」

リリ

「……………」

カレ

「……………」

……私は……

ロス

「まあ、カレンが何を隠そうと知ったこっちゃない。
総裁の言った通り、グラールを救う為なら嘘や隠し事1つや2つ、
どうって事ない。」

.....

..... 問題はミカとワイナルだ」

ミカ「.....！」
ワイ「.....！」

ロス

「リリスも気づいてるだろ。」

シヌに聞かされた部下は、太陽王の組織に存在しない」

カレ

「何.....？」

ロス

「そこまでは聞かされていないのか.....」

リリ

「私達の組織は、太陽王の組織を調べ尽くしましたからね。」

.....

実際、どうなんです？」

ミカとワイナールに問いかけた。

ミカ「……………」

ワイ「……………」

白状しない2人……

リリ

「黙っているという事は……

嘘を言った……

……いや、嘘を言われたという事ですネ？」

シヌ

「そこまでだ」

まるで見計らったかのように会議室へ入ってきた。

シヌ

「ロスト君リリスちゃん、勘が良すぎる。」

細かい事は気にするな」

一瞬にしてロストとワイナールの額に触れる。

すると意識を失って倒れてしまった。

カレ

「!?!? 何をした?」

シヌ

「あらかじめ用意していた記憶を流し込んだ。起きた頃には疑問は無くなっている。

……カレンちゃんも……

いじくられたくなかったら深追いはするな。

星霊は少し強引でも

グラールを救いたいんだ……

………

さあ、ミカ達は仕事の時間じゃないか?
会社に遅刻するぞ」

ミカ

「シヌ……」

ワイ

「僕達が真相を知る時は来るのか?」

シヌ

「……………」

来ない……………」

来た場合、グラールはバランスが崩れて滅びる。

……………」

……………」それを阻止する為にファントム君はいる。

彼が全てを知って引き受ける。

……………」

神頼みならぬ、人間頼みだな」

教団内廊下

トボトボと歩いている
ヴィヴィアン。

後ろからマリが追いかけてくる。

マリ

「意気消沈って感じだね？」

ヴィ

「マリさん……」

私……

自分の事が許せません……

あんな風にヒトを疑って……

グラールを救う為ならって答えも出てたのに……」

マリ

「仕方がないよ……」

誰だって他人を疑うし、答えを見落としてる時だってある……

……
って言っても、

ヴィヴィアンの疑問は間違ってたないよ」

ヴィ

「？」

マリ

「カレンさんが何か隠してるのは明白。

ミカさんとワイナルさんも嘘言ってる。

……それに……

ファントムもお兄さんもロストさんも、何か黙っている。

……

男ってのはどうしてそうかな……

たぶんファントム達はその中でも特殊だろうけど」

ヴィ

「男のヒトって、そういうものなんですか？」

マリ

「良いところ見せたいんだよ。」

ファントムは仲間思い過ぎだからだけど」

ヴィ

「なるほど……」

まだ勉強不足ですね私……」

ヴィヴィアンが微笑んだ。

マリもつられるように微笑んだ。

それを廊下の曲がり角で聞いているファントム。

ファ

「……………」

(ファ)

おかしいな……

マリの読心術が明確なものじゃない。

これまでは読み取った事全てを言い当てたのに……

………

もしかして神関連の事は読み取れないのか？

俺が初めて神と遭遇した後も聞かなかった……

ファ

「……まあ良いか……」

ヴィ

「何だか落ち着きました。

ありがとうございます……！」

「……そういえば、この後どうするんですか？」

マリ

「ファントムを見つけて謝らせる。

アタシの気分が良かったら、隠し事も聞かないであげようかな……
て」

ファ

「何だよそれ……」

ヴィ

「では、リリスさんとロストさんと一緒に帰りますね」

マリ

「うん。じゃあね」

ヴィヴィアンに手を振るマリ。

ヴィヴィアンは走りながら手を振り返した。

マリ

「ふう……」

早くファントムを探そう」

ファ

「……俺はここだぞ」

後ろから声が聞こえて、ビックリするマリ。

マリ

「ほわぁー!!」

……ってファントムかい!」

ファ

「元気だな」

マリ

「うるさい。」

………

もしかして聞いてた?」

ファ

「んゝ、まあな」

マリ

「じゃあわかるわよね?」

手を広げるマリ。

マリ

「自分が悪いと思ってるなら抱きついて」

ファ

「え……？」

君にも落ち度が……

マリ

「何か言った？」

ファ

「いえ、何でもないです」

自分よりも10cm以上も背の小さいマリを抱き寄せる。

マリはファントムの背中に手を回し、頭を胸に当てた。

ファ

「やっぱりマリは可愛いな……」

マリ

「それで許してもらうつもり？」

……次は……」

胸から頭を離し、ファントムの顔を見る。
ほんの少し口をすばめる。

ファ

「わがままな子だな」

マリの頬に手を当てて、濃厚なキスをする。

マリは満足そうな顔する。

同時に頬がピンク色になっていき、恍惚な笑みを浮かべる。
少しすると顔を離れた。

マリ

「正解。

望み通りにしてくれてる」

だんだんとマリの体が火照っていく。

マリ

「ハア……ハア……」

もう3日もしてないよう……

ファントムにはムカついていたけど、すごくしたかったんだよう?」

息が荒くなり、甘い声を出す。

マリ

「我慢出来なくて自分で慰めたけど……

全然満たされなくてえ……

やっぱりファントムじゃないとムリィ……

……

お願いファントム……

してえ……」

その場で上着を脱ぎ始める……
しかしファントムが止める。

ファ

「帰ってじっくりすれば良い」

マリ

「ふえ〜ん……

意地悪う……」

涙目になるマリだったが、ファントムに手を差し出されて繋いだ。

ファ

「帰ろう」

マリ

「うん……！」

マリは目の涙を拭いた。

2章：1　く仲直りく（後書き）

カレンは、星霊がミレイを生き返らせたと思っています。

ミカとワイナルは、星霊ではないと思っています。

ロストとリリスは、意識を取り戻した後に何故か納得しています。

何故ファントムだけに秘密を言うのか？

世界のバランスがおかしくなるから、必要最低限のヒトにしか言えないのはありますが、

秘密を知ったら、仲間はファントムを戦わせまいとするでしょう。

2章：2　く悪夢・血く（前書き）

果たして、この夢は何なのか！？

2章：2　く悪夢・血く

ベチャ……ベチャ……

真っ赤な血がリトルウィングのロビーに張っている。

ベチャ……ベチャ……

血だけではない、ヒトのと思われる肉片や内臓が散らばっている。

ベチャ……ベチャ……

血の上を歩く少年。

血に映った少年の顔……

頬に血をベツトリとつけている……
ファントムだった。

無表情

その言葉に尽きる顔だ。

持っているサンゲは真っ赤に染まり、
鈍い光を放っている。

ベチャ……ベチャ……

……

……

事務所の前で止まる。

そこには、

腕と足と胴体と……

頭は無かった……

しかし、それらしき肉片がある……

ナギサよりかは短い黒髪をしている。

胴体に纏っている服……

それは元々ファントムの私服だった服……

赤いブレイブスコート。

そう……

この遺体はマリだ。

ファ

「……マリ……？」

誰……が……

……俺？……

俺が殺した？

……そんな……バカな……」

ガシッ！

マリの腕がファントムの腕を掴む。

ファ

「！！！」

足もファントムの足に絡む。

バシャア！

腕と足に転ばされる。

赤原礼装の黒い部分が赤くなっていく。

同時に胴体が近づいてきて、ファントムの胸に乗る。

ファ

「や……やめてくれ……」

肉片と化していた頭部がズルズルと動いて、
ファントムの顔の横にたどり着く。

口と思われる場所が少しずつ動く。

マリ

「皆……死んだね……」

ファ

「う、うわあああああああ……!!」

目の前が真っ赤に染まった……

クラウド6
リトルウィング
居住区 ファントム自室

ファ
「っは!!」
……ハア……ハア……
ハア……ハア……

.....
.....
夢か.....

.....」

隣で寝ているマリを見る。
熟睡している。

帰ってから休み無しでしていて、マリが失神するまでしていた。

服を着る気力も無い程疲れていたので、2人共裸だ。

ファ

「.....」

マリにかかっている布団を捲る.....

可愛い寝顔に綺麗な肌、豊かな胸.....

夢で見た状態ではない事に、ファントムは安堵する。

ファ

「…………何て夢を見てんだ…………俺は……………」

時間を確認すると、
まだ朝の4時だった。

ファ

「……………」
すっかり目が覚めたな……………」

ベッドから降りて、落ちているトランクスを履いた。
次にフロンティアウイングのスボンを履いた。

冷蔵庫まで行き、甘いオレンジジュースを取り出して飲む。

ファ

「何だったんだ……………」
あの夢……………」

残ったジュースを冷蔵庫に仕舞う。

マリ

「ファントムウ」

どこ？」

マリの甘い声が聞こえてくる。

どうやらまだ満たされていないようだ。

ファ

「3日我慢しただけで凄い反動だな……」

先ほど見た夢を頭から消し、ベッドに向かった。

2章：3 〽別の仕事〽（前書き）

風邪ひいて頭回らない

（４、）

2章：3　　別の仕事

オウトク山の会議から

1日後……

クラッド6

リトルウィング事務所

ファントムはいつも通りに事務所へ行き、仕事が無いかチエルシーに確認をしてもらっていた。

マリは動けないとか言っただけで寝ている。

（ファ）

俺だって体ガチガチだったの……

心の中で愚痴る。

チェ

「ファントム」
ファントム」

気づけばチェルシーが呼んでいる。

ファ

「ん？ ああ、すまない。
どうしたんだ？」

チェ

「仕事ヨ、仕事。
サッキコレ来タネ」

依頼書に目を通す。

依頼者は

ガーディアンズ
機動警護部隊長のバアル

内容は……

5日前に起こった裏カジノ襲撃事件で明らかになった、
被害組織チューザレファミリーの違法カジノの容疑が固まったので、

家宅捜索を行う。

傭兵を派遣してほしい。

ファントム推薦。

という内容だが……

ファ

「リトルウィングと関係ないだろ」

チェ

「ソウ言ワズに。」

リトルウィングは来ル者拒マズヨ」

ファ

「まあそうだが……」

(ファ)

俺を指定……か……

ファ

「じゃあ行つて来る」

チェ

「行ッテラッシャ〜イ」

ガーディアンズ

ニューデイズ支部

ロビー

ロビーで待っていると、バアルが少ししてから来た。

バア

「来てくれてありがとう」

ファ

「俺を呼んだって事は……
昨日の話と関係が？」

バア

「そつだよ。」

それに、今日家宅搜索出来るのは当事者のお陰かな？」

ファ

「当事者？」

ボタン！

研究室の扉が開き……

シヌ

「はーなーせー！」

マヤ

「良いから見せないよ！」

シヌがマヤに手を引っ張られている。

ファ

「何やってんだ？……」

バア

「シヌ君のAフォトンが見たいとか……
シヌ君はスタミナ使うから嫌だって」

ファ

「なるほどな……」

……シヌがガーディアンズの手助けを？」

バア

「そう、事件に関与してるから昨日証拠を探していたらしい……ミレイさんも来てるんだけど、公には出来ないから仮面を被ってるって」

ファ

「そうか……」

………
そういえば……

家宅搜索って調査部じゃないのか？」

バア

「僕は他に用事があったからここにいただけで、ついでに依頼しただけだよ。」

だから調査部の方全般で協力しあってくれ」

ファ

「ついでに……？」

（リゼンの事が……）

………
まさか、調査部の誰かに昨日の事を？」

バア

「何人か……」

………まずかったかな？」

ファ

「……いや、別に……
誰に教えたんだ？」

バア

「ルミアちゃん、マヤさん、ルウちゃん。
話してわかるヒトに限った」

(ファ)

3人共強いが……

制裁者相手に渡り合えるのか……？

シヌ

「ちょっと助けてくれ！」

シヌが叫び声をあげた。

ニューデイズ
都市リノヨ
チューザレファミリー
事務所

乱立する大きなビルの1つに、チューザレファミリーの事務所はある。
カジノは事件直後に調べ終わっているの、残すは事務所だけなのだ。

ルミア、ルウ、マヤが複数のガーディアンズを率いて、事務所に入る。
ファントムは事務所捜査が目的ではないものの、手伝っている。
バルは用事を済ましに行ったので居ない。

ファ

「これじゃあ普通の仕事だ……」

ルウ

「ファントムさん。

これを外に」

証拠品が入っているダンボールを渡される。

ファ

「了解」

渡されたダンボールを外に出しに行く。

この事務所の持ち主

キログマ・チューザレ

は、シヌと仮面を被ったミレイと別室で話している。

仮面はグーラル教団で使っている物だ。

ミレイの正体をルミア達は知っているが、無関係なヒトに混乱を与えない為に仮面を被っている。

ファ

「だいたい制裁者と何の関係があるんだ？」

疑問と不満を持ちながらも、次の荷物を取りに行った。

隣の部屋

キログマとシヌ達は、ソファーで向かい合って座っていた。

キロ

「……貴様らはガーディアンズではないな……
どういう了見だ？」

シヌ

「カジノの映像が欲しい。
それだけだ」

キロ

「だったらあっちの部屋で探せば良いだろう」

ボコッ

シヌがチューザレの腹を殴る。

キロ

「ゲホッ、てめえ……」

首を掴み、体を持ち上げる。

シヌ

「さっさと言え。」

さもないと……

ミレ

「殺すのは神に背きますよ」「

渋い顔をする。

シヌ

「わかってるって。」

……

どこにある？」「

キ口

「し……知らん……」

ナイフを肩に突き刺す。

キ口

「！！ グワァァ……ん！？」

叫び声をあげない様に口を押さえる。

ソファァーに打ち付ける。

シヌ

「どこだ」

口を少しだけ開ける。

キ口

「ゴールドと言う奴だ……」

金と引き換えに口止めと、映像を渡した」

シヌ

「ゴールドか……」

あのバカがしそうな事だ……

……そいつの居場所は？」

キロ

「知るか……」

取引してすぐ居なくなるんだ……」

シヌ

「……まあ、そうだな」

ソファアーに座らせ、ナイフを抜いた。

キロ

「痛っ……！」

てめえら、こんな事して……うっ……」

額に触れると、気絶してしまった。
同時に肩の傷を治す。

ミレ

「また記憶を偽装したのですか？」

シヌ

「別に良いだろ？」

神が与えた特別な力だ。

亜空間を使う俺しか出来ない」

シヌの亜空間による洗脳は、脆弱な精神を外側から支配するカムハインと違い、心を亜空間でこじ開けて内側から支配する能力。記憶の改竄はそれを応用したもの。

1日1回程しか出来ない能力だが、シヌに合っている能力だ。

シヌ

「もう聞ける事は無い。」

次はカジノの生き残りの構成員だな」

ミレ

「ええ、ガーディアンズの仕事が終わり次第向かいましょう……」

………

何の音です………？」

シヌが耳をすますと、
へりのローター音が聞こえてくる。

窓の外を見ると、へりが近づいてきた。

シヌ

「隣の奴ら連れて逃げる。
俺が食い止める」

ミレ

「わかりました。
無理しないで下さい」

シヌは「ああ」とだけ言うと、窓際にAフォトンの壁を作った。

ミレイは捜査が行われている部屋に入った。

真っ先にルウの場所へ行く。

ミレ

「（すぐに捜査を中止して、帰還して下さい。
例の組織に感ずかれました）」

ルウ

「了解しました。」

……皆さん、捜査は中止して帰還します。
すぐにお願ひします」

明らかに不審がるガーディアンズ。

それもそうだ……

仮面を被っているヒトが、今ここで捜査を変更させた様に見えたの
だから。

しかしルウがここの指揮者なので、反対意見は無い。

（ファ）

ん？ どうしたんだ？

……
……っ！？……

大きな爆発音と共に、
非常に大きな揺れが響いた。

2章：3 〱別の仕事〱（後書き）

シ又側は出来るだけ派手に行動はしない……
制裁者側はドンパチしても構わないみたいです。

2章：4 〱 転生の兆候〱（前書き）

ファントムに異変！？

2章：4 転生の兆候

ニューデイズ

都市リンヨ

チューザレファミリー

事務所

爆発音と激しい揺れが響く。

ファ

「チツ……」

M92Fのセーフティロックを外し、シヌのいる部屋へ向かった。

マヤ

「もしかして……」

シヌ君はあっちにいるし……

……

よし……！」

マヤも続くように
隣の部屋へ向かった。

ルミ

「何なんですか!？」

ルウ

「落ち着いて下さい。
私達2人で隊員を退避させますよ」

ルミ

「は…はい!」

ルウとルミアは隊員達を誘導し始めた。

(ミレ)

口封じの為にこんな事をするなんて……

……ここはルウさん達に任せて、私も加勢しに行きますか……

隣の部屋

シヌはAフォトンの壁を解き、窓の外を見た。

ミサイルとミニガンが搭載されてある武装ヘリが、数m程先にある。ヘリの操縦室にロドリゴとゴールドが見える。

ファ

「どうしたんだ!？」

銃を手に持って、部屋に入ってくるファントム。何故かマヤも入ってきた。

マヤ

「これは……」

マヤが部屋を見渡すと、驚いてしまった。
部屋の中はごちゃごちゃで、足の踏み場も無い。

ファントムは何とも思っていないのか、気にせずシヌの場所へ行く。

シヌ

「奴らだ。」

俺達で倒す。

……マヤちゃん、チューザレを運んでくれ」

マヤ

「待ってよ。」

せつかく貴方の力を見に来たのに……」

シヌ

「わかったわかった……」

帰ってから見せるから、そいつを連れていけ」

マヤ

「うゝん……」

わかったわ……」

キ口

「何を勝手に決めている……」

本に埋もれていたチューザレが起き上がる。

キロ

「私は口止めのせいで部下の仇も取れず、口止めの意味は部下を殺した仲間だとわかっていた……
なら……今ここで……

……グッ!……」

シヌがチューザレを蹴り倒した。

シヌ

「奴らの狙いは君だ。

君が死んだら奴らは逃げる……

組織の居場所を知るまでは避けたい事だ。

マヤちゃん、早く」

マヤ

「わ……わかったわ……」

若干シヌに引きながらも、チューザレを連れて出ていく。

今度はミレイが入ってくるが……

ミレ

「……私はチューザレさんを守った方が良いみたいですネ」

シヌ

「頼む」

状況から考えてか、

チューザレの警護に回る。

シヌ

「さて……」

ファントム君は制裁者達との戦闘は初めてか……」

ファ

「そうだな。

どう戦うか教えてくれよ、シヌ先生」

シヌ

「簡単だ。

……戦闘本能全開で殺しにかかれ。

奴らは死なないし、戦闘不能後は俺とミレイの仕事だ」

ファ

「簡単に理解しやすいです」

ヘリが側面がファントム達に向く。

ドアがスライドして、
ゴールドが姿を現した。

ゴ

「おお！

ファントムだぜ！

大佐、見てみるよ！」

ロド

「言われんでもわかっておる！

それよりチューザレはどこじゃ！？」

ゴールドが目凝らす。

ゴ

「いない……！」

たぶんさっき出ていった2人じゃないか？」

ロド

「なら儂が追う。」

お前さんはシヌは殺せ」

ゴ

「良いのか!？」

ハハハ! 嬉しいぜ!」

助走をつけて、ビル内に乗り込んだ。

ロドリゴはヘリを操縦して、下へ向かった。

シヌ

「街中でヘリはないだろ」

ゴ

「お前だって少し前まで派手にやっていただろ」

シヌ

「まあな。」

だから、次は君達で派手にいこう」

シヌは亜空間から

2本の黒餓を取り出す。

ファントムもサングエを出そうとするが……

ゴ

「ファントムは出さなくて良い。
私達は争う仲ではない」

ファ

「何だと？」

シヌ

「無駄話をするな！」

左の黒餓でゴールドに突く。
ギリギリのところで避けるゴールド。

ゴ

「危な……！」

シヌ

「“もう一回”死ね」

右手の黒餓で横に再度斬り込む。
しかし、サマーソルトをして避ける。

シヌ

「少し前より動きが良いな……」

ゴー

「怒りに駆られなければ良い話。
落ち着けば避けれる」

ファ

「……………」

シヌ

「ファントム！

さっさと武器を出せ！」

ハッと、目が覚めたかのようになるファントム。

ファ

「……………すまない……………」

サンゲを取り出して構える。

(シヌ)

予想以上に早いな……

ゴールドとそんなに親しかったのか？

ゴ

「隙だらけだ！」

エンドイフでシヌを攻撃するが、片手で受け止められる。

もう片方の黒餓をエンドイフの隙間に入れて、動きを封じる。

ゴ

「！？」

シヌ

「いくら攻撃が避けれても、力の差が違う。

……ファントム君、動けない様に足の健を斬れ！」

ファ

「ああ！ わかった！」

いつもの気迫が戻ってきたファントム。

ゴルドの後ろへ回り込み、健を斬ろうとしたが……

ドクンッ！

急にファントムの動きが止まる。

サンゲを落とした。

シヌ

「ファントム君？

……
まさか……」

隙間に入れている黒餓を、ゴルドの胸に突き刺した。
壁にも突き刺し、動けない様にする。

ゴ

「クソッ……！」

……と言いたいが……

今のファントムは
案外脆い精神だな」

シヌ

「どうしたら止まる！？」

ゴ

「さあな……」

自分で考え……

……

おい、それはないだろ……」

シヌはゴルドを窓の外へ出す。

シヌ

「試しに……」

ファントムから遠ざけよう」

ゴー

「待て！

死んだら……」

シヌ

「死なないだろ」

黒餓をゴールドごと浮かし、一気に引き抜いた。

ゴールドだけ転落していく。

ゴー

「クッソオオオオオオオ……」

……」

地面に激突して体が四散したのを見届けると、ファントムの方へ向かう。

シヌ

「おい！

ファントム君！

ファントム君！」

虚空を見つめるかの様に、目に力は無い。

シヌ

「まだ転生しきっていない状態だな……
この状態でもミレイが必要だな」

サンゲを拾い、
ファントムを担いでミレイの居場所へ急いだ。

ビル 5階
階段 踊り場

エレベーター、転送装置が全て壊れていたので、階段で下へ向かうルミア達。

しかし、ここまで降りてきて誰一人一般人がいない……

ルミ

「おかしいですね……」

あんな揺れがあったら、避難を開始していると思うんですが……」

マヤ

「部屋は確認した？」

ミレイとマヤとチューザレ（気絶）が遅れて合流する。

ルミ

「マヤさん。」

部屋は確認してないですけど……

……

……ファントムさんとシヌは？」

ミレ

「彼らは、攻撃してきた者達を食い止めています。

それよりも……

確かにヒトがいませんね……」

ルウ

「この建物は29階建て、使用者数は何百もいますが……私のセンサーに生体反応が全く映りません」

ルミ

「範囲は？」

ルウ

「全ての階です。」

屋外はわかりませんが……」

ドゴオオオン！！

またしても大きな揺れが響く。

ルミ

「もう……！」

次は何ですか！？」

上の階から煙が出てきている。

その煙の中から……

神々しい光を放つ

天国の母が姿を現す。

ルミ

「な……！？」

ヘブンスマザー！？

VR空間の敵なのに……！」

ルウ

「考えてる暇はありません。

逃げましょう！」

ヘブンスマザーは逃げ出すヒト達に銃撃を始める。

しかし、運良く被弾しなかった。

母はゆっくりと動き出した。

ビル 1階
正面ロビー

命からがらヘブンスマザーから逃げ、
ロビーにたどり着いたが……

ルミ
「何ですか……これ……」

目の前に広がっていたのは、ガーディアンズのおびただしい死体だった。

全て頭を撃ち抜かれている……

ルウ

「見張り部隊と……
ニューデイズ支部から来た応援部隊でしょう……」

マヤ

「誰が…こんな……」

ガチャ……

トイレの扉が開いた。

出てきたのはロドリゴだった。

ロド

「年取るとトイレが近いわい……
……っと、やっと来たのう」

ルミ

「貴方がこれを……！？」

ロド

「まあそうじゃ」

ルウ

「ヘブンスマザーも？」

ロドリゴは首を傾げたが……

すぐに納得した顔した。

ロド

「儂ではない。

同志が“ゴミ”を収集する為に出現させているだけじゃ。

……誰も居なかったじゃろう？

銃に被弾すると転送されるんじゃ」

ミレ

「どこに転送するんです？」

ロド

「その声……

……

ふん、教えるわけなからう」

ミレ

「そうですか……

なら力づくでも話してもらいます。

皆さん、私が引き付けるので外へ」

マヤ

「大丈夫なの？」

ミレ

「余裕は……

ありませんね」

階段からヘブンスマザーが降りてきた。

シヌ

「邪魔だ！」

しかし、降りてきたシヌに縦に真っ二つにされた。

シヌ

「ファントム君を連れて逃げろ！」

ガーディアンズ隊員に
ファントムを預ける。

シヌ

「ミレイちゃん……！
君も逃げろ！」

ミレ

「いえ、私も……」

シヌ

「（ファントム君が転生しかけている、
君でしか症状を抑えられない。

“虚実”もいるぞ）」

ミレ

「！！！！」

「……わかりました……」

シヌに背を見せて、ガーディアンズを先導し始める。

外へ出ると、騒ぎを聞き付けた野次馬と、応援部隊の船があった。

マヤ

「シヌ君は！？」

ミレ

「彼は大丈夫です」

ルミ

「ファントムさんは！？」

ミレ

「彼も大丈夫です。
早くここを離れますよ」

近場の船に乗ると、ルウが起動させる。

ルウ

「次の応援部隊を呼びます」

ミレ

「屋内には入れないで下さい。
あくまでも非常線を張るだけで」

ルウ

「……了解しました」

ミレイの簡潔な指示を聞くと、船を動かし始めた。

ミレイはファントムを別室に移して、横にする。
ルミアも付き添う。

ミレ

「彼の手を握ってください」

ルミ

「え？ はい？」

ミレ

「早く」

ルミ

「わ、わかりました」

少し恥ずかしがって、
ファントムの手を握る。

すると、ファントムの目がだんだんと落ち着いてきて、ゆっくり目を閉じた。

(ミレ)

この程度なら私は必要ありませんね……

ミレ

「そのまま置いて下ろし」

ルミ

「え!？」

ちよつと……」

ミレイは部屋を出て……

ミレ

「すぐに安全な場所へ行つて下さい」

そう言つて、船を降りた。

2章：4 〽転生の兆候〽（後書き）

ファントムの異変とは？

ヘブンスマザーが何故？

ヒトを収集している理由とは？

ちよくちよく謎を確認しないと、わかんなくなってしまう……

2章：終　　ゝ旧友ゝ（前書き）

最近、納得出来る内容を書けない……

2章：終　く旧友く

ニューデイズ

首都刑務所

面会室

強化ガラス越しに、バアルとリゼンが向かい合っている。

バア

「久しぶりだな。
半年振りか……」

リゼ

「バアル様……
どうしたんですか？」

バア

「様付けは止めてくれ。
……まあ、今日は聞きたい事があったね」

リゼ

「聞きたい事……ですか？」

バア

「単刀直入に聞くが……」

……今の“君”は旧文明人か？」

……

……

……

リゼ

「嫌ですね……」

「そんなわけではないでしょう」

呆れた様子で答えた。

バア

「……だな……」

「変な事聞いて……」

リゼ

「やはり……」

「ミレイ様はそう言ったのか……」

その言葉に全く反応出来なかった……

バア

「……………」

何故……

リゼ

「私は旧文明人ではなく……

第1人類なんですよ。

もっとも、この体はこの時代の物ですが……」

バア

「……………」

何と返したら良いのかわからず、絶句してしまうバアル。

リゼ

「答えましたよ。

さて、私は戻ります」

バア

「待て……！」

何でミレイさんと話した内容を知っている……」

リゼ

「私の力は“王権”。

誰かを操る事は簡単です。

出所した囚人に潜入させたんですよ。

これ以上はミレイ様がシヌに聞いて下さい」

席を立ち、出入口に向かう。

バア

「おい！ まだ話は……

……」

刑務官に肩を取られる。

リゼ

「既にここは……

私の国なんですよ」

ニューデイズ

都市リンヨ

ビル内 1階 ロビー

シヌはガーディアンズ達を逃して、ロドリゴと対峙した。

ロド

「ゴールドの坊主はどうした？」

シヌ

「さあ？

外でバラバラになってるんじゃないか？」

ロド

「落としたのか……
極悪非道じゃな」

シヌ

「ンフフフフ……！
お前達には負けるよ」

ロド

「……まあ良い。

儂らにはアルベルトがいる」

アルベルトと言う名前前に眉を動かした。

シヌ

「なるほど。

アルーの力なら

ヘブンスマザーも召喚出来るか……

アルーはどこだ？」

ロド

「貴様の後ろだ」

シヌ

「……」

鉄扇がシヌの首を押さえる。

アル

「お久しぶりです。
シヌさん」

シヌ

「君に名前を呼ばれると吐きそうだ」

余裕をかますシヌ。
しかし、顔はひきつっている。

ゴー

「せっかくの再開なのに酷くないか？」

先ほど体が四散した
ゴールドが、階段から向かってきた。

シヌ

「アルーの能力が……
これだと、アンナとカザリの傷も治しているな……」

アル

「ええ、既に完治していますよ。
今は別の仕事です」

シヌ

「予想以上だったな……」

お前達みたいなクズが……

……クツ！……」

ロドリゴに頬を思いっきり叩かれた。

ロド

「なんじゃ……」

痛みを感じておるではないか……

……

良し……

アннаの嬢ちゃんに拷問でもさせるか」

シヌ

「チツ……」

ミレ

「そのヒトから離れなさい！」

船を降りてきたミレイが
ナ・グランツで攻撃する。

光の矢は外れたが、
制裁者達を遠ざける事は出来た。

ミレ

「大丈夫ですか？」

シヌに駆け寄るミレイ。

シヌ

「ファントム君は……？」

ミレ

「私の力を使わなくとも、信頼できるヒトが居れば大丈夫です」

シヌ

「影響が少なかったお陰か？」

立ち上がって黒餓を構えた。

アルベルトも戦う気があるようで、鉄扇を2つ出す。

しかし……

ゴー

「通信だ……

……

……

……わかった。

……

確保完了。

後は奴が始末してくれる」

ロド

「と言う事は……」

アル

「シヌさんと戦いたかったですが……

チューザレさんを追う必要は無くなりました。

ここにも用はありません」

シヌ

「逃げるのか？」

アル

「じゃあこれで楽しんで下さい。

当初はVRのバグかと思いましたが……

別次元にこれが存在するみたいですよ。

.....

“真実”として

ここにはヘブンスマザーがいる」

そう唱えると、

ヘブンスマザーが現れた。

アル

「また会いましょう。

シヌさん」

ロドリゴが閃光手榴弾を爆発させ、その場から立ち去ってしまった。

シヌ

「逃げたか……」

ミレ

「それより……」

どうしますか？」

シヌ

「わかっている」

先ほどと同じ様に、
縦に斬り込んだ。

ガキン！

しかし、全く刃を通さない。

シヌ

「硬い！？」

ヘブンスマザーは無防備になったシヌにカウンター攻撃をする。
浮いて体がぐるんと回り、剣がシヌを斬ろうとする。

ミレ

「光よ、
彼を守りなさい！」

ミレイが唱えると、

シヌに光のバリアが張られた。

剣は弾かれ、

シヌはミレイの傍に行く。

ミレ

「先ほど比べて、
戦闘に特化した個体ですね」

シヌ

「アルーの奴……
面倒なもの残しやがって」

ヘブンスマザーは次に、銃を乱射してくる。

シヌはAフォトンの壁を作る……
しかし……

ミレ

「シヌさん！」

ミレイはシヌを抱いて倒して、グランツを回避する。

シヌ

「ありがとう」

ミレ

「光よ、

敵を貫きなさい！」

マザーの体から光の棘が何十本も出てきた。

だが、ヘブンスマザーの属性は光なので効き目が少ない。
そればかりか、体に吸収して傷を治した。

シヌ

「仕方がない……」

黒餓を仕舞う。

シヌ

「ミレイちゃん
防御を頼む」

シヌは右手を前へ突き出し、Aフォトン凝縮し始める。

ミレイは何をしてるのがわかったのか、自分も含めて光のバリアを張った。

マザーは構わず銃、剣、グランツで攻撃するが、バリアが通さない。

しかし……

ヒビが入り始める。

シヌ

「あと少しだ……」

Aフォトンが1cm程になった頃……
バリアが壊された。

ミレ

「シヌさん！」

シヌ

「離れる！」

ミレイが後ろへ離れる。

シヌも後ろへ下がると、Aフォトンの粒をマザーに投げた。

ヘブンスマザーの腹部に触れた……

ギュイイイイン！

あっという間にヘブンスマザーを吸収して、粒は破裂した。

シヌ

「実戦では使わないと思ったけど……」

成功して良かった」

ミレ

「ええ……」

シヌさん、天界で練習していましたから……」

シヌはAフォトンを異常に圧縮して、小さなブラックホールを作ったのだ。

しかし、大きいと自分が危険に晒される。

小さいと効果が期待出来ない。

それを見越して1cmが限界なのだ。

安全の為、対象吸収後にAフォトンが分解されて消える作りになっている。

シヌが持っていたのは、分解しない為の膜を張っていたからだ。

シヌ

「……フウ……」

終わったか……」

ミレ

「今日は行動的でしたね……」

やはり“虚実”がいるからでしょうか？」

シヌ

「だな……」

もう世間にバレても問題無いんだろう」

ミレ

「早く倒さないと……」

シヌ

「……そうだな……」

シヌとミレイは外に出て、野次馬を気にせずにガーディアンズを待った。

-
-
-
-
-
-
-

制裁者達の隠れ家

楕円形のテーブルに制裁者達が集まっている。

イスに座っているのは5人。

シェリーはエロ本を読んでいる。

ゴールドは計算機で金勘定している。

ロドリゴは何かに集中している……

アルベルトはアイマスクを付けて寝ている

ゴウキはハンバーガーを食べている

アンナとカザリは居なかった……

アアアアアアアアアア！！！！

下の階から男の叫び声が聞こえた。

すぐにアンナの歓喜の声が変わった。

ロド

「今ので何人目じゃ？」

何かに集中していたロドリゴが聞いた。
叫び声に集中していたのだ。

シェリー

「今ので73人目だよ」

エロ本を読みながら答えた。

ロド

「あと100少々かの……」

アルベルトが調達した

“ゴミ”は、すぐに無くなるな」

ヘブンスマザーを改造して人間を集めた理由……
それはアンナの為だったようだ。

シェリー

「アルベルトさんはアンナさんが好きなんですか？」

アル

「違います」

シェリー

「起きてた……」

アル

「元々私は皆さんの敵だったんですよ？
頼み事くらい聞きます」

シェリー

「じゃあアタシとS……」

アル

「ダメです」

即答。

アル

「それはそうと……」

ファントムさんの様子はどうでした？」

全員の動きが止まった。

ゴー

「私に会っただけで

“転生”し始めた。

しかし精神が少し弱くなっただけで、

“完全”にはならない」

アル

「そうですか……」

それ以上誰も話さなかった。

ガチャ……

廊下からカザリが入ってきた。

ロド

「ん？」

奴はどうした？」

カザ

「彼はまだ合流させないほうがいいです。」

……大丈夫ですよ、チューザレさんも生き残りも始末しとくって言うてましたよ。

……

それよりも……

……入ってきて」

廊下からリゼンが入ってきた。

アル

「王権」……

どこで見つけたんですか？」

カザ

「たまたま街を歩いていたら見つけたんです。既に転生完了しているっす」

リゼ

「刑務所全体を国にしましたよ。だから出所も自由」

リゼンが空いているイスに座ると、カザリも座った。

アンナを除いて4人分……
席が空いていた。

2章：終　　ゝ旧友ゝ（後書き）

残る制裁者は……

ファントム

エミリア

ナギサ

シズル

………

つまりカザリは

エミリアか、

ナギサか、

シズルに

会っていたという事です。

3章：0　く悪夢・殺（前書き）

誤字を直しました。

バアル↓リゼン

早く読まれた読者様……
失礼いたしました。

3章：0　く悪夢・殺

グサ！！

刃が肉を裂く……

ガーディアンズのロビーで俺はその感触感じた……

少女の胸に刺したサンゲを抜く……

グサ！！

次は腹を刺した。

グサ！！

今度は肩を……

グサ！！

そして首を……

最後に額を貫こうとした時……
俺は動きを止めた。

そしてハッとする。

俺は何をしているんだと……

ファ

「ルミア……ア……」

サングを手放し、ルミアを抱き抱えた。

服の上からでもわかる。

凄く冷たい……

ファ

「俺は、何をして……」

ルミアが何かを話そうとする……

しかし首に穴が開いてしまい、全く声が出ない。

ファ

「ルミア、ルミア！」

すぐに病院へ……

……！！！？？？」

意識はあるのに体勝手に動く。

右手を上げルミアを殴ろうとする。

必死に俺は止めようする……

ボコッ！

しかし、体は言うことを聞かずにルミアを殴った。

ボコッ！
ボコッ！

何度も……

ボコッ！

何度も何度も

ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！
ッ！ボコッ！

何度も何度も何度も何度も……！！！！

気づけばルミアの顔は
肉塊に化していた。

どうして俺がこんな事を？

仲間を守るんじゃないかったのか？

何で自分の信念を曲げる？

何故仲間を殺す？

俺は血塗れになった両手を見る。

真っ赤に染まっていく……

死んだルミア

俺

手

髪

服

地面

壁

ヒト

武器

全て

世界が赤くなる……

ファ

「う……」

「うわあああああ!!」

-
-
-
-
-
-
-
-
-

ニューデイズ
ガーディアンズ
医務室

ファ
「っはっ!!!」
……ハア……ハア……
ハア……ハア……
ハア……ハア……

L

息を整える。

回りを見渡すと

清潔感のある白が基調の医務室だった。

医師はおらず、俺だけしかない。

フア

「何だ……」

今の夢は……？」

.....

少し前も悪夢を見た。

今回は感触が鮮明に感じたが……

ウィーン

医務室の扉が開き、
ルミアが入ってきた。

死んではいないし、
ましてや怪我もしていない。

ルミ

「ファントムさん！
起きて大丈夫ですか？」

ルミアが俺に駆け寄る。

いつものルミア……

ルミ

「心配しましたよ……
巫女様……じゃなくて、ミレイさんが船に運んで来てから起きないんですもん。」

て言っても、1日も経っていませんけ……
……キャ!……」

俺はルミアの話を無視して、抱き寄せた。

ルミ

「ファ、ファントムさん!?
どうしたんですか!?!」

少し抵抗してきたが、
構わず抱きしめる。

ファ

「このまま……」

ルミ

「?」

ファ

「このままでいさしてくれ……」

……

……お願いだ……」

俺はより一層強く抱く。

ルミ

「わ、わかりました……
でも、もう少し力を緩めて下さい」

ファ

「すまない……」

力を緩める。

だが俺は、
抱きついたままだった。

ルミ

「どうしたのですか……？」

ファ

「何でもない……
……何でもないさ……」

ルミアの角度からはわからなかったが、

.....

.....

俺は涙を流していた。

-
-
-
-
-
-
-
-

ルミ

「落ち着きました？」

ファ

「ああ.....

ありがとう」

ベッドで上体を起こしていると、隣でイスに座っているルミアに尋ねられた。

夢で良かったと
切に思った。

ルミ

「さっきはどうしたんですか？」

ファ

「……いや……
何でもない」

ルミ

「何でもない事はないんじゃないですか……？
怖い夢を見たとか？」

君は超能力者か？

ルミ

「幽霊が出てきたんでしょ！？」

ハズレだ。

ファ

「……悪夢だ。」

夢って言うのはすぐ忘れるものだが……

鮮明に覚えてる」

しかし、2回目で良かったかもしれない……
マリが出てきた夢は現実感が無かった。

もし1回目があんなに現実感があったら……

考えるだけで寒気がする。

ファ

「俺……」

どうなっていたんだ？」

ルミ

「シヌが運んで来た時にはぐったりしてました。

その後は、ミレイさんとシヌがビルに残りました」

ファ

「シヌ達は？」

ルミ

「ファントムさんが寝ている時に来ましたけど……
ファントムさんを確認するとすぐ帰りました」

覚えていない……

……

……

意識があつたのは……

ゴールドって奴と会った時までか？

ファ

「被害はどの位だ？」

ルミ

「ガーディアンズ

32名死亡。

ビル内の一般人

172名行方不明。

……それと……

……

独房に居た

キログマ・チューザレ……

精神病院に入院した

裏カジノの生き残りの構成員……

……

2人共……

原因がわからないまま、死亡しました」

ファ

「原因がわからない？」

ルミ

「検死を行いました、死因が解明出来ないんです。病気にはなっていないのに突然……」

ファ

「突然死か……」

もしかしてウイルス？

いや、あり得ないな。

俺や接触した全てのヒトが感染して、死亡しているはずだ。

血液感染だろうか？

だが、ウイルスを作れる程の科学力があるなら、シヌ達は話しているだろう。

いや待て……

何故制裁者だと決めつけた？

ルミアが話したからと言うのもあるが、すぐに関係無いと気づくと思う。

俺は一方的に決めつけただけ？

だとしたら、良くないな……

悪は悪と決め、

善は善と決めつける。

視野を広くしないと……

ファ

「わかった。

ありがとうな」

ルミ

「もう少しで迎えが到着すると連絡ありましたよ」

ファ

「何!？」

お迎えだと!？」

俺の寿命は無くなったのか……」

ルミ

「そつちじゃありません」

-
-
-
-
-
-
-
-

ガーディアンズ
テンマ保管室

シヌはバアルに呼ばれて、テンマ保管室まで訪れた。

シヌ
「これがテンマねえ……大きいな」

初代テンマを作ったシヌには、親近感があるのだろう。

シヌ
「で？」
何しに俺を？」

バルはシヌに背を見せながら答える。

バア

「人通りが少ない廊下にある部屋。
僕達2人だけ。

僕は武器を持っている。

……少しはわかるんじゃないかい？」

(シヌ)

気づき始めたか……

シヌはわかったものの……

シヌ

「さあね。

最初に言っておくが、
俺は男に興味は無い」

バア

「惚けないでほしい。
君とミレイさん、嘘言ってるだろ」

シヌ

「……ンフフ……
リゼンはもう手遅れか……」

バア

「手遅れ？」

シヌ

「あの状態になれば、
君達ではどうにもならない」

バア

「第1人類って言うのは、君の世代なんだろう？
何故リゼンは自分をそう言った？」

(シヌ)

リゼンの奴……
余計な事言いやがって……

シヌ

「君が知る必要は無い。
1日2回はキツいが……
記憶を変えよう」

バア

「……いや、3回になるかもしれない」

シヌ

「何を……」

「……！……」

咄嗟に前へ飛ぶ。

一拍遅れて、フォトン刃が残像を残した。

シヌ

「やれやれ……」

嫌われ者は大変だ」

ルシ

「お前はそういう役割だろ？」

持ち主と同じ名を持つセイバーを構えていたのは……
紛れもないルシフェルだった。

3章：1　く真実をく（前書き）

3章：0でとんでもない誤字がありました。

指摘してくれた

読者様……感謝です。

あるセリフで名前を間違っています。

バアル↓リゼン

早めに読んでしまった方には……

申し訳ありません……

もう1度読み返すと、

内容を納得出来ると思います。

お手数ですが、3章：0をもう1回読んでほしいです。

3章：1　　～ 真実を～

リトルウィング私船

迎えはエミリアが来た。

ファントムはマリが来るとおもったが、聞いてみると仕事に出たようだ。

エミ

「体は大丈夫？」

ファ

「問題無い。」

怪我はしてなかったしな」

エミ

「だとしても心配するよ。」

突然意識が無くなったんだって？

逆に心配するから」

ファ

「ああ……」

初めての事だしな。

………

そういえば、都市リンヨはどうなったんだ？」

エミ

「ガーディアンズで聞いてない？」

まあ話す暇も無いかもね……

……事件の犯人を探すためにフル稼働中。

その大半は都市リンヨに派遣されてるんだって」

ファ

「ニュースで事件は放送されたか？」

エミ

「アタシがルミアから聞いた程は放送されてないね……
けどグラール中騒然って感じ」

ファ

「まあ大事件なだけはあるな……」

-
-
-
-
-
-
-

ガーディアンズ
テンマ保管室

攻撃してきたルシフェルに対して、シヌは聞いてみる。

シヌ

「いつ退院したんだ？
病み上がりは寝てた方が身のためだ」

ルシ

「バアルが見舞いに来た時には起きてた。
話を聞いて寝られなくなった。

俺は弟と違って、

まだ

お前を許していない」

シヌ

「怖い怖い……」

……グラールが滅亡するのに、俺みたいな小物を相手にするのか？」

バア

「それは君から真実を聞いてからだ」

バルは

カノン・クオリアで銃撃する。

しかしフォトン弾なので、避ける。

シヌ

「真実？」

それは君達が決める事ではない」

ルシ

「お前が決める事でもない」

シヌ

「そうだな……」

人間になった俺には決められない。

しかし、真実を決める存在は実在する」

バア

「何が言いたいのかわからないな」

シヌ

「つまり……」

君達にとっての真実は、真実であり虚実でもある。

……果たして俺が話す真実は本当に真実か？
それとも虚実か？

知ったところで君達は信じないだろうし、また聞き返してくるだろう。

………

なら最初から聞くな。

聞き返してくる真実を知っている俺は、答えない」

ルシ

「力づく……か……」

ルシフェルはセルスティアブレイドを構える。

バア

「僕も加勢する」

バアルは
エッジ・クオリアにする。

(シヌ)

どうしたものか……
神の存在を話せば、

この次元バランスが崩れて存在が無かった事になる……
かと言って、納得出来る話なんて持っていない。
記憶を書き換えても1人が限界……

……
話を逸らしてみるか……

シヌ

「バル君はガーディアンズの仕事をしなくて良いのか？」

バア

「今事中だ。」

裏の仕事。

黒歴史、テンマの破壊。

シヌ君をここに呼んだのは、真実を話さなかった時に君のせいにし
ようと思ってね。

ナイスタイミングだったよ。

……
ガーディアンズはテンマの処分法に困ってて……

誰かに破壊されたなら、非人道的実験の証拠を木っ端微塵にしても
構わない。

グラール中から追われなくなったら、話した方が良い」

(シヌ)

仕事を受けてる時にリゼンの話を聞いて、ガーディアンズで破壊工
作した容疑で追われたくないなら、その真実を話せと……

……

嫌な奴……

シヌ

「ルシフェル君は
ファントム君に会いに行かないのか？」

ルシ

「お前から話を聞いたら行く」

(シヌ)

早く行けよ……

全く、空気読め。

シヌ

「じゃあこうしよう。

戦って俺が負けたら、

洗いざらい話そう。

逆に俺が勝ったら、

2度と話を聞こうとするな」

ルシ

「良いだろう」

ルシフェルはバアルに
アイコンタクトで確認する。
賛成のようだ。

シヌ

「先手必勝！」

ルシフェルに間合いを詰める。

黒餓は出さずに格闘で戦う。

武器が無い為、ルシフェルよりも早く動ける。

ルシフェルは避けているものの、かなり辛そうだ。

すると、シヌの後ろからバアルが
エツジクオリアを振る。

シヌ

「見え見えだな」

後ろを見ていないのに、バアルの攻撃がわかったシヌ。

上体を後ろへ逸らして避ける。
そのまま床に手をつき、カポエラで2人を攻撃する。

ルシ「チッ……」
バア「グッ……」

ガードしたが、手が一瞬だけ痺れる。
それをシヌは逃さなかった。

逆立ちの状態から跳ね上がり、ルシフェルを踏み倒す。
次は回って助走を付け、バアルの頬に裏拳をヒットさせた。
バアルは倒れてしまう。

シヌ

「俺は人間だが、君達と違ってLv250だ。
200で止まって、

“人口的転生”でしか強くなれない君達とは強さに違いがある」

ルシ

「クソ……！」

バア

「……良いのかい？」

君は逃げ場を無くすぞ?」

シヌ

「別に良い。

それよりも、君はそんなマネ出来るのか?

俺が察するに……

君はそんな汚い事はしない人間だと思うが?」

バア

「……………」

シヌ

「最近思うようになったが……

人間の優しさってのは嫌いじゃない。

……………」

……………」

うわ、何を言ってたんだ俺?

……………帰る」

早足で部屋を出て行ってしまった。

2人は立ち上がった。

バア

「……………」

ルシ

「……………」

で？ テンマはどうするんだ？」

バア

「そっち！？」

……………」

まあ、コネを使ってどうにかするよ」

ルシフェルを見て言った。

ルシ

「ローグスか？」

秘密裏なら出来なくはないがな……………」

……………」

……………」

……………」

どうするっ？」

今度は真面目だった。

バア

「ミレイさんに聞いても答えないだろう……
今は聞かずに、待ってみよう」

ルシ

「呑気だな」

明らかに納得していない顔だったが……
仕方なくバアルの言った事を飲み込むしかなかった。

-
-
-
-
-
-
-
-

地獄 主軸系

魔神塔

堕天使の間。

コン、コン……

悪魔

「ルシフェル様。

いらっしゃいますか？」

黒山羊が二足歩行しているような悪魔が、扉をノックして確認をする。

しかし、返事が無い。

悪魔

「入りますよ」

部屋に入ると……

堕天使がこたつに入って、P＊Pをしていた。
ジャージの上に
ちゃんちゃんこを着ている。

悪魔

「ルシフェル様。

先ほどファントムから連絡が入り、転……

………

聞いてますか？」

よく見ると、イヤホンを付けている。

悪魔

「ルシフェル様！

聞いていますか！？」

堕ル

「うるせーよ！！

今FF＊式のエンディング見てんだよ！

泣けんだぞ！ 歌とムービーがスゲーあってるんだよ！」

悪魔

「そうですか！

ファントムが転生に失敗したらしいですよ！！

ハイ！ 伝えました！」

バン！

悪魔は扉を勢い良く閉めて出ていった。

堕ル

「

.....

..... 失敗か.....

ファントム君の性格的に、残り制裁者11人と会っても完全に転生しないかもしれないな.....

.....

.....

そうだ.....

良いこと思いついた.....」

堕天使は不気味笑うとゲームを仕舞い、携帯を取り出した。

アドレス帳から、
ファントムを選んだ。

3章：1　く真実をく（後書き）

久しぶりに地獄が出てきた。

3章：2 ｝ c o r d “輪廻” ｝（前書き）

インド神話に

破壊、維持、再生

って、ありますよね……

若干入ってます。

3章：2　cord “輪廻”

3日後……

3日経った現在でも、依然としてガーディアンズは組織を追っている。

事件のすぐ後に組織的犯罪だと公表……勿論、制裁者の話は伏せてある。

この3日間はファントムもガーディアンズに協力していた。
依頼としてだが。

3日前の事件で全く力にならなかったのも、自らは志願しなかった。
つまり、腕を買われて協力したという形になる。
全く手がかりは掴めなかったが……

クラッド6

リトルウイング

居住区

ファントム自室

部屋にあるイスに

ファントムとルシフェルが座っている。

ファ

「いつ退院したんだ？」

どうやら、ルシフェルは今さっき来たようだ。

ルシ

「お前達が都市リンヨで捜査してた時」

雰囲気的に張り詰める……

ファ

「兄弟が会うのに理由は無いが……
今日はどうしたんだ？」

ルシ

「……バアルが現状を教えてくれた。
お前、やっぱりシヌを許してたんだな」

ファ

「許したわけじゃない、信じれる価値があると思っているだけだ」

ルシ

「……………」

「……まあ、個人の意見か……
それは否定しても意味が無い。
俺が聞きたいのは……」

「……………」

聞きづらいのか、黙ってしまった。

ファ

「何を聞きたいんだ？」

ルシ

「……………」

詮無き疑いだが……

……お前……

シヌに何か聞いたか？」

ファ

「どついう意味だ？」

ルシ

「俺……いや……俺達。

バアルと俺は、

シヌとミレイの話に疑念を抱いている。

そしてシヌを力づくで問い詰めた。

……だが負けた。

ミレイに対しても考えたが、ミレイは強いと聞いた。

バアルは実際には見ていないようだが、相当強いらしい」

ファ

「それで俺か？」

悪いが、何も聞いていない」

ルシフェルは

疑いの眼差しを向けた。

隠す気は全く無い様だ。

ルシ

「お前位なら嘘を見抜けるんだぞ」

マリの様に読心術は使えないが、嘘は見抜くなら造作もない。

因みにマリは

読心術を自重しているので、ファントムは最近心を読まれていない。

ファ

「……………」

ルシ

「……………これ以上は平行線だな。

俺は俺で動いている。

バアルは責めてやらないでくれ」

そう言い残すと帰ってしまった。

ファ

「……………」

何とも複雑な気分になるファントム。
ふと、シヌの言った事を思い出す。

仲間思いに犠牲は付き物。
君の場合……心。

ファ

「この事……なのか？」

-
-
-
-
-
-
-

リトルウィング事務所

ルシフェルが帰った後、クラウチに呼ばれたファントム。

仕事が入ったそうだが……

ファ

「シズルが行方不明？」

依頼者はナツメ・シユウ

仕事内容はシズルの捜索だった。

ナツ

「シズルは貴方達と親交があったので、是非頼みたいのです」

クラ

「ガーディアンズに頼めないのもあるんだがな」

当然だろう。

今ガーディアンズは

3 日前の事件で動きっぱなしだ。

ファントムは依頼書に目を通す。

ファ

「最後に確認されたのは……………」

依頼書には

モトウブ

E W O N O 地点

いわゆる、北極点。

ファ

「何故こんなところに？」

ナツ

「シズルはミカさんと、ある研究をしていました……

……………
…………… “ 転生理論 ” ……………

……………
…………… しかし研究は難航し凍結。

……………
…………… 何故なら……

……旧文明で使われた高度な精神技術が難解……

さらに

cord “輪廻”

transmigration of souls

も非常に困難だからです。

しかしシズルは諦めず、“転生理論” 解明の突破口と考えた……

EWON 地点

“輪廻破壊の地”

に向かったのです」

(ファ)

………

うーん……

情報量が多い。

クラ

「何の研究なんだ？」

ナツ

「シズルは亜空間事件を自体験を元に、ヒトの転生について研究し始めました。

簡単に体に乗っ取られた理由を

前世、現世、来世。

輪廻転生に関係があると考えたのです」

(ファ)

科学者だな。

自体験があるという事もあるが……
明確な理由無しで研究するとは……

ファ

「cord “輪廻”

transmigration of souls
つてのは何なんだ？」

ナツ

「人工的に転生を起こす計画……」

ファ

「そんなバカな。

前世、来世がある前提の話じゃないか」

ナツ

「私もよく知らないくてね……

3日前に突然提案したんです」

ファ

「3日前……？」

(丁度あの事件の時か……)

……

……
“輪廻破壊の地”とは何なんだ？」

ナツ

「モトウブ北極点にある謎の遺跡。

旧文明よりも前に建築された遺跡です。

あまり知名度はありませんがね……

……この他にも、

ニユーデイズ北極点に

“輪廻維持の地”

パルム北極点に

“輪廻再生の地”

があります」

(ファ)

聞いた事が無いな……

旧文明の時にも聞いた事が無い。

クラ

「ま、連れ帰った時に聞いて見れば良いだろう？」

ファ

「……………」

……そうだな。

さっさと見つけよう」

ナツ

「よろしくお願いします」

(ファ)

3惑星に1つずつの遺跡……

全て“輪廻転生”が関係している……

知名度が無い……

……

……

勘かな……

嫌な予感がする……

3章：2 ｝ cord “輪廻” ｝（後書き）

シズルは自分がカムハーンに乗っ取られた事を元に、ミカと旧文明の精神技術を研究してたが、難航して凍結。

その後……

独自の研究を続け、3日前に突然

cord “輪廻”

transmigration of souls

（TMGOS、トムゴス）

を発案。

グラールで行われている人工的転生とは違い、前世の自分を転生させる計画。

計画はほぼ謎のまま……

シズルは“輪廻破壊の地”と呼ばれる場所へ向かい、シグナルが途絶えた……

パルムには

“輪廻再生の地”

モトウブには

“輪廻破壊の地”

ニューデイズには

“ 輪廻維持の地 ”

知名度は全くと言って良い程無く、旧文明よりも昔の遺跡としかわからない。

3章：3　く悪夢・終く

リトルウィング

俺はエミリアと共に、
ナギサと対峙していた。

回りはリトルウィング社員が何人も倒れている……

欠片事件時……

ナギサが俺達に刃を向けた……

下手くそな演技だったが……

俺は冷静ではいられなかった。

刃は向けなかったが……

俺は……

ナギサを殺してやりたかった……

ナギ

「……遅かったな」

ナギサが俺達に言った。

エミ

「ナギサ……？」

「……え……どうして、みんなが倒れてるの？」

ナギ

「愚問だ。」

私が倒したからに決まっているだろう」

ファ

「どういっつもりだ……」

返答次第じゃ殺すぞ」

ナギ

「説明しなければわからないか？」

私が武器を持ち、皆が倒れ伏すこの状況を見てなお説明が必要なほど、貴方は馬鹿では無いはずだ」

手が出そうになった。

すぐにサンゲを取り出し、ナギサの細い体を斬り刻みたかった。だが、エミリアがいるこの場でそんな事は出来ない。

冷静を装い、理由を問う。

ナギ

「何故と聞かれても困るな。

強いて理由を挙げるのなら貴方が強いから、だろうな」

意味がわからないな。

このまま明確な理由を聞かずに殺そうか？

ファ

「いつから考えていた」

ナギ

「最初からだ。

私は最初から、このつもりで動いていた。貴方と刃を交えた、その時からだ」

ファ

「GRM社の時か……

……で？……

なぜ、今になって」

ファ

「……くどい！

すでに話すことは無いはずだ！

何を聞かれても、私は翻弄しない！

武器を取れ、ファントム！

私は大罪人で、貴方は断罪者だ！

ならばその刃で、私の命を刈り取ってみせろ！」

何だか……

下らねえな……

良く見たら皆生きているし……

演技バレバレだな……

ファ

「何故君の言う事聞かないといけない？

俺は女の子を殺す程クズじゃない。

………

………そうだな………

俺をその気にさせてみる」

ナギ

「くっ……」

ならば、次はエミリアを狙うぞ！」

ファ

「！！」

ナギ

「貴方はこれ以上、被害を大きくしたいのか！
いい加減、聞き分ける！
この頑固者め！」

エミリアを狙う？

殺す……？

殺すって言いたいのか？

ナギ

「私と戦え！」

そして殺してみせろ！

それで、全てが終わる……

全部、なにかも終わるんだ！！」

ファ

「今何て言った？」

ナギ

「……何だと？」

ファ

「今何て言ったって聞いてんだよ！！！」

自分でも驚く位に声が出た。

ファ

「エミリアを狙う？」

ハッ！

良いぜ！！

俺をその気にさせる理由だ！

せいぜい即死出来る位に死んで見せろ！！」

たった一步でナギサまで間合いを詰める。
サングを片手に攻撃する。

ナギサがステイルルハーツで防御した。

ファ

「意味ねえよ！」

最初の一撃を下から当てる……

それだけでステイルルハーツを弾き飛ばし……

二撃目を上から斬り込む……

胴体を斬った……

真っ赤な血が俺にかかる。

違う……！

あの時……

俺は、正気に戻って力を緩めた。

すぐに武器を仕舞って、回避行動を続けていたんだ……！

俺はナギサを傷付けていない！

ナギ

っつ……ぐっ……！

まだまだ……私はこの程度では死なない……」

俺はまた刀を振り上げた。

ダメだ……やめろ！

体に逆らい、動きを止めた。

ナギ

「だが……そうか……」

貴方も、私を殺せないか……

甘いヒトだ、貴方たちは………

………

………ならば私は、全てを奪うぞ！

まずは、エミリア！

貴方からだ！」

何故止めなかった？
今の殺気は気づけ……
うぐっ……」

何も言わずにサンゲを胸に突き立てた。

ナギ

「……そうだ、それでいいんだ。
やっと、きちんと、狙ってくれたな……

……
……これで……いい
……
……
これでグラールは……大丈夫……ぐっ!!」

俺は刀を一度引き、
上下逆にして刺した。

ファ

「結局人間とはこんなものか……
何故私が、こんな”ゴミ”に希望を見いだしていたのだろうか……
ああ、下らねえ」

勝手に口が……！

俺はナギサの喉元まで斬る。

ナギ

「オエッ……」

ゲホッ……

……

……」

嗚咽を漏らし、死んだ。

ワイ

「ナギサ……ちゃん……」

ファントム君！

何故ここまで……」

ファ

「何故？

意味なんか無い。

殺したいから殺す。

汚くしたいから汚くする。

………

俺には“何故？”と聞く方が“何故？”と聞きたい………
………消えろ」

ワイ

「！？」

ワイナールが消えてしまった。

ファ

「さて……」

あとはダークファルスか……」

俺はナギサの体からダークファルスの欠片を取り出した。

ファ

「……憎い……！」

ゼロが作ったダークファルス！

私の新たな世界が誕生するはずだったのに……！」

欠片を手で潰した……

俺の体をヨリシロをせずに……

どうなってる……

こんな馬鹿な……

フ
ア

「本当に下らねえ……」

今のナギサはゴミを助ける為に死のうとしたのか……？

.....

フ
ハ
ハ
ハ
⋮

[illegible][illegible]

f f f f f f f f f f f f f f f f f ! ! !

下らねえ！！

下らな過ぎなんだよ！！

そんな物守って何になるんだよ！！

ウゼエんだよ!!!

ああ
……
！

吐き気がする！

貴様にとってこれは
バットエンドだろう！

だが私にとっては
トルマーエンドだ！」

誰に喋っている？

今喋れる奴なんて……

ファ

「貴様だファントム！」

俺に話している？

フア

「そうだ！

頭の良い貴様ならわかると思ったがな！」

わかる？ 何が？

ファ

「私の存在にだ！

何故今まで悪夢を見てたかわからないのか？

少しずつ私が近づいて行ったのに……！

あんな悪夢を普通見るわけがないだろ！

わからしてやるよ！

私の同胞がいずれな！」

サンゲを体に突き立てる。

ファ

「さあ悪夢は終わりだ！

次は正夢になるだろう！

その時貴様は……

私の体だ！」

3章：4 転生の時

モトウブ

E 6 N 1 7 8

？

「……トム……」

ファ……トム

……

ファントム……！」

ファントムが目を覚ますと、ナギサが呼びかけていた。

イスで寝ていたようだ。

ファ

「……ナギサ……！？」

ナギ

「もうすぐで目的地だ。
準備するぞ」

ファ

「あ……ああ………」

(ファ)

……また、夢か……

だが……

前の夢とは違った……

目を擦り、船内を確認した。

ナギサは防寒具を用意している。

エミリアは船を操縦している。

この仕事はファントムを合わせて3人だ。

エミ

「ファントム」

お父さんと連絡を取って」

ファ

「……ああ、わかった」

通信機を起動させ、クラウドに繋ぐ。

ファ

「こちらファントム。

予定通りE W O N O地点へ向かっている。
到着時間は……」

15時30分頃」

（クラ）

「OK。

15時13分現在、確認」

定期連絡を済ますと通信を終了した。

ファ

「エミリア……ナギサ……シズル……俺……

（俺達に自覚は無いが……制裁者のメンバー……
なんだよな……）」

（ファ）

嫌な予感的中しなければ良いが……

-
-
-
-
-
-
-
-

船内

E W O N O 地点
“輪廻破壊の地”

遺跡は円形状。

それほど大きくなく、走って30秒程で回れるだろう。

船を入口と思われる場所に停めた。

ファントムとエミリアは、ナギサから大きなコートを受け取る。

エミ

「うわぁ、暖かそう」

エミリアがコートを着てみる。
足まで隠れている。

ファントムも着てみると、足まで隠れた。

大きさは個々のサイズを揃えたようだ。

ナギ

「さて、行こうか」

いつの間にやらナギサも着替えている。

エミ

「じゃあ開けるね」

船の扉が開く。

幸いな事にホワイトアウトは発生しておらず、風も強くない。
しかし、寒さは異常だ。

ファ

「寒いが……」

このコートのお陰で、和らげてるみたいだ」

エミ

「胡散臭いな」

って思ってたんだけどね。

何せお父さんが用意した物だし」

その胡散臭いコートのお陰で、近いと言ってもすぐに入口に着く。

遺跡の材質は岩で出来ているようだ……

ファ

「開けるぞ」

重い岩の扉を開けた。
中は真っ暗だ。

ナギ

「ん？ 暖かい？」

扉の奥から暖かい風が吹いてきた。

ファ

「誰かいるみたいだな。
シズルだと良いが……」

ライトを照らし、奥へ進む。

-
-
-
-
-
-
-

“輪廻破壊の地”
遺跡内

奥まで進むと、部屋は外見と同じで円形状だった。
真ん中に、文字が刻まれている腰位の高さの、円形の石柱がある。

エミ

「シズルは……いないみたいね……」

真っ暗な部屋を明かりで180度確認するが、シズルは居ない。
ましてや、部屋の暖かさの原因もわからない。

ファ

「どうなってるんだ？」

エミ

「わかんない……」

てか、コート要らなくない？」

コートをトランサーに仕舞い、いつもの服に戻る。

ナギ

「何故こんなに暖かいんだ？」

ファ

「わからないが……」

雪で作るかまくらみたいな物じゃないか？」

エミ

「かまくら？」

ファ

「……………あ…そうか……………」

今の時代は無いのか。

旧文明の時に雪が降ったら作るんだ。

ニューデイズの北の方で知られている」

話しながら真ん中の石柱へ近づく。

側面に何か書いてある。

ナギ

「何なんだそれは？」

ファ

「……………文字が書いてあるが……………」

……………読めないな」

エミ

「どれどれ……………」

……………

うん……………読めない」

ファントムとエミリアが見てもわからない文字。

カーシュ族の時のように、ある程度読めるヒトがいたら違っだろう

……………」

ナギ

「これは何だ？」

今度は上を指した。

ダイヤルのような物が付いている。

ファ

「円形ばかりだな……
これ、回せるのか？」

ダイヤルに手を置く。
動かせるみたいだ。

エミ

「だ…大丈夫なの？」

ファ

「わからない」

ナギ

「なっ!？」

ファ

「大丈夫だ。

絶対守ってやる」

その言葉を聞いて安心したのか、大人しくなった。

ファ

「いくぞ」

とりあえず180度回してみた。

ガコン！

突起していたダイヤルが石柱に隠れていった。

見えなくなると……
壁のある一面が開いた。
同時に部屋が明るくなる。

エミ「!!」
ナギ「!!」

ファ
「どんな仕掛けだよ」

明かりは天井の球体から発せられている。

ファ
「……何故、知名度が無いんだ？
ここに来たヒトは、この仕掛けに気づけなかったわけはないだろう
……」

エミ
「だよね……
単純過ぎる……」

ゆっくり考察していると、ナギサが開いた壁へ向かった。

ナギ

「こっちに来てくれ！
階段があるぞ……！」

壁の中は踊り場で、下に続く階段がある。
明るい……

ファ

「シズルは下か？」

ファントム達は下へ下っていく……

随分と深いようだ。

- - - - -

“輪廻破壊の地”

最下層

下へ下へ向かっていくに連れて、岩で出来た壁が無くなっていく……
最下層では機械的な部屋が広がっていた。

部屋の真ん中に背を向けるシズルが居る。

ファ

「……シズル！」

おい、大丈夫か？」

ファントム達に気付いたみたいで、ゆっくりと振り返る。

シズ

「……そうか……」

父さんがリトルウィングに依頼したのか……」

エミ

「帰るよシズル」

ナギ

「皆心配しているぞ」

シズルが不敵に笑う。

シズ

「ククク……」

そうか……

後は君達だけか……」

エミ

「？ 何言つての？」

(ファ)

コイツ……シズルなのか？

……
俺の後ろに誰がいる……

ファ

「ナギサ……」

ナギ

「ああ、わかってる」

シズ

「フン……」

後ろに居るのがわかったようだな」

ファ

「お前誰だ？」

カムハーンじゃないだろ」

シズ

「そうだな。

カムハーンは既にこの次元にはいない」

エミ

「どういう事？」

シズル……誰かに操られているの？」

シズ

「操られている？」

……まあ、近いところだな。

君達も僕みたいになる」

後ろの気配が動く。

ファ

「ナギサ！ エミリアを頼む！」

サンゲを取り出し、後ろに居た存在と刃を交える。

胃不魔・豪飢がリーガルランサーで攻撃する。

ゴウ

「この時代ではお初にお目にかかる！」

胃不魔・豪飢と申す！

我が主に相応しい存在か、試さしてもらおう！」

ファ

「エミリア、ナギサ。
早く逃げろ！」

エミ

「アタシ達も……」

フ
ア

「ダメだ!!」
「早く行け!!」

ナギ

「……彼なら大丈夫だ。
戻ってくる」

三

.....

わかつたわ

走って階段へ向かう。

シズルは追いかけない。

シズ

「ここは野放しにした方が良いか……」

部屋に

アンナ

ロドリゴ

リゼン

アルベルト

ゴールド

カザリ

シェリー

制裁者が現れる。

ファ

「! !」

何も無い場所から突然現れたので、驚く。

リゼ

「……ステルス迷彩としては失敗ですね。
気分が悪くなります」

アン

「自分で作っておいて何言ってるんだよ。
お前の7：3分けを0：0分けにするぞ」

ロド

「おうリゼンの坊主。
これ買った」

シエ

「うん……」

アタシの中身で誤作動が起こっている……」

アル

「大丈夫ですか？」

ゴー

「心配症か？」

カザ

「ゴウキさん！

そろそろ止めてください！」

ゴウ

「む……」

そうだな……」

ゴウキはリーガルランサーを仕舞う。

シズ

「エミリアとナギサはいないが……
これでファントム君は……」

.....
.....
転生する」

3章：4 〱 転生の時〱（後書き）

そろそろ急展開が！？

3章：終　く仲良し　く（前書き）

誤字を指摘されたので、訂正しました。

指摘してくれた読者様、ありがとうございます。

3章：終　く仲良し

モトウブ

E W O N O

“ 輪廻破壊の地 ”

最下層

(ファ)

攻撃してこない？

どういう事だ……？

ゴウ

「む……！」

思い出した！

1年前に我輩は主に倒されました！

それなのに試すという愚行をお許し下さい！

主が望むなら、腹を斬ります！」

(ファ)

コイツ熱いな……

……

1年前……？

誰だ？ コイツ……

カザ

「……ゴウキさんを覚えていないのですか？
まあ素顔は知りませんよね……
クリンサ街のO F Mですよ」

ファ

「確か、カザリだったな……
どういう意味だ？」

ゴー

「そのままの意味だ。
アルーの力で生き返った」

アル

「久しぶりだね。
ファントム君」

(ファ)

(ゾッ) 何だコイツ……！

周りの奴らと全然違う！

言葉に何も感じない……

ロド

「なんじゃ？」

アル坊に怖じ気付いてるぞ」

シズ

「まあ待って下さい。

転生しかけてるのかもしれない」

リゼ

「違いますね。

かなりビクついてます」

シェリー

「ファントムさん！

ファントムさん！

今の顔写メ撮っちゃった！」

(ファ)

何なんだコイツら……

会った事無い奴が仲良く接してくる……

顔見知りもいるが、敵のはずだ。

シズルだけしか知らねえ……

まるで友人と再開したかのようにファントムに接する。

しかし、アンナだけが納得した顔をしていない。

アン

「アンタら、勘違いしていない？」

転生していないファントム様とは他人なんだよ」

全員

「あ、そうか」

(ファ)
何なんだ……？

カザ
「てことで……
さっさと転生して下さい！」

カザリはファントムに走って向かう。

ファ
「結局戦闘かよ！？」

サンゲを取り出し、カザリの攻撃に合わせて振る。
しかし、ロドリゴの
コマンドブレイザーがサンゲを弾き飛ばす。

ファ

「チッ！」

(ファ)

カザリを防げないか！？

ポンッ

カザリは攻撃せず……

ファントムの肩に手を置いた。

ファ

「……え？」

カザ

「……………!?!?……………」

これ……………!」

すぐに肩から手を離し、距離を取った。

アル

「どうしました?」

カザ

「シヌっす……………!」

触った瞬間にAフォトンが入ってきた……………
無理矢理、転生を解除しようとしやがった!」

アル

「シヌさんか……………」

いつ細工したんだか……………」

ファ

「お前達……………」

どういう事なんだ……………」

アル

「……………」

説明しても良いんじゃないですか?」

アルベルトはシズルに聞いてみた。

シズ

「そうだな……」

長い長い説明になりそうだ……」

-
-
-
-
-
-
-
-

ファントムが説明を聞き終わった頃……

“ 輪廻破壊の地 ”

入口付近

船内

いつでも出発出来るように、船のエンジンをつける。

エミ

「大丈夫かな……
ファントム……」

ナギ

「私達を逃がしたという事は、私達では敵わないと思ったからだ。
応援呼ぼう」

（ファ）

「ダメだ！」

通信機からファントムの声が響いてきた。

エミ

「ファントム！？」

（ファ）

「君達はリトルウィングに戻れ！
マリと会って……」

“制裁者が来る”と伝える！」

ナギ

「どっという意味だ!？」

(ファ)

「話している暇は無い!
さっさと行け!

.....

.....

それと.....

.....

俺が帰る事は無い」

エミ

「何言って.....」

(ファ)

「もし帰っても.....その時は.....

.....

.....俺を殺せ.....」

通信はそこで途切れてしまった。

エミ

「ファントム?
ファントム!」

ナギ

「やっぱり戻ろう。
放って置けない」

エミ

「うん！」

エミリアが扉の閉開ボタンを押す。

しかし、開かない。

ナギ

「どうなってるんだ！」

-
-
-
-
-
-
-
-

船外 扉前

アルベルトが閉じた鉄扇で扉を叩く。

アル

「“真実”として、扉は開かない」

-
-
-
-
-
-
-
-

船内

開かない扉の前で成す術が無い、ナギサ。

エミ

「何で開かないのよ！」

ナギ

「こうなったら……」

エミ

「壊したらダメ！」

寒いまま飛ぶ事になるよ」

ナギ

「じゃあどうすれば良い！？」

エミ

「一度リトルウィングに戻ってマリに話を聞いてみよう！」

“制裁者が来る”、何か意味があるはず」

ナギ

「……戻ったら私はすぐに助けに行く」

エミ

「わかってるわよ！」

船は上昇していき、全速力で飛んでいった。

-
-
-
-
-
-
-
-

“輪廻破壊の地” 外

船が飛んでいったのを見届けたアルベルト。

アル

「エミリアさんとナギサさん……」

本当に今のファントム君と仲が良いみたいです……

……

綺麗な事だと思いますよ」

独り言を口走ると、遺跡の中へ入っていった。

3章：終　　く仲良し　　（後書き）

次回は、

シズルの説明から。

制裁者の秘密が明らかに？

4章：0　く命消えるまでく（前書き）

1つ前に誤字がありました。

指摘してくれた読者様、

ありがとうございます。

アルベルトとはシズルに問う。

「と」が1個多い……

4章：0　く命消えるまでく

モトウブ

E W O　N O

“輪廻破壊の地”

最下層

シズルが説明すると言つが……

ファ

「聞く気は無い。」

さっさとシズルから出ていけ」

シズ制

「出ていく……か……」

アル制

「やはり説明が必要ですね。」

根本から僕達を理解していない」

アルベルトは階段へ行くとする。

ファ

「待て。

行かせるわけにはいかない」

M92Fを取り出し、アルベルトに向ける。

しかし、ロドリゴがファントムにコマンドブレイザーを向けた。

仕方無くM92Fを手放す。

アル制

「ありがとうございます。

お礼にリゼンさんのステルス迷彩を買ってあげます」

そう言い残すと、階段を登っていった。

シズ制

「大丈夫ですよ。」

エミリア達には手を出しません」

ファ

「保証はあるのか？」

シズ制

「彼女達は我々の仲間ですよ？」

手は出しません。」

まあ今は仲間ではありませんから、まだ仲間にしない方が良いでしょう、正確な言い方ですね」

ファ

「敬語を止める。」

気色悪い」

シズ制

「……すぐに違和感が無くなりますよ。転生すればすぐ」

シズルは説明を始めた。

シズ制

「神……」

その存在は知ってますね？」

ファ

「……」

何故お前が……」

シズ制

「既にシヌと会っているなら気づいているんじゃないんですか？
12人の制裁者。」

ファントム君や私達の存在に……」

ファ

「……」

……
あくまでも可能性だ……

……
俺や、エミリアとナギサはまだのようだが……

お前達は

“神病感染者が転生”した……

と言う事だろう……」

シズ制

「……正解です。

私達は条件が揃った事により、この時代に蘇った神病感染者」

ファ

「……目的は名の通り制裁か？」

シズ制

「そうですが……

目的はファントム君が決めるんですよ。

私達のリーダーだったのですから」

ファ

「つまり……

俺の“前世”がお前達の知っているファントムで、リーダーだった
と言う事か……」

シズルは微笑むと、違う話を始める。

シズ制

「……かつてここ……」

輪廻破壊の地は第1人類よりも昔に作られました。

勿論他の惑星にある

輪廻維持の地、輪廻再生の地もです。

……破壊、維持、再生。

堕天使から聞かされましたが……

全ての次元の始まりは神が始めるそうです。

……そしてサイクルを作る……

始まった次元を維持……

価値が無くなつた次元を破壊……

価値が戻った次元を再生……

次元によつて形は様々ですが、グラールはこういう遺跡なんです」

ファ

「何故知名度が無いんだ？」

ここまで不可思議な遺跡なら……

シズ制

「誰も入れないからです。」

あのダイヤルは、転生しかけている人間でしか反応しないんです」

ファ

「神はわざわざそんな面倒な事を？」

シズ制

「いえ、元々ここはサイクルを起こす為でしかありません。
こんな地下を作ったのは、私達制裁者……」

……目的は……

……その話はまた今度」

ファ

「ふざけんな……！」

説明すると言っから聞いてんだぞ」

シズ制

「すみませんが、シヌに聞いてみて下さい。
彼も神を憎んだ人間なんですから」

ファ

「シヌ……」

そう言えばアイツも神病感染者だ……」

シズ制

「制裁者ではありませんがね。
彼なら知ってますよ。」

………

もつとも……

今のファントム君が聞きに行く事はありませんが……」

シズルが右手を上げた。

アン制

「ジベット！」

ファントムの足元に魔方陣が現れる。

ファ

「！？」

すぐに後ろへ避ける。

次の瞬間、

地球で知られている拘束具が出現した。

アン制

「さすがはファントム様の器。
避ける事位簡単よね」

ファ

「チッ……まあ良い。
長話には飽きてた。
戦うとするか」

銃と刀を拾う。

M92Fは仕舞い、ヤシヤを構える。

サンゲヤシヤとして構える。

シズ制

「では最後に……」

……ファントム君はシヌに気に入られているみたいですね……
転生しないようにAフォトンを精神に張っていたようですが……
……

無駄な事ですよ。

……正気を保っていますが、そろそろ……」

ファ

「何だと……？」

シェリー制

「イクヨーー!!」

シェリーが

ハートオブデイスピアで攻撃する。

ファントムは避けるが、床が異常に抉れた。

ファ

「サンゲヤシャである以上、避けるのは簡単だな……」

シズ制

「なら攻撃は？」

ファ

「そうだな……」

お前達は斬っても死なないんだろ？
問題無さそうだ」

次の攻撃動作を行うシェリー。
その攻撃をサンゲで受け止める。

シェリー制
「ありゃ？」

ファ
「ハッ！」

ヤシャで突いた。

しかし……
体が動かない。

ファ

「……なに……？」

シェリー制

「効き始めたみたい」

嬉々とした顔でファントムから遠退いた。

（ファ）

動かなかった……

攻撃しようとしたのに……

シズ制

「シズのAフォトンも、制裁者が9人も居れば弱いもの……私達を仲間だと認識しているんです」

ファ

「……………」

……………」

シズ制

「絶句ですか？」

ファ

「……………」

ファントムは通信機を起動させる。

地上の船に繋がると、エミリアとナギサの声が聞こえてきた。

(エミ)

「ファントム……」

大丈夫かな……」

(ナギ)

「私達を逃がしたという事は、私達では敵わないという事だ。応援を呼ぼう」

ファ

「ダメだ！」

(エミ)

「ファントム！？」

ファ

「君達はリトルウィングに戻れ！
マリーに会って……」

“制裁者が来た”と伝える！」

(ナギ)

「どういう意味だ！？」

ファ

「話している暇は無い！
さっさと行け！

……

……

それと……

……

俺が帰る事は無い」

(エミ)

「何言って……」

ファ

「もし帰っても……その時は……」

……俺を殺せ……」

ファントムは通信機を閉じた。

シズ制

「頭の良い判断……」

……五分五分ですね……」

彼女達を帰還させるには直接的な言葉で良いですが、そのまま帰るとは考えられません。

さらに、私達は彼女達に帰ってもらっても良いんですよ」

ファ

「……」

シズ制

「自分に限界来ているから、
殺せ……と言った……
楽になっただろうです?」

ファ

「……………」

悪いが……

俺はまだ、諦めるつもりは無い」

シズ制

「?」

ファ

「お前達が操られているのはわかるが……
……… 仲間の為に死んでもらう」

サンゲヤシャを仕舞い、剣影をトランスする。

ファ

「どうせ死ぬ命なら……
最後まで仲間の為に使う……!」

お前達の好きにはさせない」

鞘から刀を抜き……

宿っているAフォトンを放出した。

-
-
-
-
-
-
-
-

2分後……

階段を降りるアルベルト。
最下層に到達する……

アル制

「……………」

結構な惨劇ですが……
転生しましたね」

血の付いた刃を舐めとり、鞘に仕舞った。

ファ制

「まだ抵抗しているがな。
……しぶとい奴だ」

ファントム以外に立っていたのは、
ロドリゴ、カザリ、シェリーだった。

シズル、リゼン、ゴウキ、ゴールド、アンナは意識はあるものの、
体の一部がどこかわからない。

ファ制

「私との一体化を振り切って同胞達を攻撃した……
とてつもない信念だな」

アル

「ファントムさんだってそうでしょう。」

………

さて……

貴方が完全に転生するには、封じているファントムさんに絶望を知
ってもらいましょう」

ファ

「……だからエミリアとナギサを逃がしたのか？
鬼畜だな……」

アル

「ここは僕が対処します。
ファントムさんは……」

……わかりますね？」

ファ

「わかってる」

剣影をアルベルトに渡す。

アル

「何です？」

ファ

「念のためだ」

そう言い残すと、階段を登っていった。

アル

「念のため……か……」

……

シズルさんのcord“輪廻”

transmigration of souls

TMGOSの有用性が出てきましたね……」

何かを考え出した……

そんな顔を見ると、同胞の治療を始めた。

4章：0 命消えるまで（後書き）

全部の謎を吐き出そうと思ったけど……

まだ引きずるのかよ!？

シヌに洗いざらい話してもらいましょう。

4章：1 〽 “完全” 〽 (前書き)

ファントム……

これはマズインじゃないのか……？

4章：1　「完全」

クラッド6

リトルウィング

開かなかった扉が開き、ロビーへ向かうエミリアとナギサ。

エミ

「アタシはファントムの部屋へ行ってみる」

ナギ

「わかった。」

私は事務所へ行く」

2人はロビーに入ると、別々の場所へ向かった。

-
-
-
-
-
-
-
-

リトルウィング事務所

ナギサは最初に、受付嬢のチェルシーのところへ行く。

チェ

「才帰りね、ナギ……」

ナギ

「チェルシー、マリは？」

チェ

「マリ？」

マリは……」

マリ

「ここだよ」

仕事帰りのようで、事務所の外からやって来た。

ナギ

「マリ……！」

ファントムが

“制裁者が来る”と……」

マリ

「……！！」

……

そっか……ファントムはアナ達に話していないのね……」

ナギ

「話……だと？」

マリ

「制裁者が来る」……
……てことは、応援を呼べって事ね」

マリは携帯を取り出し、シヌに繋げる。

ナギ

「マリ！

話とは何なんだ？」

騒がしくなったせいか、クラウチやウルスラも集まる。

クラ

「どうしたんだ？」

エミ

「あ、居た！」

部屋にマリが居なかったので、事務所に来たエミリア。

マリ

「早めに来てよ」

携帯を切る。

ナギ

「貴方とファントムは何を隠している……！？」

エミ

「うわ！ ファントムって隠し事が酷いけど、マリも何か隠してるの？」

マリ

「……………」

しょうがない……………話すよ」

マリは、シヌとミレイに話された事を話す。
勿論、マリが知っているのは嘘の話だが……………

クラ

「本当なのか……………そりゃ？」

ウル

「嘘でなくとも、信じられない話だわ」

ナギ

「何でまた……………」

全く、あの人は……………」

エミ

「制裁者……………」

.....
（ん？ 何か懐かしい気分が……）
「

マリ

「すぐにシヌ達来るよ。

到着したら、その遺跡に行こう」

ヴィーン！ ヴィーン！

リトルウィングの警報が鳴り響いた。

- - - - -

チエ

「停船所からロビーまで損壊。
目標はロビーで停止中」

ドゴオオオオオオン！！

ロビーの転送装置が破壊され、煙が立ち込める。

何があったと、エミリア達が確認しに行く。

エミ

「なんなの……！？」

煙から出てきたのは……

ファ制

「ただいま。

……なんてな」

ナギ

「ファントム……？」

これは……一体？」

ファ

「さあ？ 何だと思う？」

サングを持ち、エミリア達へ向かう。

するとマリがM82A1をファントムに構えた。

エミ

「ちょ！？ 何やってんの！？」

マリ

「わからない？

アイツ……ファントムじゃない。
体はファントム自身の様だけど」

エミ

「はい？」

ナギ

「……………」

そういえば……

ファントムは通信の時に
もし帰っても…殺せ、と……」

ファ制

「……そんな事を言ったのか……
まあ、別に構わないが」

歩き出すファントム。

マリ

「止まって！」

ファ

「撃ってみろ。」

でないと君達は死ぬぞ」

マリの前に立ち、サンゲを振る。

マリ

「クッ……」

ガキン！

グッダ・ラス・レオルドがサンゲの攻撃を防御する。

ファ制

「クラウチか……」

クラ

「本当にファントムじゃねえのか？」

ウル

「ハッ！」

グッダ・ラス・ガヴリコンが、サンゲを持つ手に絡み付く。

ファ

「ウルスラ……」

ウル

「本物のファントムを出しなさい」

ガチャ

ファントムの後頭部に、シッガ・ラス・ヴァーゴが突きつけられる。

ファ制

「いい気分しないな……チエルシー」

チエ

「スタンモードダケド、結構痛いわよ」

ファ制

「“完全”たる私に齒向かうとは……」

グン！ とウィップごとウルスラを引いた。

ヤシャをトランスし、胸に突き刺す。

ウル

「ウッ！」

クラ

「……！」

デメエエエ……！」

チエルシーの銃撃と、クラウチのパンチが同時に行われる。

しかし……“外れた”

動いていないのに……

ファ制

「拍子抜けだ」

体を回転させ、クラウチとチェルシーを斬った。

マリ

「まずい……」

遂にマリも銃撃する。

しかし……“外れた”

マリ

「!？」

ファ制

「ファントムの恋人か……」

大量虐殺やエミリアやナギサよりも面白い……」

刀は降り下ろされた……

4章：1 〉 “ 完全 ” 〉 （後書き）

シヌも早く来いって！

4章：2 　　く正夢く（前書き）

修正不可能な位、悲劇的な状況 W

4章：2 正夢

「や……やめ……グワァ！」

「ファントム！ 何故……ウツ……！」

「止まれええええええ！！
……ゲホッ……」

「デメエ……ガハッ！」

「ば……化物が……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-

リトルウィング
ロビー

ファ制
「今ので最後か……」

サンゲヤシャに付いた血を舐めとり、落ち着いて武器を仕舞う。
何故ならリトルウィングに現在、生存者はいなくなったからだ。

誰にも容赦はしなかった。

トニオとリィナの子供にも手をかけた。

今のリトルウィングは、ファントムが夢で見た様に血で染められている。

ファ制

「ファントム。」

まさに正夢じゃないか？ これは……

……

……

絶望して、歯向かう気にもならないか？

……って……うっ……」

ファントム制裁者はふらつき、片膝を突いた。

ファ制

「まだ刃は錆びていないみたいだな……
だが……」

そうやって邪魔しても……

シヌ

「意味が無いか？」

ガタン！

シヌとミレイが、ダクトの中から出てきた。

ファ制

「シヌ……」

遅かったな……既に手遅れだぞ」

立ち上がり、シヌと同じ目線に合わせる。

シヌ

「そうか？

俺にはまだ、希望がある」

ファ制

「希望？

フン……

絶望その物だったお前が言つと、酷く滑稽だな」

サンゲヤシャを取り出し、シヌに斬りかかる。

サンゲをシヌの黒餓で抑え、ヤシャをミレイの光フォトンが防御する。

ミレ

「星霊祭時の力が出ていませんね」

シヌ

「コクイントウは持ち主の感情に呼応して力が発揮する。
今は制裁者……」

“ファントム・イリア”

だから、力が発揮されない」

ファ制

「随分と余裕だな」

サンゲをシヌから放し、ミレイの光フォトンのバリアを壊す。

ミレ

「！」

シヌ

「チッ……」

イリアはサンゲをミレイの首に当て、ヤシャをシヌに向けた。

ファ制

「お前とは仲良く出来ると思ってたんだがな……
神の存在を知ってまでも、私と同じ道を歩まないのか？」

シヌ

「俺は神を恨んでいない。
恨んでいるのはお前達、神病感染者と人間だ」

ファ制

「残念だ」

イリアはミレイの首を斬ろうとするが……

ファ制

「……………」

さっきはイイ女を殺してしまったからな……

ミレイ・ミクナ……

確か星霊になったんだっとな。

神を犯すってのはどんな気分だろうな？」

普通のファントムなら見せない、狂氣的な笑みを見せる。

シヌ

「そう言っと思った……」

やはり、希望はまだあった」

ファ制

「何……？」

「……！！……グッ！……」

またか……」

サンゲヤシャを落とし、後退するイリア。

シヌ

「お前はファントム君とは違い過ぎる。

転生するにあたって必要なのは“類似点”……しかしお前は、名前と見た目だけしか類似していない。

希望とは、お前に似ていないファントム君なんだよ」

ファ制

「……チッ……」

やはり、剣影を渡しといて良かった。

………

これで終わると思うな……

私は同胞達によって絶対に蘇る」

シヌ

「せいぜいガンバレ」

“ファントム”は膝から崩れ落ちた。

ゆつくり立ち上がる。
下を向いている……

「フア
ハア……ハア……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-

シヌ

「大丈夫か？」

シヌがファントムに近づく……

ファ

「!!!!」

ダメだ！ 近づくな！」

すぐにシヌから離れる。

シヌ

「……………」

ファ

「俺はここで死ぬ……………」

生きている意味が……………」

意味が無い……………」

引き金が引かれ……………」

バン！

鉛玉は天井に命中した。

銃は光フォトンによって弾かれ、遠くへ飛んだ。

ミレ

「光よ、彼を眠らせなさい」

ソフトボール程の光球をファントムにヒットさせる。

すると、ファントムは眠ってしまった。

シヌ

「睡眠効果か……好都合だ。
このまま運んで……」

「……………」

ミレイはシヌに光の剣を向けた。

シヌ

「どうした？」

ミレ

「説明して下さい。」

何故貴方は……

リトルウィングの皆さんが全滅した後に、ファントム・イリアと接触したんですか？

助けていれば、全滅はしなかったはずですよ」

シヌ

「……………」

これが、ファントム君の仲間思いの代償だ。ファントム君の心は死んだ。

これで仕事がスムーズに進む」

光の剣を手で払う。

シヌ

「それと……」

このまま殺すのは、神に背く行為だ。
ケジメはつける」

ミレ

「……………」

ちゃんと説明はしてもらいます」

ミレイはファントムを重そうに抱えると、ダクトへ引っ張っていった。

シヌ

「端から見たらホラーだな……………あの絵面……………」

……………さて、俺の体が持てば良いが……………」

シヌは死体の1つに近づいていった。

4章：2 〱正夢〱（後書き）

バトルが欲しい。

派手な感じで（笑）

4章：終　　ゝ失踪ゝ（前書き）

4章、短いな……

4章：終　　ゝ失踪ゝ

ニューデイズ

キラビ山　山荘

深夜

ニューデイズの主要都市近くのキラビ山に、大きくて豪華な山荘がある。

所有者はグラール教団であり、他にも幾つか存在する。

教団の元高官が無駄遣いで建てたらしく、そのまま無駄にするのも良くないとの事で、宿泊施設または現高官が慰安用に使っている。

キラビ山の山荘は後者であり、ミレイがカレンに頼んで借りている。

山荘内

ミレイはファントムを個室に寝かせると、リビングでシヌにコーヒーを出していた。

ミレ

「大丈夫ですか？」

シヌ

「大丈夫じゃない」

シヌの髪は真っ白になり、頬が痩けている。

ミレ

「力を使い過ぎです。」

だから早く助ければ……

……
そう……説明がまだでしたね」

シヌ

「……………」

転生出来る条件は類似点だ。

出来るだけ類似点を引き離す様にして、イリアにリトルウィングを皆殺しにさせた。

“完全”のイリアは絶望を知った事が無い。

ファントム君が絶望を知った今、転生は暫くは不可能」

ミレ

「だから見て見ぬふりをしたんですか……！？」

シヌ

「そうだ。

だが俺は生き返らした。

この姿になるまで力を使つてな」

軽蔑の眼差しを送るミレイ。

シヌ

「そんな目で見るな。
結果的にファントム君はこっちの仲間になって、仕事がスムーズに
終わる」

ミレ

「……確かにそうですが……
貴方は差別を感じてはいないのですか？」

シヌ

「言いたい事はわかる。
今回の犠牲者を生き返らして、少し前の犠牲者を生き返らせないの
は不平等だと言う事だろ？」

ミレ

「そうです」

シヌはコーヒーに口を付ける。

シヌ

「熱っ！

………

……
お望みなら生き返らずぞ。
だが良いとは思わない」

ミレ

「どつという意味です？」

シヌ

「そうやって1人1人に情けをかけて、何人生き返らせる？
……今回は俺の勝手で生き返らせた。
だが知り合いでも無い奴に肩入れする気は起こらない。
他人を助けたいなら自分でどうにかしろ」

ミレ

「……………」

不機嫌な顔をするミレイ。

シヌ

「君の言っている事は間違っていない。
だが平等性を考えるなら、君は間違っている」

ミレ

「……………」

「……かも……知らない……ですね……」

シヌ

「……………」

白けた……俺が言った事は忘れる。

俺は寝るから、ファントム君が起きたら呼んでくれ。

ファントム君にも説明が必要だからな」

コーヒーを残しリビングを後にした。

-
-
-
-
-
-
-
-

制裁者達の潜伏場所

楕円形のテーブルに座っている制裁者達。
3つ席が空いている。

アン

「ファントム様の転生が失敗？」

アル

「恐らくは……」

シ又さんが何かしたのでしょう……

これを見て下さい」

アルベルトはテーブルに付いているテレビに電源を入れる。
他の制裁者達もテレビの電源を入れる。

グラールチャンネル5に合わせる。

現在放送しているのは、リトルウィング襲撃事件についてのようだ。

アル

「ファントムさんはリトルウィングの社員を皆殺しにしたはずですが……」

シヌさんが生き返らせたのでしょうか……

あの人は僕達の考えを知っていたんじゃないんでしょうか？」

ロド

「何じゃと？」

アル

「つまり、シヌさんはこの事件を予想してたんです。

僕達は、ファントムが絶望で精神が消えると予想していましたが……」

シヌさんは逆に、絶望が転生を妨げると予想していたのでしょうか。

そしてファントムさんの転生は当分は無いですね。

やられました……」

リゼ

「ではどうする？」

生き返ったエミリアとナギサを戦力にしますか？」

アル

「シズルさんがこちら側なのですから、これ以上リトルウィングの友人が行方不明になれば……」

僕達の活動は難しくなります。

今は諦めて……

……

……そうですね……

では、シズルさんの

cord“輪廻”

TMGOSを使って行いたい事があります。

……

……

それと……そろそろ制裁を始めても良いかも知れませんか……」

アルベルトは無表情だったが……

他の制裁者は嬉しそうな顔をした。

- - - - -

クラッド6

リトルウィング事務所

リトルウィング中が血塗れ……

しかし、社員の全員が無傷の状態だった。

現場調査に来たガーディアンズも戸惑っている。

クラ

「だから……！」

この映像のファントムはファントムじゃないんだって！」

クラウチはガーディアンズ隊員に防犯カメラの映像を見せて必死に説明するが、ファントムがファントムじゃないと言われたら良くわからないだろう……

ガ隊員

「…………意味がさっぱり…………」

ルミ

「もう良いですよ。」

貴方はロビーの方へ」

ガ隊員

「教官…………了解です」

ルミアが戸惑っている隊員をロビーへ向かわせる。

クラ

「ルミアか…………」

お前ならわかりそうだ」

ルミ

「……………」

クラウチさん……

……ファントムさんの指名手配が決定しました……」

クラ

「ハア!？」

……あ、いや……

見つけるには好都……

ルミ

「危険性が高いとの事で、非逮捕命令が発令されています」

クラ

「非逮捕命令……だと……?」

ルミ

「危険だと見受けられた場合……………」

言葉を濁すルミア。

クラウチも暗い顔をする。

ルミ

「私は……」

ファントムさんがこんな事するとは思っていません。
信じていますから！」

クラ

「……ああ……」

ルミ

「そう言えば……
エミリア達は？」

クラウチは当たりを見渡して、ルミアに耳打ちする。

クラ

「（シヌを探しに行った。

防犯カメラには映っていないんだが、俺らを治したのはシヌらしい
……）」

ルミ

「（え？ シヌが？）」

クラ

「（あんまり言うなよ。」

シヌとミレイは、カレンと一緒にいるみたいだぞ）」

伝え終わると、ルミアから離れた。

クラ

「非逮捕命令つてのは、その場で殺されるかもしれないんだろ？
しかも懸賞金もかけられる。」

俺達は、賞金稼ぎやガーディアンズよりも早く見つける」

ルミ

「賞金稼ぎはわかりませんが、ガーディアンズはファントムさんの
強さを知っているヒトもいます。」

いきなり戦う事は無いと思いますよ。」

.....

あ、そうだ。

社員の皆さんは、検診を受けるようにと通達されていますよ」

クラ

「まあ、生き返ったなら当然.....なのか？」

-
-
-
-
-
-
-
-

ガーディアンズ
ニューデイズ支部

エミリア達は受付に、カレンを出すように言ったが……
カレンは出掛けているようだ。

イライラしながらも待っていると……

カレ

「すまない……」

遅くなっ……た……」

3人の鬼気迫る表情にたじろくカレン。

マリ

「カレンさん、シヌと会いたいんですけど」

カレ

「いや…知らないが……」

ナギ

「マリが言うには、シヌはミレ……」

ナギサの口を塞ぐマリ。

マリ

「無闇にそのヒト名前は言わないの」

エミ

「……マリの電話からじゃ繋がらないの。」

カレンさんなら知っていると聞いたんだけど……」

カレ

「そうか……」

実は、最近会っていないんだ」

マリは眉を動かした。

マリ

「そうですか。」

じゃあ連絡がついたら教えてく下さい」

エミリアとナギサを連れて、ガーディアンズを出ていった。

カレ

「これで良いのか？」

物陰からシヌが現れた。

まだ白髪で、頬が痩けている。

シヌ

「完璧な嘘だ。

マリの読心術は、俺が君の心にAフォトンを張ったから問題無いだろう」

カレ

「……お前は何かしたいんだ？
ファントムの行方など隠して……」

シヌ

「……わからない。」

一体俺は何の為に

戦って、

嘘ついて、

疲れるんだか……

……

……

まあ俺は別に良い。

君の妹は、俺の勝手な行動に干渉していない。

いつもと変わらずに接してやってくれ」

シヌは黒いフードを被ると、ガーディアンズを後にした。

カレ

「ファントムに聞いた程……悪い奴じゃないのか？」

- - - - -

ガーディアンズ
ニューデイズ支部前

マリはゆっくり歩きながら、考え事をしているようだ。

エミ

「どうしたの？」

マリ

「うーん……」

カレンさんの心を読もうとしたんだけど……」

ナギ

「どうかしたのか？」

マリ

「前にファントムに対して肝試ししたよね？」

あの時のファントムみたいに、心が読めなかった……
まあ肝試しの時は、ファントムが特別な状態だったというのもある
んだけど」

エミ

「カレンさんは違っって？」

マリ

「平常そのままだからね。

凄く不思議……

………

しょうがない……

草の根搔き分ける気持ちで探そう」

何処と無く呑気に見えたが、エミリアとナギサが見たのは……

マリの真剣な目だった。

4章：終　　ゝ失踪ゝ（後書き）

結局

“輪廻○○の地”

の謎がわからぬまま。

いずれわかるんで少々お待ちを。

次項は、

12の制裁者の詳細プロフィール、全員分です。

え？　何故今になつて？

5章から本格始動なんで。

twelve punisher (前書き)

随分と投稿が遅くなってしまった……

……すみません……

話は変わり……

制裁者全員を詳細に書きました。

まだ不明な部分がありますが、かなり詳しいです。

前のプロフィールとは違うところがあります。

シェリーだけ凄く細かい……

過去編では書けない内容なんで(笑)

｝ t w e l v e p u n i s h e r ｝

- ・年齢は死亡時ですが、転生元の人物とは同じ歳です。
- ・敵なのでLv200越えがいます。
- ・制裁者はイリア、旧文明人はファントム表記

ファントム・イリア

L v 3 0 0

性別・男性

種族・第一人類

年齢・19歳

身長・185cm

体重・75kg

タイプ・“完全”

神型

髪・ファントムと同じ

服装・黒い服

赤いコート

所属・t w e l v e p u n i s h e r

一人称・私
二人称・お前、君、貴様

制裁者達のリーダーだった人物。
ファントムの前世でもある。

第1人類で最初の制裁者。

神病感染者を探しだし、制裁と言う目的で人類を滅ぼそうとしたが……
予定外な事に、12人以外に感染しないはずだった神病は、シヌに感染。

シヌとシヌが作ったS E E Dに阻まれる。

その後、死亡。

シヌの前ではシヌと呼ぶが、目の前に居ないとゼロと呼んでいる。

リーダーであるイリアが目的を決めるが、制裁以外の目的も出す……
…のか？

性格は冷血漢のようで、意外にも仲間思いな部分がある。
女好き。

ゴールド、ロドリゴ、エミリア、ナギサは呼び捨て。

シズルは君付け。

ゴウキからは主。

リゼン、シェリー、アルベルトはさん付け。

アンナ、カザリは様を付ける。

武器は日本刀。

“完全”の能力は神型と呼ばれる物だが、謎な部分が多い。
リトルウィング戦闘時、攻撃が当たらないという現象が起きたが、
これは“完全”の能力である。

因みに堕天使がメールを送ったのはイリア。

ファントムの絶望が転生を楽しむと伝えた。

堕天使は、アルベルトと同じ事を考えていたのだ。

転生元は

ファントム・レガス。

名前と見た目以外が似ていないので、転生に手間取っている。

アルベルト・キツシャー

Lv250

性別・男性

種族・第一人類

年齢・20歳

身長・178cm

体重・66kg

タイプ・“虚実”

運命型

召喚型

髪・後ろのツンツンが目　立たない髪型、灰色

服装・イロハフブキ、黒

所属・twelve punisher

一人称・僕

二人称・君、貴方

イリアの右腕。

実質的に現制裁者リーダー。

実力は申し分無く、シヌと同等の力を持つ。

“虚実”の力は強大。

存在を消せない事、嘘の場合目に見える場所で行えない事が条件だが、真実と嘘を作り出せる。

いつ神病感染者になったかは不明……

しかし、第1人類時代にはシヌの仲間だった。
経緯、目的、裏切った理由も不明。

性格は無感情無表情、だが日本文化を好んでいる。

武器は鉄扇を使い、服装も意識している。

日本刀を使うイリアとは親近感がある。

仲間からはアルーと呼ばれる。

ヒトを殺しても何とも思わない。

ヒト殺しは呼吸と同じだと考えている。

転生元は

アルベルト・キッシャー

ヒューマン

ニューデイズに住むヒューマンで、礼儀作法を教えている。

ロドリゴ・ゼル

L v 2 3 0

性別・男性

年齢・75歳

種族・第一人類

身長・190cm

体重・87kg

タイプ・“戦争”

攻撃型

髪・目立つオールバック 白髪

服装・緑の軍服

所属・twelve punisher

一人称・儂

二人称・お主

70歳半ばで制裁者になった元軍人。

感染したのは結構遅め。

転生元がデューマンだったが、カザリが手助けした為、転生は早め。

“戦争”は団体戦、または自分対複数の場合に戦闘能力が高くなる。

性格は飄々としており、アンナにバカにされても笑っている。

仲間からは大佐と呼ばれている。

武器は銃全般だが、
コマンドブレイザーを好む。

イリア“だけ”に対して良く思っており、
「若造が……」
と知っているが、力の差がハッキリしているので、仕方無く言う事を聞いている。

転生元は
ロドリゴ・ゼル
同盟軍の大佐だったが、60歳で脱退。
10年以上経た今でも、実力は衰えない。

リゼン・シュレイド
Lv210

性別・男性
年齢・20歳
種族・第一人類
身長・173cm
体重・55kg
タイプ・“王権”

支配型

髪・7：3分け、青
服装・燕尾服、黒
所属・twelve punisher

一人称・私
二人称・貴方

神病に感染したのは最初の方。
転生は力ザリの次と思われる。

転生元がニューマンだが、うまくシンクロしている。
その為か、現時代のリゼンの記憶を自分の物のようになっている。
思想も同じで、自分が世界を統治して守ると考えている。

“王権”は支配型の能力。
名の通り他人を操る能力で、一度に支配出来る人数は100人まで。
しかし信念が強い人物や、特殊な名前を持つヒトは操れない。

・ルシフェルⅡ堕天使
・バアルⅡ
ウガリット神話の豊穡神
・ミレイⅡ星霊

性格は極めて温厚。
しかし、アンナの性格には辟易としている。
7：3分けを0：0分けにすると言われた時は、内心穏やかではなかった。

武器は使わず、デイグニティ家と同じ格闘術で戦う。

工学知識に長けており、帝王学も熟知している。
王として理想的ではある。

イリアに対して忠誠を尽くしている。

あくまで自分が王なので、イリアを神として見ている。

転生元は

リゼン・シュレイド

テロを起こし投獄中だった。

バルとレディとは親戚関係である。

エミリア・パーシバル

Lv200

性別・女性

年齢・18歳

種族・第一人類

タイプ・“愛”

支配型

所属・twelve punisher

一人称・アタシ

二人称・アンタ

第一人類時代は天才的な頭脳で、シヌが統治していたヘブンでは有名だった。

感染したのは最後。

ヒューマンの為、転生しやすいはずだったが、名字を変えた事で手間取っている。

“愛”は支配型。

自分を愛する人間と、自分が愛する人間の戦闘能力を底上げする。

武器は

クラーリタ・ヴィサス

アルベルトが嘘で治療が出来ない場合、回復を担当する。

性格は現エミリアと全く変わらない。

転生元は

エミリア・ミュラー

現在のところ制裁者になる心配は無い

ナギサ・アーデルハイド・ハウザー

Lv200

性別・女性

年齢・19歳

種族・第一人類

タイプ・“運命”

運命型

所属・twelve punisher

一人称・私
二人称・貴方

過去を一切語らない女の子。
イリアさえも、過去を知らない。
会った時から感染していた。

“運命”はそのまま運命型。
自動的に発動される能力。

自身に運の良い事が起こるが、悪運は絶対に回避出来ない。

性格はおしとやか。

しかし生前の武器は
禍々しい目が付いた大剣を使っていたらしい……

転生元はナギサ
名字を捨ててしまったので、エミリア同様に手間取っている。

シズル・シュウ
Lv200

性別・男性
年齢・22歳
種族・第一人類

タイプ・“死”

攻撃型

運命型

所属・twelve punisher

一人称・私

二人称・君

第一人類時代に

ヘル（現モトウブ）の技術者だった男性。
感染したのは6人目。

“死”は攻撃型と運命型。

しかし、攻撃型にしては効率的な能力ではない。
遠くからでも人間を殺せるが、1人殺すのにも莫大な精神力とスタミナを使う。

体力的に1日3人まで。

また、存在価値が低い者しか殺せない。
存在価値を誰が決めるかはわからないが、生まれてから死ぬまでの行いによって判断される……

……っと、シズルは語っている。

因みに、チューザレファミリーの

キログマ・チューザレとカジノの生存者を殺している。

明確な死因は無く、突然死という形になる。

性格は大人しい。

イリアとは友達感覚で接している。

武器はレンゴクトウ・死炎^{シエン}を使っていた。

レンゴクトウは古来から存在しているらしい。

能力が効率的ではない為、実戦に備えて普段から鍛練を怠らない。

精神学、考古学、転生学の専門家。

その知識を使って、

3惑星の北極点にある遺跡を研究していた。

転生元はシズル・シュウ

ヒューマン、名前、性格……

元々転生しやすい精神なので、カザリが迎えに行った時には既に転生していた。

現シズルはカムハーンの来世なので、カムハーンは制裁者シズルの来世である。

カザリ・イリオン

Lv200

性別・男性

年齢・18歳

種族・第一人類

身長・175cm

体重・61kg

タイプ・“拒絶”

拒絶型

髪・チャライ

茶（染色）

服装・日によるが、

チャライ

所属・twelve punisher

一人称・俺、僕ちゃん

二人称・アンタ、名前

第一人類時代では普通の高校生だった少年。

転生は一番最初。

“拒絶”は拒絶型。

特別な能力で、拒絶型は“拒絶”しか無い。

自身が心から拒否出来る人物、または自分の事を一度でも信頼した人物に限り、“拒絶”出来る。

具体的には、念力のような力で潰せる。

性格はチャラク、身だしなみにも性格が出ている。

しかし、イリアの前だと紳士になる。

“拒絶”でありながらも、イリアにだけ信頼を寄せている。

武器は近距離戦闘の場合のみ使用する。

小型のギルガメスを使う。

遠距離の場合他の仲間に戦わせ、自分は敵を心から“拒絶”しようと精神統一する。

しかし初対面の相手を心から“拒絶”出来るのは稀で、近距離に持ち込む事がほとんど。

転生元は

カザリ・イリオン
ヒューマン

文武両道で、ガーディアンズへの推薦候補だった。
全くと言って良い程似通っている為、当初の転生日時よりも半年程
早く転生していた。

ゴールド・シルバシノ
Lv200

性別・男性

年齢・45歳

種族・第一人類

身長・179cm

体重・70kg

タイプ・“金”

支配型

髪・丸刈り、6mm程、黒

服装・だらしくスーツ を着ている、黒

所属・twelve punisher

一人称・私

二人称・お前、君

第一人類では大富豪だった男性。
転生元も富豪である。

“金”は支配型。

金雇いを絶対的なものし、人間を手駒にする能力。

“王権”と似ているので、“王権”の人数制限を補う為に、2人1組で行動する事が多い。

弱点として、金に興味が無い人間は支配出来ない。

性格は楽天家。

お金または高価な物を見ると、目が変わってしまう。

生前の武器は巨大な斧を使っていた。

転生後はエンドイフを使っている。

何事もお金で解決しようとするが、収入の方が支出よりも遥かに高い。

イリアを息子のように思っている。

転生元は

ゴールド・シルバシノ

ビースト

お金への執着は激似。

モトウブでは多種多様な仕事をしていた。

シェリー・エクスタシー

LV200

性別・女性

年齢・14歳

種族・第一人類

身長・148cm

体重・28kg

タイプ・“欲情”

支配型

髪・ツインテール、橙

服装・セーラー服

所属・twelve punisher

一人称・アタシ

二人称・名前

生前は軍学校に通う女子中学生だった。

転生元も同盟軍で働きながら、学校に通っている。

“欲情”は支配型。

関係を持った者を殺す事が出来る。

逆に強くする事も出来る。

しかし自分の力は全く使う事が無い。

理由としてイリアとの出会いが原因である。（理由は下記）

性格は天真爛漫そのもので、喧嘩が嫌い。

カザリとアンナが口喧嘩しているところを自ら止めている。

そんなシェリーでも深い闇がある。

軍学校内でシェリーが、複数の男子生徒にレイプされる事件が起こ

る。

事実を隠す為に、学校は事件を隠蔽。

世間が知る事はほとんど無かった。

シェリーは気が狂ってしまい、事実隠蔽をした人間、レイプした人間を誘惑し……

相手が寝た後に殺した。

全員始末し終わった後に神病に感染。

しかしイリアとはすぐに出会っておらず、快楽に溺れては殺すという生活を送っていた。

普通の人間では満足しなくなった頃にイリアと会う。

イリアに一目惚れし、満足以上の快楽を与えたイリアに陶醉していき、段々と能力を使わなくなっていった。

生前の武器は無い。

現在は

ハートオブディスピアと、アストラルライザーを使っている。

転生元は

シェリー・エクスタシー

グラールで一体しか存在しない特別なキャスト。

製造されて1ヶ月で精神を作り、性行為に非常に興味を持っている。興味があり過ぎるせいで自分を改造し、性行為が出来るようになっている。

体の素材も軽量化し、

ヒトに近い状態。

カザリが転生を手助けしたものの、キャストの為手間取った。

アンナ・ザ・ブラッド

LV200

性別・女性

年齢・27歳

種族・第一人類

身長・174cm

体重・58kg

タイプ・“拷問”

召喚型

髪・セミロング、赤

服装・ルナプロフェシー 黒

所属・twelve punisher

一人称・私

二人称・アンタ、お前

拷問刑の執行役だった女性。

感染したのは早い方。

“拷問”は召喚型。

地球に存在していた拷問器具、拘束器具、処刑器具を召喚出来る能力。

デミリットや条件は無いが、隙が大きく避けられやすい。

性格はDS。

基本的に暴言しか言わない。

しかし、共感した場合は性格を自重する。

イリアの前ではドMになり、責められたいと思っている。

武器は刃鞭パラディーズとクイーンヴィエラ。

イリアにカイザーヴィエラを持たそうとしている。

異様な程にイリアに服従精神がある。

出会った頃に関係があるようだが……？

転生元は

アンナ・ザ・ブラッド

グラール教団の非公式部署の拷問官、ニューマン。

ザ・ブラッドはコードネームであり、制裁者のザ・ブラッドもコードネーム。

本名を知る者はいない。

非公式部署は破戒者を処刑または拷問をする部署。

正式名称は存在しておらず、いつから存在するかはわからない。

教団の高官も知らないで「一般信者が極秘に作った部署」だと、部署内で噂されている。

（変更あり）

胃不魔・豪飢

（イズマ・ゴウキ）

Lv200

性別・男性

年齢・31歳

種族・第一人類

身長・229cm

体重・131kg

タイプ・“食”

攻撃型

髪・ポニーテール、緑

服装・橙ジャージ

赤パーカー

所属・twelve punisher

一人称・我

二人称・お主

第一人類時代では、有名な武将の血筋だった男性。

“食”は攻撃型。

行動後に何かを食べないと無差別に“食”し始める。

凶暴性が非常に高い能力。

基本的に何でも“食”するので、能力を使い終わると腹を壊す。

性格は熱く、昔の武士のような話し方をする。

生前にイリアと戦い、力の差を知る。

その時から、イリアの事を主と呼ぶ。

武器はスピアを使う。

転生後はリーガルランサーを使う。

転生元は

胃不魔・豪飢

パルムのクリンサ街に住んでいた。

“狂神の信念”時のOFM。

前世同様に有名武将の血筋であるが、話し方は普通だ。

ファントムの作った坑ウイルスは1年で死滅するので、ゴウキの体内にはシヌのウイルスが残っている。

輪廻破壊、再生、維持の地

左から

モトウブ、

パルム、

ニューデイズ。

どれも惑星の北極点にあり、第一人類よりも前に建てられたもの。

制裁者のシズルは、この遺跡を研究していた。

彼の話によると、遺跡は神によって作られたもので、形は違えど全ての次元に存在するらしい。

存在理由は輪廻転生をサイクルする為。

神が始まりを作る。

←
維持を開始する。

←
破壊を開始する。

←
再生を開始する。

←
維持を開始する。

（遺跡に書いてある言葉）

私はインド神話からこのサイクルを提案し、その次元を統治する他の神が干渉しない為に作った。
天使よりも人間を愛する神は多いが、この次元はどうなるのだろうか……？

まず統治する神が居ない……
という事は反対勢力が存在しない……
問題無いと思うが、人間が好きな私は心配だ。

もしこれを読む人間が現れたなら、破壊の時を迎えるだろう。
私の本意ではないが、サイクルは必要だ。
譲歩として、破壊の原因を滅ぼせば破壊が起こらない仕様にした。
もしこれを読める人間がいるなら、幸運を祈る。

P.S

これを書いてる私が神なのに、私は誰に祈るんだ？

このふざけた文章を読めたのは、制裁者シズルとシヌだけだった。
因みに、原因とはシヌである。

輪廻破壊の地にのみ、人工的な地下がある。

シズルが作っただけなのだが、一体何の為に作ったかはわからない。

-
-
-
-
-
-
-
-

その後のグラール

リトルウィングの大惨事以降……

会社自体の評判が下がったものの、あり得ない現象が起こった事件を、取り合わないヒトは多かった。そのお陰か、ファントム入社前の売り上げでとどまっている。

ファントムの搜索は続けているが、全く手がかりが掴めていない。シズルの搜索依頼もあるので尚更だ。

ファントムを嫌悪する人物は多いが、信頼が元々良い為、憎しみという感情は無いようだ。

ガーディアンズ

都市リンヨの事件の大規模捜査に加え、ファントムの指名手配及び非逮捕命令

（身の危険を感じ場合、殺害が可能。

同時に懸賞金がかけられる。

凶悪犯にしか懸賞金はかけられない為、1000万メセタからとなる。

ファントムは2500万メセタと超高額。それほどまでに危険と判断された。

非逮捕命令は命令としては存在するが、過去に一度も発令された事がない）

が発令された為、他の仕事に手が回せない状態。

ファントムのガーディアンズの知り合いは動揺しているが、防犯カメラの映像からファントムではないと確信している。

事件後からバアルの

特殊依頼

（ライア総裁から直接依頼を通達されるもの。

一般ガーディアンズでは依頼出来ない汚れ仕事。

テンマ破壊がそれに当たる。

特殊任務は意外にも多く、ヒトに言えないものもある）
が多くなった。

内容は制裁者関連。

同盟軍

行方不明の

シェリー・エクスタシー少尉

元同盟軍兵士ロドリゴ・ゼル大佐

を探すのに躍起になっている。

また、ガーディアンズからファントム逮捕への協力を依頼されている。

依頼を承諾したが、手がかりは無い

ローグス

ローグス内では、ファントムをかなり警戒している。
タイラーの右腕ルシフェルの弟だけあって、強さをわかっている者がほとんどである。

ルシフェルはヴィヴィアン、リリス、ロストと共にファントムを探しているが、手がかりは無い。

グラール教団

今回の事件には干渉していない。

何故かカレンが教団に居る事が多くなった。
しかし、教団に居ると言ってもすぐに出掛けるらしい。

不確定人物

???・???・???

LV?

性別・男性

年齢・10代後半

種族・ヒューマン？

身長・180cm半ば

体重・？

タイプ・？

髪・フードを被っている 為、不明

時折、黒い髪が見える

服装・白い服

フード付きの青い ロングコート

所属・？

一人称・俺

二人称・君

詳細不明。

フードのせいで顔がよく見えない。

少しだけ見える顔からは、青年を思わせる。

黒いコートを着た人物と、白いコートを着た人物と行動している。

twelve punisher (後書き)

次回から新章！

(やっとか……)

もう冬休みだし……

リトルウィングの事件から1ヶ月後……
ファントムは未だに行方不明だった……

そして、世界は変わっていく……

5章：0 ～雪～（前書き）

短い……！

5章：0　く雪く

リトルウィングでの事件から1ヶ月後……

未だにファントムは行方不明………

拉致したと思われる2人の男女の^{シヌとミレイ}搜索も難航していた。

女性は仮面被っていてわからない。

男性の顔は映っていたものの、グラールに存在していないのが明らかとなった。

混沌とし始めたグラールで、また災厄が起ころうとしている……

- - - - -

ニューデイズ

首都オウトク・シティ

季節 冬
時間帯 夜

雪が降る……

地面にも少しずつ積もっていく。

人通りが少なくなった都市をマリは歩いていた。
赤いゴムで止めて、髪型をパイナップルヘアーにしている。
マリは自分の口元を、ファントムから貰ったブレイブスコートで隠す。

マリ

「ハア……寒い」

近くのベンチ座る。

マリはファントムの情報を集める為にやって来た。

マリ

「今日も手がかりは無し……か……」

……

ファントム……

どこに行ったの？」

空を見上げると雪は止み、綺麗な星が輝いていた。

マリ

「……………」

目を瞑り、ファントムとの思い出を振り返った。

-
-
-
-
-
-
-
-

同時刻

ニューデイズ

首都オウトク・シティ

白い服に青いロングコートを着た人物が、マリの後ろのベンチに座った。

フードを深く被り、顔がよく見えない。

青コート

「……………」

ポケットから缶コーヒーを取り出して飲む。

青コート

「（……髪型…変えたんだな……）」

マリ聞こえない程の声で呟くと、コーヒーを飲み干した。
立ち上がり、近くのゴミ箱に入れる。

ポケットに手を入れると、どこかへ歩き出した。

5章：0　く雪く（後書き）

青コートの正体わかりやすいな……

疑問として、服装と髪の色ですかね？

髪の色はプロフィールでしか書いていないんですけど。

5章：1　く汚れ仕事く（前書き）

惑星の情勢とか統治権限がわからないな……

それほど矛盾していない事は指摘しないでネ。

5章：1　く汚れ仕事く

クラッド6

リトルウィング

ファントム自室

ファントムが行方不明になった後は、マリが部屋を使っている。

ビシフォンの前に座り、今日の成果を記録する。

しかし何の情報も得られなかったので、何を書けば良いのかわからない。

マリ

「……………」

今日は何の成果も上げれず……

明日はパルムで搜索しようと思う

明日の搜索場所を決めると、ビシフォンを閉じた。

マリ

「……ハア……」

もう1ヶ月経ったのか……」

ふと、本棚に目を向けた。

色々な専門書が並んでいる……

亜空間理論、

SEED事変分析、

レリクス構造、

特別機器取り扱い、

フォトン組成方式

人間心理、

差別と平等・種族とは、

応急医療方法、
暗殺理論、
武器取り扱い、
近接格闘術、

忘れがちだが、ファントムは頭が物凄い良いのだ。

その中の1つに栞が挟んである、“星霊神話の謎”というのがある。
引き抜いて、栞が挟んであるページを開いた。

マリ

「星霊誕生？」

開いたページは星霊誕生という項だった。

グラールに3惑星が出来たと同時に、フォトンが生まれた。
そのフォトンには意思を持ち、星霊を象った。

星霊はグラールの神になり、世界の全てを司るようになる。
これを読んでいる貴方の時代も、星霊によって支えられているので
す。

しかし、ここで疑問が生じます。

それはこの世界を作った意思の存在。

宇宙や惑星、星霊さえも作り出した意思は何なのか？

恐らくは“神”という名前しかない存在。

我々ヒトでは到底理解出来ない存在が、全ての基礎を作ったのだから。

しかしこの話は詮無き事だ。

何故ならここで定義した“神”は、ヒトの理解の範疇に入っていないのだから

説明はそこで終わっている。

次ページはフォトンの解説になっている。

マリ

「“星霊神話の謎”……

“星霊誕生”……

何でここに琴を挟んでるんだろっ……」

考えてもわからなかった。

- - - - -

Gコロニー

クライズ・シティ

ガーディアンズ本部

総裁室

バア

「失礼します」

バアルはライア総裁に呼ばれ、総裁室まで赴いた。

ライ

「呼び出してすまないね」

バア

「構いませんよ。」

それより、用があると聞きましたか？」

ライ

「まあ……そうなんだが……」

……アンタがここに来るのを知っている奴はいるか？」

バア

「今のところ教官の貴方しか……」

ライア総裁は安堵する。

バア

「裏仕事ですか？」

ライ

「そんなところだ」

引き出しから少し厚めの調査書を取り出した。
立ち上がって、バアルに手渡しする。

調査書には題名が無かった。

ライ

「開いてみてくれ」

バアルは1ページ目を開いた。

パルム代表統治者

キャストの“アザエル”の詳細が書かれている。

バア

「パルム代表のアザエル……」

このヒトがどうかしたんですか？」

ライ

「次のページだ」

ライア総裁はページを捲り、バアルに見せた。

次は“霧の情報屋”と呼ばれる
ヒューマンの
通称“ミスト”の詳細だった。

その一番下に……

バア

「……………」

確かな情報なんですか？」

ライ

「奴の情報は確かだ。

それに、アンタに依頼した仕事の半分は、ミストの情報によるものだ。」

……そう考えたら、いつもの仕事と変わらないだろう？」

バア

「そうですが……」

情報屋ミストの詳細の一番下の欄……

そこには、パルム代表統治者アザエルの暗殺計画の情報だった。

バア

「護衛ですか？ それとも……

……首謀者暗殺ですか？」

ライ

「いや、今回は護衛についてくれ。

ミストが調べた首謀者は制裁者だ。

ミレイとシヌが行方不明な内は、無理に戦わなくて良い」

ミストが調べた首謀者は、ゴールド・シルバシノ
リゼン・シュレイドだった。

バア

「……わかりました。
ボーナスは多め……」

……

あ、そうだ。

お金はいいです、頼み事が……」

ライ

「頼み事？」

バア

「ええ……まあ……その……」

……」

言にくいのか、口を閉ざしてしまっ

ライ

「……頼みにくい事なのかい？
ある程度なら聞いてやれるけど……」

バア

「……………」

その……

Gコロニーはガーディアンズに自治権がありますよね？」

ライ

「？ そうだけど？」

バア

「……兄妹間同士の……」

……結婚を認めてほしいんです……」

ライ

「……………」

バア

「いや……！」

無理なら良いんです！

……………」

無理ですよね……兄妹間同士の結婚だなんて……」

ライ

「出来なくはないよ」

バア

「え！？」

ライ

「次の仕事での、アンタの働き次第だな」

バア

「……教官……」

「……ありがとうございます……！」

ライ

「フフ……」

妹の名前、レディだっけ？

次の仕事まで1週間はああるけど……

「……頑張るんだぞ」

バア

「はい……！」

バアルは調査書を手に持ち、扉の前で一礼する。

総裁室を後にした……

-
-
-
-
-
-
-
-

翌日

クラッド6

リトルウィング

カフェ

マリはカフェで朝食を摂っていた。

フレンチトースト2枚の内、1枚と半分は食べ終わっている。

エミ

「おはよう、マリ」

エミリアがやって来た。

寝起きのようで、髪がまだ若干跳ねている。

マリ

「おはよう。

寝癖ついてるよ」

エミ

「ありや……」

梳かしてきたのに……」

マリ

「ここ座って」

エミリアの朝食のオムライスを、テーブルに置く。
横に座らせ、トランスした櫛で梳かしはじめる。

エミ

「……………昨日は……………どうだった？」

マリ

「全くって感じかな……………」

今日はパルムに行ってみようと思う」

エミ

「今日も1人で？」

マリ

「うん、まあ……………」

仕事がほったらかしだから、誰かにやってほしいだね……………」

エミ

「もう……………」

しょうがないから、今日も頑張る。

マリにも頑張ってもらおうよ？」

マリ

「アタシは最初から本気だもん。

……………はい、出来た」

梳かし終わると、櫛を仕舞った。

エミ

「ありがとう」

マリ

「どういたしまして」

マリはトーストを口に放り込み、すぐに飲み込んでしまった。

マリ

「じゃあ行ってくるね」

エミ

「うん、行ってらっしゃい」

マリはブレイブスコートに付いたパン屑をほろりと、パルムへ向かう為に船へ向かった。

5章：1 汚れ仕事（後書き）

家族間で結婚って聞いた事ないな……

でもどこかの国では、結婚出来るって聞いた事があります。

ガセネタかもしれないけど（笑）

ゝ各勢力代表者ゝ（前書き）

サブタイトル通り、要人の詳細を書いています。

最後に“霧の情報屋”のプロフィールです。

各勢力代表者

グラールでの各代表

Gコロニー

ライア・マルチネス

LV190

性別・女性

年齢・29歳

種族・ビースト

タイプ・ハンター

所属・ガーディアンズ

(総裁)

ガーディアンズ総裁の女性。

Gコロニーの自治権はガーディアンズにあるので、決め事は総裁が決める。

しかし、過去に法律などを変えた事は無い。

教官時代からの付き合いであるバアルに、絶対的な信頼を寄せてい

る。

その為か、ガーディアンズでも数人しか依頼されない“汚れ仕事”を任せている。

因みに、1週間後に行われるパルム代表統治者の護衛では、ボーナスの代わりに近親者同士の結婚を認める約束をしている。

バアルに仕事を頼む日は、側近であるクランプ・マニエールに別の仕事を頼ましてある。

当初のミスは無くなったものの、ライア総裁は何でも自分でする為、居ても居なくても一緒のようだ。

モトウブ ローグス

アルフォート・タイラー
Lv195

性別・男性

年齢・35歳

種族・ビースト

タイプ・ハンター

所属・ローグス

通称ドン・タイラー

モトウブ通商連合の一員であり、モトウブの政治に関わっている。
実質トップ。

基本的にはランディール号内で生活している。

タイラーが統括するローグス内でも、実力者であるルシフェル、ヴィヴィアン、リリス、ロストは私情の為、ランディール号に居る時間が少なくなった。

私情とはファントムの搜索である。

因みにルシフェルはタイラーの右腕である。
自分よりも首領に相応しいと考える程に実力を知っている。
しかし、ルシフェルは面倒だと思っている。

ニューデイズ
グラール教団

イズマ・ルツ

性別・男性
年齢・34歳
種族・ニューマン
所属・グラール教団
(星霊首長)

グラール教団の星霊首長の男性。
幻視の巫女がいなくなった今では、ニューデイズの国家政治を行っている。

教団第一な性格。

最近カレンの、教団への出入りが多くなった事を気にしている。

同盟軍

カーツ

LV180

性別・男性

年齢・32歳

種族・キャスト

タイプ・レンジャー

所属・同盟軍

（総司令官）

パルムに本拠地を構える同盟軍総司令官。
階級は大尉。

連続する不可解な事件を終息させる為、元上官のロドリゴ・ゼル大佐を同盟軍に戻そうとしているが、行方不明の為搜索中。

部下のシェリー・エクスタシー少尉も行方不明になっており搜索中。

リトルウィング襲撃事件の共同捜査を、ガーディアンズに依頼され承諾している。

パルム

アザエル

Lv175

性別・男性

年齢・93歳

種族・キヤスト

身長・176cm

体重・185kg

タイプ・ブレイバー

髪・ロングヘアー

服装・全身を青に塗装

所属・同盟評議会

（最高責任者）

一人称・私

二人称・貴方、さん付け

パルムを実質的に統治している、キャストの男性。
カーツの友人。

年齢が90歳を超えるが、声や話し方を変えていない。
落ち着いた印象を与える話し方。

1週間後にSEED事変5周忌に参加する。
他の惑星の代表者も参加するが、暗殺はアザエルだけに特定されている。

一応、命を狙われているというのは知っているが、SEED事件5周忌の参加はするようだ。

情報屋

ミスト（本名不詳）

LV150

性別・女性

年齢・10代後半？

種族・ヒューマン

身長・169cm

体重・47kg

タイプ・フォース

髪・黒のヘアバンド

前髪を出している

後ろは肩にかかる程

髪色、白銀

服装・ローゼントライム

黒

一人称・僕

二人称・君、君付け

通称“霧の情報屋”

名前の由来は銀色の髪を持ち、放浪しているから。

パルムで最も優秀な情報屋であり、最も謎が多い女性。

声の雰囲気や見た目から10代だが、その若さで勝ち取ったとは思えない程に情報に富んでいる。

一定の拠点を持っておらず、パルムを放浪していると言われている。

報酬が良い為、ガーディアンズの依頼には快く引き受ける。

最近ではパルム代表統治者の、暗殺計画情報をガーディアンズに売り付けた。

ゝ各勢力代表者ゝ（後書き）

恐らくこれが、2011年の最後の投稿だと思います。

1年早いなゝ

皆さん、よいお年を！

5章：2 〱霧〱（前書き）

あけましておめでとう！

1年早いな

5章：2　く霧く

どこかのレリクス……

銀髪の青年が広間を歩いている。

隅に白骨死体が見える……

その近くにある日本刀を抜き、調べ始めた。

ボロボロの服を着た銀髪の少女が、青年の後ろに近づき……

斧を振りかざした。

-
-
-
-
-
-
-
-

パルム

ホルテス・シティ

南地区

ホルテス第一ホテル

219号室

？

「……………」

……んうあ……

懐かしい夢だな」

黒い下着が脱げそうになりながら、ダラダラと起き上がる。

自身の銀髪をワシャワシャと掻く少女……

“霧の情報屋”と呼ばれる、“ミスト”だ。

ミスト

「ん……………」

……ん……ん……

……

あ、そうだ。

朝ごはん」

テーブルに置いてあるカ。リーメイトを口にくわえた。

ミスト

「眠いな」

床に放置してある

ローゼントライムを着て、黒いヘアバンドをつけると部屋を出た。

-
-
-
-
-
-
-
-

パ
ル
ム

ホ
ル
テ
ス
・
シ
テ
ィ

中
央
地
区

マ
リ

「さて、何から始めようかな」

道の真ん中で考える。

マリ

「……ガーディアンズで目撃情報とかないかな？」

マリは取り敢えず、ガーディアンズへ行ってみる事にした。
東地区へ向かう。

ガーディアンズに入ると、真っ先にルミアが気がついた。
マリに駆け寄る。

ルミ

「お久しぶりです！
マリさん」

マリ

「うん、久しぶり！

……って……

突然どうしたの？」

ルミ

「ちょうど良いところに来たので。

これからファントムさんの目撃情報を聞きに、街に赴くんです。
マリさんも来ますよね？」

マリ

「……そうだね。

聞き込みに出るって事は、ガーディアンズで情報が集まっているわけじゃないさそうだし」

マリはルミアと数人の部下と一緒に、聞き込みに行く事にした。

- - - - -

ホルテス・シティ
中央地区 広場
午前10時

人通りの多い広場で、地道に聞き込みを始める。

しかし写真や特徴を伝えても、全く情報が掴めない。

ルミ

「ダメですね……
もしかして整形したとか？」

マリ

「もしくは死んだか……
………
無いね！ 無い無い！」

ルミ

「ですよね……
訳あって姿を現さないだけですよね」

マリ

「そう」

お喋りを止めて、更に聞き込みをする。

つと、マリがヘアバンドを付けた銀髪の少女に話しかけた。

マリ

「あ、ちょっといいかな？

このヒト見なかった？

銀髪でイケメンなんだけど」

ルミ

「確かにイケメンですけど……

何故自分目線？」

少女は写真を手に取り、まじまじと見た。

マリ

「1ヶ月前のリトルウィング襲撃事件の……

……犯人……なんだけど……

……アタシの恋人なの。

知らないかな？」

銀髪少女

「……………」

君がファントムの恋人……神山・マリ……

……………」

やっぱり

あのヒトも浮気者だな

いや、女の子に弱いのかな？」

マリは自分のフルネームも、写真の人物をファントムだとも教えていない。

マリ

「え？」

ルミ

「（ん？

あの子って……確か……）

“霧の情報屋”？」

少女は頭を掻く。

ずれたヘアバンドを戻す。

ミスト

「1ヶ月してもまだ見つけないのか」

……ガーディアンズもシヨボいケド、ファントムの恋人の君が見つけないのもシヨボいよね」

ムツとするマリ。

ルミアもガーディアンズをバカにされて良い気分はしない。

マリ

「何なのこの子……」

ルミ

「通称“霧の情報屋”

“ミスト”さんです。

直に会うのは初めてですが」

ミスト

「君は……」

ガーディアンズ総合調査部の

ルミア・ウェーバー君」

ルミ

「さすがパルムNo.1の情報屋ですね。

私の名前は知っていますか……」

ミスト

「5年前にガーディアンズに入隊。

現機動警護部隊長について回り、ダーク・ファルスの依り代にされたり、2年前にエミリア・パーシバルと会って考え方が変わったり、鬼教官と呼ばれるようになったり、ファントムに好意を持っている、英雄イーサン・ウェーバーの妹。

大体の事は知ってる」

マリ

「そんな事より……」

さっきの言葉の意味は？」

ミスト

「色々話したから、どの言葉かわからないな………つわぁ………」

マリはミストの胸ぐらを掴んだ。

マリ

「何でファントムを知っているの？」

ミスト

「あーやま」

ファントムに聞かされてないんだ。
かわいそ」

マリ

「答える！」

ルミ

「マリさん………！」

熱くなっているマリを、ルミアが宥める。

ミスト

「100万」

マリ「？」

ルミ「？」

ミスト

「100万メセタで売ってあげる。

ファントムと僕がどういう関係かという情報……」

マリ

「アンタね……」

ミスト

「……」

……

フフン……

冗談だよーん」

マリ「？」

ルミ「？」

ミスト

「実は僕、ファントムを探しているんだ
それを手伝ってくれるなら教えるよ。

まあ、僕が手伝っても良いんだケド」

胸ぐらを掴む手を振りほどくと、服を整えた。

マリ

「パルムN.O.1の情報屋……」

ルミ

「ミストさんが居れば心強いですけど……」

ミスト

「……選択の余地は無いと思うケド？」

マリ

「……………」

……………」

わかった。

だから、アナタとファントムの関係を教えて」

ミスト

「関係か」

何て言えば良いかな？

………

熱い関係？」

ルミ

「………どういう意味です？」

ミスト

「え」とね」

………

S * Xの仲？」

ルミ

「ええ！？」

顔を真っ赤にするルミア。

マリ

「今更アタシは驚かないけど……

何？　どういう事なの？」

ミスト

「ここは公共の場だからちょっと」

……違うところ行く」

頭を掻きながら、ノロノロと歩き始めた。

5章：2 〱霧〱（後書き）

どうかな？

コーラ大好きの変態性が出そうでしょう？

とことん自分がキモイです。

5章：3　く濃霧く（前書き）

あれ？

ナギサとワイナールの話に似てね？

誕生日ネタとか……

5章：3 濃霧

5年前……

パルム

小さなレリクス

広間の隅にある、日本刀を手に取ったファントム。

ファ

「良い刀だな……」

コクイントウよりも使いやすそうだ……」

ファントムの後ろに銀髪少女が近づく。
後に“ミスト”と呼ばれる少女だ。

銀髪少女は斧をかざした……

ファ

「サンゲ……」

良い名前だ……」

君もそう思わないか？」

振られた斧をかわし、銀髪少女の首に手刀がヒットした。

-
-
-
-
-
-
-
-

小さなレリクス
広間

銀髪少女

「……………うっ……………」

ファ

「気がついたか？」

銀髪少女は壁によしかかる様な態勢になっている。
手足を縛られ、身動きがとれない。
力づくでほごうとしても、無理のようだ。

ファ

「さて……………」

何故俺を襲った？」

少女の目線までしゃがみ、問いかける。

銀髪少女

「……………」

ファ

「……………」 黙るか……………」

……………」 質問を変えよう。
君の名前は？」

銀髪少女

「……………」

ファ

「……………」 ハア……………」

……………」 俺はファントム。

ファントム・レガスだ。

俺が名乗ったんだから、君の名前を教えてください」

ミスト

「……………」

ファ

「……………」 うーん……………」

お互いを知らないで、縄をほどくわけにはいかないんだが……………」

ファントムは自分の頭を掻き、困った顔をした。

ミスト

「……………」

「……名前なんて……無い……」

銀髪少女はボソッと口走った。

ファ

「名前が無い……？」

ミスト

「君が僕の家に入っただから悪いんだぞ！」

早く出ていけ！」

ファ

「捨て子か……」

………

悪かったな、勝手に家に入って」

縄をほどいて、銀髪少女を自由にする。

ファ

「ではこれで」

立ち去ろうとするが……

銀髪少女

「それ返せ」

ファントムの手を持っている、サングを指した。

ファ

「これも君のなのか？

……じゃあ、くれ」

銀髪少女

「ヤダ」

ファ

「交換は？」

銀髪少女

「ヤダ」

ファ

「……………」

気に入ったのにな……………」

……………」

……
そうだ。

君、俺について来い」

銀髪少女

「？」

ファ

「女の子を1人でレリクスに残せないし、俺について来ればサンゲを持っていられる」

銀髪少女

「何言ってるの!？」

僕は家を離れないぞ！」

ファ

「なら、サンゲを持って行こうかな」

見せびらかす様にサンゲを見せるファントム。

銀髪少女

「む……」

……
……
……
わかつた……」

そのサンゲが凄く大事なのか、ついていく事に決めた。

ファ
「やっぱり……大事な刀なんだな……」

柄の方を銀髪少女に向けて渡した。

ファ
「その服じゃ町へ出れないな……
……これに着替えろ」

何故持っているのかはわからないが、ローゼントライムをトランスした。

銀髪少女に渡す。

ファ

「先に外へ出てるからな」

少女の頭を撫で、広間を出ていった。

銀髪少女

「……………悪い奴じゃ……………ないのか……………？」

-
-
-
-
-
-
-
-

パ
ル
ム

タ
ル
カ
ス
・
シ
テ
ィ

孤
児
院
前

着替え終わった銀髪少女をパルム首都、タルカス・シティの孤児院へ連れてきた。

サンゲは鞘が無いので、ファントムがナノトランサーに仕舞っている。

銀
髪
少
女

「ここは？」

ファ

「今日からここで暮らすんだ」

銀髪少女

「!？」

ファ

「レリクスは危険だ。」

いくら家の様に暮らしても、危険に変わりはない」

銀髪少女

「家に帰してよ！」

ファ

「ダメだ。」

子供を1人にするわけにはいかない」

銀髪少女

「君だって子供じゃん！」

ファ

「俺は14歳だ」

銀髪少女

「僕は12歳だ。」

そんなに変わらないじゃないか！」

ファ

「（面倒だな……）」

銀髪少女

「面倒ってなんだよ!？」

ファ

「聞こえてた……」

……

……そんなに嫌か？」

銀髪少女

「嫌だね」

ファ

「じゃあ俺について来いよ」

銀髪少女

「また変な場所に行く気だな？」

ファ

「変な場所って言うな。

俺は変態じゃない。

……

……旅だよ。

一緒に来るか？」

銀髪少女

「家に帰してよ」

ファ

ファ

「そういえば……」

君、名前が無いんだっ たな……」

銀髪少女

「そうだけど……？」

ファ

「不便だから名前をつけよう」

銀髪少女

「え？」

ファ

「そうだな」

……うん……」

銀髪少女

「ちょっと、勝手に……」

ファ

「決めた……！」

君の名前は……」

……“ミスト”だ……」

ミスト	正午	カフェ	東地区	ホルテス・シティ	パルム	現在	-
17歳							-
							-
							-
							-
							-
							-
							-
							-

ガーディアンズにあるカフェで、ミストは淡々と話していた。

ミスト

「その日が……」

ファントムに出会って、名前を付けてもらった日だったな……」

どこか恍惚な顔をするミスト。

ルミ

「ミストって……」

本名？ だったんですか？

てっきりあだ名と思っていました」

マリ

「そんな話……」

ファントムから聞いた事無いんだけど……」

ミスト

「言いたくなかったんじゃないかな？」

それに、マリ君の読心術は、知りたい事を意識しない限り、過去の事はわからないんだよね」

マリ

「そのストーカー的な情報を言うの止めて」

ミスト

「ゴメンネ」

話続けて良い？」

-
-
-
-
-
-
-
-

4年半前……

パルム

カムラード・レリクス
最深部

カムラード・レリクスは、パルムでも大きなレリクスである。
そのレリクス内の最深部に、ファントムとミストがいた。

因みに、ファントムはミストにナノトランサーを買ってあげたので、
サンゲはミストが持っている。

ミスト

「ねえ……」

ファ

「ん？ 何だ？」

ミスト

「何でレリクスを回っているの？」
黒い奴等が集まりやすいのに」

黒い奴等とはSEEDの事だ。

半年前からレリクスを探索しては、傭兵稼業をしていたファントム。
ミストはその理由を聞かされていなかった。

ファ

「そういえば言っ てなかったな。
…… まあ、復讐の為かな？」

ミスト

「復讐？ 誰に？」

ファ

「教えない。
君に手を出すかもしれない」

ミスト

「ふん……」

ファ

「逆に君は……」

サンゲに何の意味があるんだ？」

ミスト

「復讐相手を教えたら」

ファ

「話が平行線になるだけだ」

ファントムは室内を隅々まで調べると、ため息をついた。

ファ

「ここも居ないか……」

ミスト

「復讐相手？」

僕の家の時も探してたの？」

ファ

「ああ。」

「……レリクスに居ると思うんだが……」

ミスト

「……………」

……お腹空いた〜」

ファ

「突然だな……………」

カ。リーメイトをトランスし、ミストに渡す。

少し前に初めて食べてから大好物だ。
美味しそうに食べる。

ミスト

「ファントムは？」

食べかけの方を差し出す。

ファ

「食べかけかよ……」

複雑な顔をしながら手に取り、2口で食べた。

ミストは新しい方を食べている。

腰かけれる場所に座る。

ミスト

「……………」

……僕ね……

物心ついた時から、1人だったの……………」

ファ

「ん？　じゃあ言葉は誰に？」

ミスト

「サンゲの持ち主」

ファ

「あの白骨死体……？」

コクリ、と頷いた。

ミスト

「僕を見つけてから、ちよくちよく会いに来てくれたんだ
今考えるとファントムみたいに優しいヒトだったな」

ファ

「そ、そうか……」

ミスト

「……でも……」

突然ステイリアが動いて……

……

……

ファントムみたいに、名前をつけてほしかったな」

カ。リーマイトを食べて話を終わらした。

何があつたのかわかったので、ファントムは聞かなかった。

ミスト

「……まだ常識は足りてないんだよね。

まあ折角、ファントムが近くに居る事だし、色々教えてよ?」

ファ

「はいはい」

ミストの頭をポンポンと叩く。

ミスト

「そうだし」

はい、これ」

サンゲをトランスして、ファントムに差し出した。

ファ

「？」

ミスト

「元々欲しくて僕を連れてるんでしょ？
だから」

ファ

「だが……」

ミスト

「いいから」

強引にサンゲを持たされる。

ミスト

「うん！ 様になってる〜！」

ファ

「……………」

……………ハハハ。

ありがとうな」

またミストの頭をポンポンと叩いた。

-
-
-
-
-
-
-
-

4年前……

ミストとファントムが出会って1年

ミスト 13歳

ファントム 15歳

パルム

ホルテス・シティ

南地区

ショッピングモール

アクセサリーショップ

ミストとファントムは、アクセサリーショップで何か選んでいた。

ミスト

「これどう？」

ヘアピンで髪を止めて、ファントムに見せる。

ファ

「似合ってるな」

ミスト

「むゝ……」

何か無愛想」

ファ

「悪い。」

……これはどうだ？」

少し大きめな、黒いアバンドをミストにつけてみた。
前髪を出し、後ろの髪を整える。

ミスト

「おゝ！」

鏡をミストに見せると、目を輝かせ、嬉しそうな顔をした。

ミスト

「これ！　これが良い！」

ファ

「ああ、似合ってるぞ」

今日はミストとファントムが出会った日。
ミストの誕生日はその日にした。

ミスト

「あ！　ファントムの誕生日……」

ファ

「俺の誕生日？
いいよ別に」

ミスト

「うわぁ〜社交辞令〜」

-
-
-
-
-
-
-
-

パ
ル
ム

ホル
テス・シ
ティ

南
地
区

ホル
テス第
一ホテ
ル

ファ

「1部屋しかないのか……」

フロントの前でチェックインしようとしたが、1部屋しかないようだ。

ミスト

「別に良いじゃん。」

僕達知り合って結構経つよ。」

ファ

「誤解するような言い方を……」

……って、ホテルマンさん、納得しないでください」

結局同じ部屋に……

ミストは部屋に入るなり、ベッドに飛び込んだ。

ファ

「!？」

ベッドが1つしかない……!？」

ミスト

「フフン。

ラブラブってやつ？」

ファ

「どこで覚えたんだその言葉？」

ミスト

「え？ 一緒に寝るの嫌なの？」

ファ

「そついう事じゃないが……」

ミスト

「あゝそうだゝ

今日僕の誕生日だゝ

お願い事聞いてくれたってゝ良いでしょゝ?」

ファ

「お…お願い?」

顔を赤くしたと思うと、頭を掻いた。

ミスト

「エ…エ……*の仕方を聞きたいなゝ……て……」

ファ

「なっ!？」

どこでそんな言葉を!？」

ミスト

「ちゃんと見てないと……お、大人になるんだぞう……」

ファ

「いやいやいや……」

13歳の子にそんな……」

ミストはベッドから立ち上がり、ファントムに抱きついた。

ファ

「……」

ミスト

「この頃……」

ファントムと一緒にいると……熱くなっちゃって言うか……

……恋ってこの事なのかなって……

恋人同士って、その……*……するんでしょ?」

ファ

「いきなりはしないから。」

それに俺達恋人同士だったか?」

ミスト

「む……!」

じゃあ僕を誕生日プレゼントとしてあげる。
これなら拒否権無いよ」

ファ

「……………」

……………」

……………」 わかった。

俺で良くて、後悔しなければ」

ファントムはミストの背中に手を回した。

5章：3 濃霧（後書き）

ファントムどんだけ愛人がいんだよ!?

羨ましいな

……いや、逆に考えたら……

ほぼ毎日夜の相手を……

それはそれでキツいな……

5章：4　く幻影の幻影く

現在……

ミスト　17歳

パルム

ホルテス・シティ

東地区

ガーディアンズ

カフェ

ミスト

「それから」

＊の知識を教えてもらう傍らく一般知識を教えられて……

“情報”に興味を持ったのく

だから“情報屋”になっただんだく

サラリと衝撃的な話を話し終わったミスト。

ルミアは絶句しているが、マリは何とも思っていないようだ。

ミスト

「これがファントムとの関係」

マリ

「……?……」

何でファントムと会わなくなったの?」

ファントムがミストと旅を続けていたのならば、マリやエミリア達と知り合っていたはず。

しかし、ファントムがエミリアと出会った海底レリクスには居なかった。

ミスト

「情報という分野を知っていく内に君を知ったんだ」

ファントムの恋人、神山・マリ君に」

………
……… なんか、罪悪感って言うのかな？
つまり、僕から離れていったの………」

ルミ

「じゃあ何で…今になってファントムさんを探すんですか？」

ミスト

「制裁者って知ってるよね？」

ルミ

「ええ………」

ライア総裁は都市リンヨの事件を、組織的犯罪とだけ言って伏せて
いましたが………」

その組織と言うのが、8人で構成されている旧文明人。
それが制裁者………」

バアルさんに聞かされました」

ミスト

「そうだね」

でも若干違うな」

ルミ

「？」

マリ

「………！」

カレンさんやシヌが隠している事？」

ミスト

「当たり前」

あの2人は嘘を言った。

……まず、制裁者は8人じゃなく12人で構成されている。
そして旧文明人じゃなく、シヌ君と同じ第一人類が体を支配しているの」

マリ

「支配……」

リトルウィング襲撃事件の時の……」

ミスト

「そうだね」

君達の友人だと」

シズル君、エミリア君、ナギサ君……そしてファントムが、
制裁者メンバーの支配する体なの」

ルミ

「エミリアやナギサさんまで……!？」

ミスト

「君達を殺し終わった後、シヌ君とカレン君が来て、ファントムを
拉致して、君達を生き返らせた……」

……

その拉致理由が、ファントムを探す理由かな？」

ルミ

「拉致した理由……」

確かに、何の目的で……」

ミスト

「ファントムはね」……

制裁者に一番抵抗出来る逸材……

あの強さを持つてすれば、他の制裁者と渡り合えるんだ」

……

……

でも納得いかないよね」

いくらグラールを守るからって、拉致って戦わせるなんてさ」……

……

「だからさ」……

もう一度僕の手に戻すって……決めたんだ。

……制裁者だろうが太陽王だろうが何だろうが……！

邪魔を排除してでもファントムを取り返すって！」

後半は“”を使わず、感情的に言葉を吐いた。

大きな声ではなかったが、カフェ内の回りの客が見る程……
声に怒りが籠っていた。

マリ

「……いや……

元々アタシの恋人だから……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

ニューデイズ
キラビ山
グラール教団所有の山荘

シヌ
「
」
「
」

大きなリビングの窓際で、シヌが流行りの歌を口ずさんでいた。
人気アイドルの最新曲だ。

そんな中でミレイはソファに座り、テレビを見ていた。

ミレイ

「シヌさんが歌うと変な感じがします……」

ソファの背もたれから顔と手を出し、シヌの方を見た。

歌を止めてミレイを向くシヌ。

シヌ

「失礼だな……」

興味を持つくらい良いだろう?。」

ミレイ

「まあ、そうですが……」

「1年前の貴方と比べると……」

……

……って、「あのヒト」はどこに？」

シヌ

「オウトク・シティ。

今日の買い物当番だ。

……

……

……そろそろ良いんじゃないか？」

急に真剣な顔をミレイに向けた。

ミレイ

「……何ですか？」

シヌ

「……わかってるだろ？」

そろそろリトルウィングに戻しても良い頃だ。

いつまでも仲間に……

ミレイ

「彼を仲間から引き離したのは貴方ですよ」

シヌ

「そうだが……」

ミレイ

「せめて制裁者を倒し終わってから……」

あとは“神”が転生しないようにするでしょう」

シヌ

「……………」

ミレイ

「……シヌさん……変わりましたね……」

昔の貴方なら、そういう事は言わなかった……

……間違っではいませんか……！

ただ……

……………」

シヌ

「……人間を根本的に嫌う俺が仲間を信じるのは……良い事が起きない……」

……………」

俺達が生き返ってすぐに、君が言ったな……

幻視の能力か？」

ミレイ

「生き返ってから使ってませんよ。」

それに“神”は生き返らす時に、幻視の能力は使うなど……」

シヌ

「……“神”の奴……」

良い能力なのに……」

ミレイ

「言い方が卑しい……」

-
-
-
-
-
-
-
-

ニューデイズ

キラビ山

オウトク・シティまでの道路

麓

人通りが少ない為か、歩道には真新しい雪が積もっていた。

その道に、青いロングコートを着た青年が足跡を残していく……

染めたと思われる黒い髪が目立つこの青年……

リトルウィング襲撃事件の犯人であり、現在行方不明のファントムである。

ファントムの向かいから、カレンが歩いてきた。
簡単な防寒具を着ている。

すれ違うと、2人共足を止めた。

カレ

「街に行く時くらい、フードを被ったらどうだ？」

ファ

「……………」

カレ

「マリとルミアが“霧の情報屋”に接触した……

1週間後の暗殺計画を止めるには、君達はマリ達と会う事になるぞ。
それにバアルは、パルム代表アザエルの警護につく……

気づかれないように、顔は隠すようにしておけ」

ファ

「……………」

「……カレンも、情報を流している事を気づかれるなよ……」

ファントムはフードを被り、街へ向かった。

5章：4　く幻影の幻影く（後書き）

買い物当番……

つまり、お使いw

5章：終　く　凄惨への日々　（前書き）

最近スローペースです。

5章：終　　ゝ凄惨への日々ゝ

SEED事件5周年まで……

あと6日……

クラウド6

リトルウィング

ファントム自室

ミストの話を聞いた日の翌日……

マリはエミリアとナギサを部屋に集め、伝えられる事を話した。

エミ

「アタシ達も制裁者の器……」

ナギ

「対策は無いのだろうか？」

マリ

「シヌが2人を連れていかなかったのは、支配されないと思ったからだって。」

「……今のところは大丈夫だよ」

話が長くなってしまい、生温くなったコーヒー……
それに口を付けるマリ。

3分の1程飲むと、テーブルに置いた。

マリ

「他のヒトにも伝えといてね。
アタシも出来るだけ話しとくから」

ナギ

「了解したが……」

「……ミストという女性は今何を？」

マリ

「制裁者の情報を集めるってさ……」

エミ

「え？

ファントムはどうするの？」

マリ

「6日後のSEED事件5周忌に集まるから調べる必要は無いかも
って……

何でファントムが集まるのか、教えてくれなかったけど」

エミ

「……もう5年経つのか……

……って、感傷に浸ってる場合じゃないや……

何で教えてくれなかったの？」

マリ

「さあね……

絶対来るってだけ言っていたね……」

ナギ

「ふむ……

齒切れが悪いな」

3つあるコーヒーは冷めきっていた。

-
-
-
-
-
-
-
-

S E E D 事件5周忌まで……
あと5日……

モトウブ
ダグオラ・シティ
ガイークの酒場

ミストは酒場の扉を開けた。
酒と煙草が混ざった臭いが鼻を突く。

ガイク

「すまないな嬢ちゃん。
子供入っちゃダメだ」

確かに17歳という若さだが、顔が幼く見えるので一層子供に見えてしまう。

ミスト

「ヒトを待たしてあるんだ〜
“ゴールド・シルバシノ”って言うの〜」

ガイク

「ああ、そうか。
ほら、そこだ」

マスターのガイークは、店の奥の席を指した。

ミストは奥の席に座り、ゴールドと向き合っ形になった。

ミスト

「制裁者自ら僕を呼び出すなんて、
どんな風の吹き回しかな？」

ゴールド

「よくそんな口を聞けるな……
私達同志の隠れ家に忍び込み、計画の情報を売るなど……
……覚悟は出来てるのか？……」

ミスト

「出来てるよ」
……全てを敵に回して、世界を滅ぼしても構わないって位にね」

ゆっくりと、
魔杖バルバトスを取り出した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-

S E E D 事件 5 周忌まで……
あと 4 日……

モトウブ
ダグオラ・シティ
ガイークの酒場

バル

「酷い有り様ですね」

昨日……

ガイークの酒場で、少女と男性が殺し合いをしたと通報があった。

バルは別の仕事をしていた為、1日遅れで着いた。

怪我人も死亡者もいなかった。

しかし、酒場内はメチャクチャにされて、普通に立つてはいられない。

既に少女と男性は逃走したようだ。

バル

「レオ先輩。」

何があっただんですか？」

レオは昨日から現場調査をしている。

レオ

「よ！ 久しぶりだな。
聞いた通りだと思うぞ」

バアル

「少女と中年男性が喧嘩……」

酒場の外まで行って戦い、そのまま行方知れず……
マスターも気の毒に……こんなに壊されて」

レオ

「ガイークはカウンターで片付けているぞ」

壊れた酒瓶や、小物類を片付けているみたいだ。

レオ

「ガイークによると……」

少女は銀髪、身長は170R pくらい……

黒いヘアバンドを着けていたらしい。

中年男性は名前が割れている……

ゴールド・シルバシノ。

タイラーに資金援助をしていた金持ちだ」

バアル

「ゴールド・シルバシノ……

銀髪で黒いヘアバンド……

……

どっちも心当たりがありますが……

レオ先輩はゴールドの方を頼みます」

レオ

「了解」

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED事件5周年まで……
あと4日……

Gコロニー
居住区

バルが仕事を終えて帰宅。
家のリビングに入ると……

バル
「何してるんですか……？」

レディ
「お帰り！ お兄ちゃん！」

ミスト

「お帰り」

バル

「元々居ましたっていう雰囲気を出さないで下さい……」

何故かミストが、バルとレディの家に居た……
しかもレディと楽しそうに話していたみたいだ。

バル

「ミストさん……」

2日前のガイークさんの酒場で暴れたの……
貴方ですよね？」

ミスト

「バレた？」

僕と1、2回しか会ってないのによく覚えてるね」

バル

「早くガーディアンズに出頭して下さい」

レディ

「まあまあ。」

ミストさんも訳があるみたいだし、話くらい聞いてあげて」

バアル

「……レディが言うなら、考えなくもないが……」

ミスト

「わっい、わっい」

- - - - -

SEED事件5周年まで……
あと3日……

制裁者隠れ家

アンナ

「ハッ！」

ガキ1人連れてこれないなんて、腕が鈍ったんじゃないの？」

楕円形のテーブルを囲み、9人の制裁者が座っている。

ゴールド

「……………」

アルベルト

「別に良いじゃないですか。
時間はあります。」

……それよりも、シズル君とリゼン君は準備出来ていますか？」

シズル

「ああ、出来てる。

あとはミストだけだ」

リゼン

「私も“切り札”の準備は出来ました」

アルベルト

「ミスト君が捕まえられなかったのは残念ですが……
計画は順調。

あとは3日経つだけです」

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED事件5周年まで……

あと2日……

パルム

タルカス・シティ 郊外

SEED 事件犠牲者慰霊碑

慰霊碑は中央に置かれており、周りに石造りのベンチが数列、その周りは芝生で囲まれている。

犠牲者の名前がつづられた石碑の前でヴィヴィアンがしゃがみ、花束を添えた。

その少し後ろにルシフェルが立っている。

ヴィヴィアン

「……………」

あの事件から……

5年経ちましたか……」

ルシフェル

「……そうだな（――）」

キセルの煙を吸い……

吐き出す……

ヴィヴィアン

「2日後……ここで何をするのですか？」

ルシフェル

「バアルから聞いたが、パルム代表が暗殺されるらしい……ファントムが現れるとも言っていた」

ヴィヴィアン

「バアルさんが？」

ルシフェル

「いや……」

情報を提供したのは“ミスト”という情報屋だ。ファントムが現れる理由はわからないとさ……

全く……（「3」）「

もう一度キセルを吸って、吐き出す。

ルシフェル

「だが興味深い事に、暗殺計画を考えたのは制裁者って話だ。世界がまた危機に瀕してるなw」

ヴィヴィアン

「嬉しそうですね……」

ルシフェル

「5年前はヴィヴィアンに良いところを持ってかれたからな。

（´・ω・｀）

今度は俺に活躍させてくれよ。

計画が実行される前に終わらしてやる」

- - - - -

SEED事件5周年まで……

あと1日……

ニューデイズ

キラビ山 山荘

夜

シヌ、ミレイ、カレン、ファントムがリビングで、何か書かれた紙をテーブルに数枚並べて見ていた。
ほとんどが地図になっている。

カレン

「明日は私の方で手を回すが、気づかれないようにコートを着てくるんだぞ」

ミレイ

「はい、わかっていますよ」

シヌ

「情報流出に指名手配人の手助け……
俺達と一緒に居るだけでも除隊ものだぞ」

カレン

「手助けが欲しいのか？ 欲しくないのか？」

シヌ

「欲しいです」

ファントム

「……………」

ファントムはイスから立ち上がり、リビングを出て行こうとした。

シヌ

「ファントム君、作戦会議は終わってないぞ」

ファントム

「ゴールドとリゼンを捕まえて、お前とミレイが奴等の精神を引き剥がす。

それだけだろ？

……俺はもう寝る」

リビングを出て、2階の自分の部屋に向かった。

シヌ

「……………」

……………！！……………

反抗期というやつか！」

ミレイ

「違います」

カレン

「どうしたんだ？

気が立っているな……」

シヌ

「明日の事が心配なんだ。
結構知り合いが来るみたいだしな」

ミレイ

「わかってるだけでも……」

マリさん

エミリアさん、

ナギサさん、

バルさん、

各勢力代表者……」

シヌ

「あと、来るとは限らないが……」

“霧の情報屋”が気がかりなんだろう」

カレンが総裁室に忍び込み、コピーしてきた暗殺計画調査書をシヌは広げた。

情報提供者の一面だ。

カレン

「ミスト……」

6日前にガーディアンズで姿を見たが……」

シヌ

「ミストちゃんとエミリアちゃん達が会っていた時の事だろ？
ファントムとの関係は聞いたか？」

カレン

「遠くでな……」

シヌ

「ファントム君とミストちゃんは恋人同士だったんだ。

……明日は危険な日になるのに、大切な奴がもう1人増える。
人望がある人間は大変だな」

他人事のように話した。

シヌ

「まあ、ファントム君の気持ちかわからないわけではないんだが……

……俺達もお開きにしよう。

ミレイちゃん、テーブルの上をまとめといてくれ。
俺はカレンちゃんを送っていいこう」

カレン

「必要無い」

シヌ

「キツパリだな……」

5章：終　　く凄惨への日々（後書き）

制裁者も別の企みがあるみたいですね……

切り札とは？

ミストを狙う理由は？

6章：0　〈思案〉

SEED事件5周年……当日

パルム

ホルテス・シティ

中央地区

同盟評議会ビル

パルム代表室

男性秘書

「アザエル代表。

お時間です」

秘書である男性キャストは代表室の扉を開け、アザエル代表に時間を告げた。

アザエル

「もうそんな時間ですか……
船は用意できてますか？」

男性秘書

「もちろんです。
しかし、よろしいのですか？」

アザエル

「暗殺の事は気にする必要はありません。
私も武を極めた時期もありましたし……
ライア総裁は“特別な護衛”を付けると言っていました。
バアル・セレンサーというお方です」

男性秘書

「ガーディアンズ機動警護部隊長……」

アザエル

「そうですよ。」

………

では行きましょう。

バアルさんもお待ちじゃないでしょうか………」

-
-
-
-
-
-
-
-

パ
ル
ム

タルカス・シティ 郊外

SEED 事件犠牲者慰霊碑

昼 11 時

慰霊開始時刻は正午だが、既に多くのヒトが集まっていた。

各勢力代表者はアザエルとカーツだけが来ていなかった。

ライア、タイラーは慰霊碑の前に立っていた。

タイラー

「それは本当か？」

ライア

「ああ、間違いない。

“霧の情報屋”の調べだ」

タイラー

「だったら、アザエルは不参加にした方が良い」

ライア

「アタシもそうしろって言ったさ。

だが、参加しないわけにはいかないって……

……仕方無いからバアルを護衛に付かせてるよ」

2人は呆れた表情をすると、同時にため息をついた。

アザエル

「どうしましたか？」

タイラーさん、ライア総裁」

いつの間にか、アザエルが2人の前にいた。

後ろに青いゴシカリアシリーズを着たバアルが立っている。

ライア

「!？ いつの間に……」

アザエル

「私も落ちたものじゃないでしょう。
いざとなれば戦います」

バアル

「その前に僕が手を出させません」

アザエル

「フフ、頼もしいですね……」

……

……

カーツさんは？」

辺りを見渡して確認する。

タイラー

「まだだな。」

時間があるとはいえ、珍しいな……」

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED 事件犠牲者慰霊碑

3 列目ベンチ

昼 11 時半

端の方から

エミリア、ナギサ、マリが並んで座っていた。

エミリア

「どう？」

ファントムいた？」

ナギサが背伸びをして見渡したが……

ナギサ

「……いや、ファントムらしき人影は無いな……」

マリ

「あと30分位で慰霊が始まるのに……」

ミストの情報に間違いが？

.....

というか、ミストはどこに行ったの？」

来る時は一緒だったのだが、近くにミストはいなかった。

-
-
-
-
-
-
-

SEED 事件犠牲者慰霊碑

外縁部 建物 屋上

昼 11 時 40 分

ルシフェルは双眼鏡を手に、慰霊碑の近くに集まる人々を見ていた。

ルシフェル

「こちらルシフェル。」

目標のリゼンとバルは見つかったか？」

リリス

「まだ姿を現さないわ」

ロスト

「俺もだ。」

ファントムすら見つからない」

ルシフェルの右斜めの建物にロスト、左斜めにリリスが観察を行っていた。

どちらも遠くに居る。

丁度ルシフェルの位置が、ライア達が見える位置にある。

ルシフェル

「ヴィヴィアン。」

周辺の建物に該当者は？」

ヴィヴィアンはルシフェルの横で衛星に繋がり、周辺の建物の屋上を搜索をしていた。

暗殺はターゲットの近くにいる場合が多いが、スナイパーライフルを使う事もあり得る。

ヴィヴィアン

「他の建物にはいません。」

やはり、大衆の中にいるんじゃないでしょうか？」

ルシフェル

「引き続き監視をしてくれ。」

……しかし……どうやって暗殺を……」

双眼鏡を集まった人々に向けた。

-
-
-
-
-
-
-

S E E D 事件犠牲者慰霊碑
外縁部 慰霊碑東側入口
昼 11 時 50 分

カレンは複数ある入口の 1 つを警備していた。

因みに西側がイーサン

北側がルミア

南側はルウが担当している。

グラールチャンネル5のリポーター、ハルが今通っていった。

パルムに来られないヒトもいるので、テレビ中継するのだ。

カレン

「……………」

黒、白のコートを着た2人が入口を通った。明らかに怪しいが、カレンはわざと通した。シヌとミレイだ。

ミスト

「ファントムがいなかったネ」

カレン

「……！」

カレンの肩にミストの手が回されていた。

カレン

「……何の事だかわからないな」

ミスト

「またまた」……

……
ていうか……

情報屋の僕にその言葉は無いよ」

優しくかった顔が厳しい顔になる……
……が、優しい顔に戻す。

ミスト

「ガーディアンズで僕が、エミリア君とルミア君に昔話にしていた
時、居たよね？」

カレン

「……！？」

ミスト

「あと、総裁室から調査書を盗んでコピーしたよね？」

「……まあ、尾行は苦手だから、二ニューデイズで見失ったけど」

カレン

「……………」

ミスト

「早く教えてほしいな」

カレン

「……………」

ミスト

「……………」

あーそう

（総裁室で盗みを働いた事、言っちゃおっかな）

カレン

「貴様……………」

微笑みながら、カレンの耳元で囁いた。

6章：0　ゝ思案ゝ（後書き）

自分……

常識欠けてるんで、変な言い回しをしている場面があります。

句読点の場所がおかしいのは違います。

ホントにアホなだけです（笑）

6章：1　く笑顔冷徹く（前書き）

誤字がありました。

指摘してくれた読者様、ありがとうございます。

ヴィヴィアンがオブシディアンを持っているところで……

ゴールドなのに、ロストになっていました。

6章：1　く笑顔冷徹く

パルム

タルカス・シティ　郊外

SEED 事件犠牲者慰霊碑

昼 11 時 59 分

慰霊開始時刻 1 分前になってもカーツは訪れなかった。

ライア

「何やってんだよカーツは……!？」

アザエル

「集まった方々も不審に思っていますね……」

先ほど私の部下を同盟軍に向かわせましたが、カーツさんは既に出発した後だと……」

タイラー

「……………」

仕方がない。

カーツ抜きで始めるしかないだろう」

12時00分

慰霊は粛々と始められた。

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED事件犠牲者慰霊碑

外縁部 建物 屋上

12時05分

演説を始める前にカーツ司令官について5分程度話した。

話し終わった後の演説はライア総裁だ。

ルシフェル

「始まったか……」

……
目標は見つかったか？

（・・）？」

（リリース）

「依然……」

（ロスト）

「全然だな……」

ヴィヴィアン

「……」

……

…… 反応がありました！」

ヴィヴィアンが衛星を使い、制裁者を見つけ出した。

ヴィヴィアン

「私の地点から北……」

ほぼ真正面の建物にゴールド・シルバシノがいます！」

ルシフェル

「よくやった……！」

！（b^_~^。）

リリス、ロスト、2人はそこで待機してライフルで援護。
俺とヴィヴィアンが向かう。

ε||ε||（・|・）「

ルシフェルは双眼鏡を仕舞い、ヴィヴィアンは衛星との通信を切った。

- - - - -

SEED 事件犠牲者慰霊碑

外縁部 建物 屋上 北側

ゴールド

「ふわぁ……」

ゴールドはイスに座りながら欠伸をした。

ルシフェル

「（・o・）ノよう。

ゴールド・シルバシノ」

ルシフェルとヴィヴィアンは、自分と同じ名の武器を携えていた。
ついでにルシフェルはキセルを吸っている。

ゴールド

「……………」

ルシフェル

「聞いたぞ。」

お前、ローグ스에資金援助していた富豪なんだって？

有難い事だな。

(・・ω・・)

……………」

まあ、今のお前はそのゴールドじゃないんだろ？
第一人類」

ゴールド

「……………」

あの嬢ちゃん(ミス)の情報か……………」

ヴィヴィアン

「すぐにゴールドさんの体から出ていきなさい」

ゴールド

「悪いが……………」

ファントム・イリアの命令以外聞かないんだ」

素早く立ち上がり、イスを蹴り飛ばして攻撃した。

ルシフェルはセイバーで斬り捨てた。

ゴールド

「戦うって柄じゃないが……
イリアの為に戦おう」

小さく改造したエンドイフを、2本取り出した。

ルシフェル

「ボコボコしてやるよ。」

（――）

リリース、ロスト。
サプレッサーをつけるよ」

（リリース）「了解」
（ロスト）「了解」

ルシフェルは武器をセレスティアルブレイズに変えた。

-
-
-
-
-
-
-
-

タルカス・シティ
中央地区 広場
12時15分

人々が行き交う広場で、リゼンは突っ立っていた。ビルに設置してある大画面のテレビを見ている。もうそろそろでライア総裁の演説が終わる頃だ。

リゼン以外にも歩いていないヒトが多い。

リゼン

「あと5分……」

も、かかりませんか……」

画面の左上にある時計を確認する。

？

「また愚かな事をしようとしているのですか？」

リゼン

「……その声……」

リゼンの真後ろにレディが立っていた。
ピンク色のツキノユズリハを着ている。

リゼンは振り向かない。

リゼン

「レディ・イヴ・ディグニティ様」

レディ

「もうディグニティ家の族ではありません。
貴方もこの時代のリゼンではありませんよね？」

リゼン

「……やはり聡明なお方だ……
貴族堕ちの妹でしたが、仕えていても気分は害しませんでした」

レディ

「聡明……
違いますね。」

貴方達制裁者の事は友人に聞きました」

リゼン

「友人？」

.....

なるほど.....ミストさんですね。

全く、面倒な.....

.....

.....

それで.....

私をどうするんですか？」

ゆっくりと振り向く。

レディ

「私はこれまで.....

お兄ちゃんのお役に立った事がありませんでした。

今日の勝手な行動を怒るでしょうが.....

何もしないわけにはいかないんです」

レディはディグニティ家の格闘術の構えをとった。

リゼン

「良いでしょう……」

貴方の力を試してみたかった」

リゼンも同じ構えをとる。

周りの野次馬など気に止めなかった。

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED事件犠牲者慰霊碑
外縁部 北側 建物 屋上

ロスト

「……………」

ロストは戦いを始めず、他の建物に移った。
出来るだけ慰霊碑側から遠ざかる。

ルシフェル

「チツ……………（―――#）」

リリース、ロスト。

慰霊碑周辺の警戒を続ける。

俺とヴィヴィアンでゴールドを追う」

（リリース）

「気をつけて！」

（ロスト）

「こっちは任せとけ」

ルシフェル

「頼んだ。」

ヴィヴィアン、行くぞ。

ε 〓 ε 〓 (・ | ・)
「

ヴィヴィアン

「はい！」

ゴールドが通った建物を渡っていく。

慰霊碑外縁部から結構離れた頃……

ゴールド

「そろそろ良いだろう」

急に足を止め、ルシフェル達と向き合った。

ゴールド

「悪いね2人共。

制裁者言えど実弾は避けられない。

被弾しても死なないだけで、傷はすぐに治らない」

ルシフェル

「……そういえば……

お前達はどうやって体に乗っ取っている？

(？―？)

2年前の亜空間事件とは状況が違う」

ゴールド

「そうだな……

旧文明人とは違う…な！」

右手のエンドイフを振り上げ、ルシフェルに下ろした。

片手の剣で受け止めるが、もう片方の剣で攻撃しなかった。

ヴィヴィアンが瞬時に、オブシディアンでゴールドの後ろをとって
いたからだ。

ゴールド

「あの嬢ちゃんの話をごとまで知っているかはわからないが、俺達制裁者の生前は神病感染者だ。」

シヌに殺されたが、アイツと行っていた事はほぼ同じ……
人間を滅ぼそうとした俺達はどこに行くと思う？」

右手のエンドイフを引き、ルシフェルの態勢を崩す。

その隙に、ヴィヴィアンにバックキックをくらわして屋上から落とした。

ルシフェル

「ヴィヴィアン！」

ゴールド

「自分の心配……！」

左手のエンドイフで薙ぎ払う。

ルシフェルがガードすると、右手のエンドイフを振り下ろした。

ルシフェル

「調子こくな！」

無理矢理体を回転させ、ゴールドに距離をとらせる。

ゴールド

「やはり強いな……」

堕天使の名を持つだけはある」

ルシフェル

「（・・）？」

ゴールド

「キリスト教はグラールには無いが……」

キリスト教において…ある天使がいた。
名をルシフェル。

知恵の神・エホバが統治する天界で神の次に実力者。
しかしルシフェルは自分の実力に溺れた。

また、人間を愛するエホバに愛想を尽かした。

そして……

ルシフェルは天使の1/3を見方に付けて、神に反旗を翻した。
だが天使ごとき神に敵わない……そして地獄に堕ちた。

……

……

地獄は罪を犯した者が堕ちる場所。

そう、制裁者は地獄に堕ちた。

1年前に死んだシヌもな」

ルシフェル

「長い話ご苦労様。

（４）

信じようが信じまいが、ヴィヴィアンが倒すのに変わりはない」

ビュン！

鋭く輝くフォトン弾が、ゴールドの右目を貫いた。

ゴールド
「グハア！！
クソ……！！」

向かいの建物で、ヴィヴィアンがインフィニットコランダムを構えていた。

ゴールド
「クソ……油断した……ゲフッ！」

ゴールドの腹を思いっきり蹴り、頭を踏みつけて跪かせた。
手錠を取り出し、手を縛る。

ゴールド

「クソ……」

侮れないな……」

ルシフェル

「もう1人と行動すべきだったな。」

（「」）

リゼン・シュレイドはどこだ？」

胸ぐらを掴んで立たせた。

ヴィヴィアン

「不思議ですよね……」

暗殺なのに……」

すぐにしなかった事が……」

下の階から屋上へ上ってきたヴィヴィアン。

手を顎につけて考える。

ルシフェル

「どうなんだ？」

もう片方の目も潰そうか？

（´・ω・｀）「」

44・マグナムを左目に向ける。

ゴールド

「ルシフェル……」

顔に似合わず……残忍だな……」

ルシフェル

「旧文明で成り立った性格だ。
(、へ、)」

ゴールド

「ハハハ……！」

………
暗殺………か………

あの嬢ちゃんとは私とリゼンの能力まで知らないのか………」

ルシフェル

「能力………？(。！。)」

ゴールド

「私の能力は“金”。

金での契約を完璧出来る。

リゼンの能力は“王権”。

100人までの人間を有無を言わず命令させられる。

………もうわかるんじゃないか？

………

………

12時30分………

演説は終わって、祈りの時間だ」

ルシフェルの手に付けてある時計を見て、時間を確認した。

ルシフェル

「金の契約……」

王の命令……

……

……まさか……」

ヴィヴィアン

「早く戻った方が……！」

ルシフェル

「ああ」

ゴールドを担ぎ……

急いで慰霊碑に向かった。

6章：1 笑顔冷徹（後書き）

念のために書きます。

時々出てくる“神”はキリスト教のエホバじゃありません。

神は、神という名しかありませんから。

キリスト教でエホバは唯一絶対神なのに、無理矢理突っ込んですみません。

6章：2 〱四面楚歌〱（前書き）

*ツドイーターモバイルのミッションで、四面楚歌ってあったな……

（何の話？）

6章：2 〱四面楚歌〱

パルム

タルカス・シティ

中央地区 広場

リゼン

「クッ……！」

レディの蹴りを受け止められず、地面に背中をつけるリゼン。
周りの野次馬から歓声上がる。

レディ

「……思っていたほど強くありませんね……」

リゼンはネックスプリングをして起き上がった。

リゼン

「良いですね……」

貴族墮ちのお兄さんよりずっと良いですよ」

レディ

「次お兄ちゃんを愚弄したら……」

リゼン

「ではまたの機会に。
そろそろ時間なので」

ステルス迷彩の電源を入れると同時に、発煙手榴弾を地面に落とす
た。

煙が広がっていき、視界が遮られる。

レディは前に進んだが、諦めてその場を後にした。

レディ

「逃がした……」

逃走を許してしまった事を悔やんだが、自分も身を隠す事に専念した。

早足でその場を立ち去った。

-
-
-
-
-
-
-
-

タルカス・シティ

SEED事件犠牲者慰霊碑

中央慰霊碑

12時30分

ライア総裁の演説が終わり……

ライア

「犠牲者の冥福を祈りましょう……」

参列者は目を閉じ、手を胸の前で組んだ。

男性ニューマン

「ウオオオ!!」

静寂を切り裂く男性の声……

2列目のベンチにいた男性ニューマンが、バットを持ってアザエルに襲いかかった。

男性ニューマン

「ウオオオ……ブッ!」

バルが手加減無く頬を殴った。
その一撃で気絶したようだ。

アザエル

「ありがとう」

バル

「いえいえ……」

……それよりも……」

ベンチに座っていたヒト、芝生側にいたほとんどのヒトが立ち上がり、武器を手に持っていた。

ライア

「な……！？」

タイラー

「これは……」

アザエル

「私を殺害する為に大勢の暗殺者を……
嬉しいような悲しいような……」

……もう“暗”殺ではありませんが……」

バル

「ふざけている場合ですか？
貴方達代表は早く逃げて下さい」

ライア

「どうやってだよ？
大勢に囲まれて逃げようにも逃げられないだろ」

バル

「入口の警護を任されたガーディアンズが、後ろから倒してくれる
でしょう。
道が出来たらすぐに逃げて下さい」

大衆に距離を詰められ、一触即発状態だ。

3 列目ベンチ

マリ

「変わったお祈りだね。

代表者達のところへ行こう！」

エミリア

「わ、わかった」

ナギサ

「わかった」

エミリアはおどおどしているが、ナギサは冷静になっている。

中央慰霊碑

最前列近くのヒト達を倒し、バアル側につくマリ達。

バアル

「君達はリトルウィングの……」

マリ

「手助けするよ。」

さすがにファントムも出てくるでしょ」

手をゴキゴキと鳴らし、護身のフォトンナイフで戦闘態勢をとる。

シヌ

「悪いが、ファントム君は来ないな」

マリ達のように大衆を倒し、シヌとミレイが姿を表した。
ミレイは真っ白い仮面をつけている。

マリ

「シヌ……」

シヌ

「作戦変更でファントム君は別の場所だ。
制裁者もいないようだしな」

シヌとミレイも、バアル側につく。

シヌ

「制裁者達の思うようにはさせられないからな。
君達を助けよう」

「ウオオオ！」

襲いかかるヒトを蹴り飛ばすシヌ。

それが封切れだったかのように、一斉に襲いかかってきた。

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED 事件犠牲者慰霊碑
西側 芝生部分

イーサンが状況に気づき、操られたヒト達を捕まえようとした。
しかし、敵意がイーサンに向けられた。

「アアア！」

イーサン

「クッ……」

ティーガ・ラガンをスタンモードにして攻撃する。

操られているのを薄々わかっているので、イーサンは罪悪感を感じる。

後ろから女性キャストが殴りかかってきた。

イーサン

「クッ……」

避けられない態勢だったので、武器の機械部分でなんとかガードする。

女性キャストに氣をとられて、目の前で鉄パイプを振り上げるヒトに気づけなかった……

イーサン

「……………」

「……………！」

目を向けると、鉄パイプはすぐ近くに……

「グワァ！」

鉄パイプを持ったヒトが、肩を押さえて倒れた。

血が宙を舞う。

女性キャスト

「キャア！」

女性キャストは後ろに引つ張られ、武器で気絶させられた。

ルシフェル

「イーサン……！」

油断するな！

（、o、）「」

後ろにはルシフェルとヴィヴィアンが立っていた。

ルシフェルが周りのヒトを倒した。
ヴィヴィアンがイーサンを起こす。

ルシフェル

「ロストとリリスが援護射撃している。

ここは任せて、ルミアとカレン、ルウと一緒に行動しろ」

イーサン

「あ、ああ。

わかったが……

こりゃあどうなってんだ？」

ルシフェル

「詳しくは話せないが、アイツのせいだな。

（「だ、」）

西側入口で、応援のガーディアンズに取り押さえられているゴールドが……

ルシフェル

「ここまで大々的にしてやられたら……話さないわけにはいかないはずだろう。」

(――)

……
「さあ、行け」

イーサン

「……ああ」

イーサンは北側の方角へ走り出した。

ルシフェル

「リリス、ロスト。」

イーサンか他の奴の援護だ。

致命傷にならない程度に狙撃だ。

（＜Ｄ＞）「

（リリース）

「了解！」

（ロスト）

「俺達……了解しか言っていないような……」

- - - - -

中心慰霊碑

「ウオオオ……！」

……グワァ……！」

ライアの拳が襲ってきた男性ヒューマンの鳩尾にヒット。
男性ヒューマンは大衆の中にダイブしていく。

シヌ

「倒しても倒しても減らない……！」

Aフォトンを硬質化させて飛ばし、10人一気に倒す。

エミリア

「あわわわ……」

雷属性法撃で中距離のヒトを倒していたが、近くまで迫られておどおど……

ナギサ

「エミリア、伏せろ！」

スティールハーツを横にして、殴り飛ばす。

エミリア

「あ、ありがとう！」

お礼を言ってナギサにレスタをかける。

バル

「……………」

……！？……

あそこにいるのは……」

大衆の中で、撮影用のマイクが見える。

ハル

「（誰か助けてー）」

ハルの声が小さく聞こえた。

バル

「シヌさん。」

少しの間アザエルさんを頼みます」

シヌ

「どうかしたのか？」

バル

「まだ普通のヒトがいるんです」

カノン・クオリアを取り出し、ハルまでの直線上にいるヒトを倒していく。

気絶したヒト達を飛び越え、ハルがいる場所へ辿り着いた。撮影用マイクを持っているのはスタッフのようだ。

バル

「2人だけですか？」

迫ってくるヒトを撃って気絶させる。

ハル

「私とこのヒトだけです……！」

バアル

「わかりました。

離れないで下さい！」

ハルとスタッフに危害が及ばないように、気を配りながら射撃する。

慰霊碑に到着すると、ハルとスタッフを自分の後ろに待機させる。

バアル

「ここを動かないで下さい」

シヌ

「早くこっちの援護をしろ……！」
「アザエル君は狙われ過ぎだ」

大衆の足場にAフォトンを出現させると、細長いAフォトンが飛び出し複数人拘束した。

シヌ

「まずいな……」
「力の使い過ぎで……疲れてきた……」

バル

「下がって下さい」

シヌが退避出来るように援護し、アザエルを再び守る。

-
-
-
-
-
-
-
-

SEED 事件犠牲者慰霊碑

東側 芝生地域

イーサンは北側のルミアと合流し、西側のカレンと合流するはずだ
つたが……

カレンは入口付近で頭を抱え、項垂れていた……

イーサン
「カレン？」

カレン

「……………」

「……………」

イー……サン……」

イーサン

「……………」

どうしたんだ？」

カレン

「……………」

何でもない、大丈夫だ」

何事も無かったかのように立って見せる。

イーサン

「……………」

ロストとリリースが援護射撃をしている。
ルウと合流して鎮圧するぞ」

カレン

「ああ、わかった」

イーサン、カレン、ルミアは南側へ向かう。

-
-
-
-
-
-
-
-

パ
ル
ム

ホ
ル
テ
ス
・
シ
テ
ィ

中
央
地
区

同
盟
評
議
会
ビ
ル

最
上
階

1時00分

大きな会議室でカーツは拘束されていた。
床に倒れている評議会ビルの職員は、頭を撃ち抜かれて死んでいる。
キャストはメインメモリを抜かれ、壊されている。

カーツ

「大佐……！」

旧文明人に……乗っ取られなど……」

ロドリゴ

「シヌとミレイは旧文明人と話したのか？

……とんだ嘘じゃな。

儂ら制裁者は第一人類じゃ。

シヌと同じ神病感染者」

カーツ

「やはり……あの2人は嘘を……」

ロドリゴ

「まあ安心せい。

嘘と言つても、お主ら人間を助ける為じゃ。
詳しくは話せんがの。

.....
さて、これを見る」

リモコンを押し、スクリーンに映像を映す。

SEED 事件犠牲者慰霊碑からの映像だ。

ロドリゴ

「テレビリポーターがまだ撮っているんじゃない。
電波を拾って映している」

大衆の攻撃が始まった頃よりは数が少なくなったが、アザエル側のメンバーはかなり疲弊している。

ロドリゴ

「アザエルもその護衛も善戦したが、ここまでじゃ。一瞬の隙が命取りじゃの」

カーツ

「アザエル……！」

ロドリゴ

「ガハハハ！」

そう言えばお主とアザエルは友人の関係だったの……
ゆっくりとアザエルの末路を見るがよい」

カーツ

「大佐……！」

いや、ロドリゴ！

制裁者は何の目的でこんな事を……！？」

ロドリゴ

「ふん、嫌でもわかる……」

……

……

……ん……？」

ロドリゴは銃の弾倉を入れる音が聞こえた。

ロドリゴはヤスミノコフ0002を、扉に向かって撃ち尽くした。

ロドリゴ
「……………」

扉を蹴って開けるが……

誰もいなかった。

ロドリゴ

「……………」

空耳……？

……まずいの……耳が遠いだけならまだしも、聞こえないもんが聞こえるとは……」

会議室に戻ろうとすると……

バン！ バンバン！

ロドリゴは両肩と右足を撃たれ、床に膝を突いた。

ファントム

「耳が悪いな、ご老人」

天井のダクトから降りてきた、ファントムだった。

6章：3 へ代替えへ（前書き）

6章から、長い章が続くと思います。

または章の数が多くなるか……

6章：3　く代替えく

SEED事件犠牲者慰霊碑

中央慰霊碑

1時05分

バル

「ハア……ハア……」

40分近く戦い続けたアザエル護衛側は、疲弊しきっていた。相手は素人だが、多勢に無勢では体力の限界が来る。

ルシフェル

「邪魔だ！」

（く皿く）

セレスティアルブレイズで、後ろから道を開けるルシフェル。
ヴィヴィアンもダブルセイバーで大勢を倒す。

バアル

「ルシフェル、ヴィヴィアンさん……！」

ルシフェル

「2人だけじゃない。」

（「ω」）

ルシフェルの言った通り、ガーディアンズの応援部隊が何十人も来てくれた。

バル

「よし……」

アザエルさんを保護します。

……シヌさん達は……って……！」

シヌとミレイはいち早く立ち去ろうとしていた。

シヌ

「悪いな。」

まだ捕まるわけにはいかない。

制裁者の事は話すだけ話せ」

コートについているフードを被ると、走り出した。

バル

「……ッ!……」

……
まあ良いでしょう。

協力はしてもらいましたし……」

ライア

「良いのかい?」

バルは発信器の場所が映る端末を、黙って見せた。

マリ

「へえ」

それでファントムの場所もわかるかな?」

ルシフェル

「わかるだろうな。」

（「」）

リリース、ロスト。
降りてきてくれ」

タイラー

「お前達……」

今の今まで何していた？」

ルシフェル

「ファントムを探していたが、バアルに制裁者の話を聞いてな。ファントムも来ると思ったが……」

（ - 〇 - ； ）

タイラー

「シヌとミレイだけ……か……」

ルシフェル

「制裁者を1人捕まえた。」

（ ^ | ^ ） v

結果が無かったわけではないが……」

ルシフェルは次々と捕まっていくヒト達と、疲弊しきった仲間達を見た。

ルシフェル

「（ ； | ； ） ㄟ」

ヴィヴィアン

「そんなに気を落とさず……」

数日前に自分で言った事を考えているようだ。

イーサン

「おい！」

ルシフェルがヴィヴィアンに慰められる中、イーサン達が合流してきた。

ちゃんと4人いるが……

カレンが浮かない顔をしている。

バル

「……………」

ライア

「ん？」

カレン、どうし……

バル

「ライア総裁！

アザエル代表！

そろそろ戻ったらどうですか！？

2人共私が送り届けますよ！」

ガーディアンズの船に来るようにサインする。

ライア

「え？　ちょ……？」

ライアとアザエルを船に放り込む。

バルは自分が乗る前に、イーサンに近づいていき……

バル

「（ガーディアンズで話があります）」

イーサンにだけ言うと、船に乗り込んだ。

ルミア

「今、何て言われたんですか？」

イーサン

「……いや、何でもない」

イーサンは振り向きもせず答えた。

マリ

「……………」

なるほどね……………」

……………」

……………」アタシ達は帰ろうか。

明日にガーディアンズへ行こうかな」

服装と髪型を正し、エミリアとナギサを連れていった。

ルシフェル

「（「」）（「」）」

ヴィヴィアン

「まあまあ……………」

リリース

「ど、どうしたのルシフェル？」

リリースとロストが屋上から降りてきた。

-
-
-
-
-
-
-
-

パルム

ホルテス・シティ

中央地区

同盟評議会ビル

最上階

1時10分

ファントムはスクリーンに映る、ハルとスタッフが撮影している映像を見ていた。

カーツ司令官の拘束は既に解いている。

カーツ

「ファントム……」

君は今まで……

ファントム

「黙れ。」

………

ファントムという男は死んだ。

偶然……生きていたから助けた。
それだけでしかない」

カーツ

「なら……」

君をリトルウィング襲撃事件の容疑者として……

ファントム

「言っただろう。」

ファントムは死んだ……

俺が容疑者として拘束される理由も無い」

スクリーンの映像を消すと、会議室を出た。
廊下の壁に寄りかかるロドリゴの撃たれた足を踏みつける。

ファントム

「ここで何をしていた？」

ロドリゴ

「……グッ……」

年寄りを……労らんかい……

……グオッ！」

銃創に靴を入れようとする。

カーツ

「その行為で、捕まる理由が出来た」

ファントムの後ろで、フォトン系ハンドガンを構えるカーツ。

ファントムはうざったそうな顔を見ると、素早く後ろを振り向きハンドガンを奪った。

カーツの頭を掴み、壁に衝突させる。

ファントム

「捕まえられるなら、捕まえてみる」

カーツ

「ファントム……！」

……君は……」

カーツを離し、ロドリゴを見た。しかし、ロドリゴはいなかった。

ファントム
「……………」

M92Fを取り出すと、探しに向かった。

-
-
-
-
-
-
-
-

同盟評議会ビル
エントランス
1時15分

エントランスに職員らしきヒトはいなかった。

ある部屋の扉の下から、血が出ているが……

ロドリゴ

「クッ……」

やってくれるわ……」

腕を下げ、撃たれた足を引きずりながら転送装置から出入口に向かう。

ロドリゴ

「何としても……」

帰らなければ……！」

ミスト

「君は……ロドリゴ・ゼル」

ロドリゴ

「!!」

ロドリゴの前にミストが立っていた。
武器は持っていない。

ロドリゴ

「人質を取れる……」

しかも捕獲対象とはの……」

ミスト

「え？ ……うわぁ」

痛そうに手を動かし、ミストを人質にとる。

ヤスミノコフ0002を構える。

丁度ファントムが追いついた。

ファントム

「……………！！……………」

ミストを確認すると、素早く銃を構えた。

ミスト

「ファントム……………！」

ロドリゴ

「それ以上近づくな。
小娘の頭を撃つぞ」

ヤスミノコフをミストのこめかみに当ててゐる。

ロドリゴ

「銃を捨てろ……」

ファントム

「貴様……！」

ファントムは本当に敵意ある時に使う、
“ 貴様 ” という一人称を言
った。

ミスト

「アハハ」

やっと会えたのに

こんな……ね……」

ファントム

「ミストから離れろ……」

ロドリゴ

「なら銃を落とすんじゃ」

ファントム

「チッ……！」

銃を手放す。

ロドリゴ

「ファントムよ……」

いくら仲間から離れ、自分を偽っても……

お主は人間じゃ。

仲間の前で無惨に屈する」

ミスト

「加齢臭酷いな」

ロドリゴ

「うるさい、気にしてるんじゃ。」

.....

……話を戻そう。

お主がどれだけ偽っても……
意味は無いんじゃない」

ファントム

「何だと？」

ロドリゴ

「この小娘がお主の代わりなんじゃ」

ヤスミノコフをファントムに向けた。

ファントム

「!？」

ロドリゴ

「お主は不要」

引き金が引かれた。

6章：4　　「戦争の神」

パルム

ラフォン草原

ガーディアンズ護送船

ゴールドは目、口、腕、足を縛られていたが、耳でどこかに停船したのがわかった。

船の扉が開かれ、誰かが拘束を解いた。

ゴールド

「助かった……リゼン……」

リゼン

「しっかりしてください。

右目撃ち抜かれていますし……」

ゴルドの目を見て、痛そうな顔をするリゼン。

押収された物品を手にとると、2人は船を降りる。

ゴルド

「ガーディアンズは？」

リゼン

「ここで寝るように命令しました。
起きたらどう思うでしょうか……」

道も無いのに歩き出す。

リゼン

「恐らく、アザエル代表暗殺は失敗でしょう。
まあ……」

殺害はついでで、引き付けるのが目的ですが」

ゴールド

「……リゼンは何故ここに？
時間になつたら大佐がいる同盟評議会ビルに……」

リゼン

「偶然、連行中の貴方を見つけたんですよ。
ロドリゴ大佐なら大丈夫……
そう思つて助けたのです」

ゴールド

「そうか……ありがとう。
まあガーディアンズで“切り札”を使つて、壊滅させても良かった
が……」

ガーディアンズに押収された注射器を出す。
ケースに入れている。

リゼン

「アルベルトさんが言ったでしょう。
できるだけ使いな、と……」

ゴ^ッルド

「わかつてるよ」

注射器の入ったケースをポケットに仕舞った。

-
-
-
-
-
-
-
-

パ^ルム

同盟評議会ビル

エントランス

ロドリゴはヤスミノコフの引き金を引いた……が……

ロドリゴ

「!？」

何度引いてもフォトン弾は発射されなかった。

いくらデューマンのフォトン吸収率が悪いとはいえ、最後にヤスミノコフを使った時から時間は経っている。

727

ファントム

「万事休す……だな」

M92Fを拾って、標準をロドリゴの額に合わせる。

バン！

ロドリゴはミストの後ろへ飛び、呻き声を上げた。

ファントム

「……………」

ミスト

「僕的能力だよ」

「最近気づいたんだけど」

ヤスミノコフを拾い、ファントムに投げた。

キャッチして見てみる。

ミスト

「1年前に気づいたんだけど」

僕の半径50Rpまでなら、どんな属性のフォトンでも作り出せるだ」

今のは、ヤスミノコフに直接雷フォトンを通して、ショートさせただ」

黙って聞いているファントム。

ミストが近づいていく。

ミスト

「バトルの時は」

魔杖バルバトスを使ってリーチを伸ばすんだ」
剣の様に使うケド」

ファントムの前まで来ると、頬に触れた。

ミスト

「やっと会えたネ〜
ファントム〜」

ファントム

「……………」

ミストの手を払う。

ミスト

「……………ファントム？」

ファントム

「……………」

俺は……………ファントムじゃない……………」

ミスト

「嘘言っちゃって」

服装や髪の色変えてもわかるんだぞ」

ファントム

「違うと言ってるだろ。」

……それより、君は制裁者に狙われているみたいだな。
ついて来てもらおう」

ミスト

「僕が欲しいのはファントムだけだよ」
シヌ君やミレイ君は要らないな」

ロドリゴ

「……お主ら……」

ロドリゴが立ち上がった。

ファントム
「寝てろ」

弾倉内の実弾が無くなるまで撃ち込むが……
ロドリゴは立ったままだ。

仕方無くリロードするが……

ロドリゴ
「アル坊……
すまん……」

手に持っていた注射器を、首に刺した。

ファントム

「何だあれは……」

ミスト

「さあ？」

初めて見るケド」

弾倉を変え終わると、再び射撃を開始する。

しかし、注射器内の液体は既に無かった。

ロドリゴ

「……！」

……ガハッ……！」

胸を押さえ、吐血する。

ロドリゴ

「ガハッ！ ガハッ！
これはッ…グォ……」

苦しそうに胸を押さえていた手……

右手を左手が、左手が右手を掻き始める。
絶え間無く呻き声を上げ、吐血する。

ファントム

「器の方が耐えられないな……
早くシヌ達に来てもらうか」

通信機をシヌ達に繋ぐ。

(シヌ)

「おい！

今どこにいるんだ！？

作戦変更って言う前に行き先を教えろ！」

ファントム

「同盟評議会ビルだ。

今マズイ事になってるんだ。

早く来てくれ」

(シヌ)

「全く、勝手な奴だ」

通信を終了する。

ロドリゴの呻き声が止んでいた……

ミストが酷く青ざめている……

ロドリゴの方を向いた。

ファントム

「何だそれは……？」

ロドリゴの姿……

腕が6本、手が銀色のサーベルに変化し、長くなっている。
足には一方ずつに、3つの刃が縦に付いている。
胴体と背中、そして腰の皮膚が金属に変化。
太股と二の腕には何が発射されるか不明な銃口。
そして鬼の様な顔が、3つ付いていた。

地球にあるインド神話……

戦いの神・阿修羅の様だ。

何とも言えない……

異様な雰囲気漂っている。

ロドリゴ

「……………」

ファントム

「……………」

君はカーツ司令官を連れて逃げろ」

ミスト

「……………」

ファントム

「ミスト！」

ミスト

「ひっ！」

まるで何かに集中して、聞いてなかったかのようにだった。

ファントム

「カーツを連れて逃げろ！」

転送装置で最上階に行け。

俺がロドリゴを引き付けておく」

ミスト

「……………」

ファントム

「しっかりしろ！」

ミストの両肩を掴み、目を覗き込んだ。

恐怖に怯えた目だ。

今にも泣き出してしまいそうな……

ファントム

「信じろ……！」

俺が絶対に生きて返す」

ミスト

「……わかった……」

激しく頷き、転送装置で最上階まで向かうミスト。

ロドリゴは動こうとしない。

(ファントム)

何だ……？

全く動こうとしない……

さっきから微動だにしない。

(ファントム)

先手必勝か？

銃の標準をロドリゴに向けた瞬間……

突然動き始め、走ってきた。

ファントム

「チッ……！」

防衛本能だったのか……

舌打ちする前には撃っていた。

しかし……

ファントム

「嘘だろ……」

実弾を避けるのではなく、わざわざ手のサーベルで切り落としていた。

ファントム

「銃は効かないか」

M92Fを仕舞い、ヒヤツカリヨウランをトランスする。

ロドリゴの6本の腕が同時に攻撃してくる。

ファントム

「クッ……」

6本腕の攻撃を防ぐがあまりにも重く、片膝を床に突く。

太股の銃口がファントムを見ている。

すぐに姿勢を倒す。

銃声が真ん前で鳴り響く。

ファントムは抵抗力を緩め、ロドリゴの力に任せて股をくぐる。
素早く立ち上がり、ヒヤツカリヨウランの柄を合わせてテンイムソ
ウを作る。

ファントム
「ハッ！」

横に振るも、皮膚が金属に変わりりしかも硬い。

ファントムは手が痺れたが、すぐに距離をとる。

ファントムを見ているロドリゴ。

ファントム
「クソッ……」
死角無し……か……」

ファントムの目の端に、ミストとカーツが映った。

ファントムは早く行けと手で指示を出す。
しかし、2人共指示に従わない。

ファントム

「（何してんだ……）」

カーツ

「あれが……ゼル大佐……？」

ミスト

「そうだよ」

「変わり果てたネ」

カーツ

「……………」

ファントム

「余計なお喋りをするな！
さっさと逃げ……ッ！」

ロドリゴの体はファントムを見ていなかった……
顔がうつあるので気づきにくい。

ファントム

「チッ……！」

走り出すが……

(ファントム)

間に合わないか！？

ロドリゴの二の腕と太股からマズルフラッシュが見えた。

同時にミストとカーツの目の前に、Aフォトンの壁が出来る。

シヌ

「ミストちゃん……」

わざと逃げなかったな……」

ミスト

「昔の君はヒトを殺す奴だったけど、今は違っでしょ？」

シヌとミレイが正面玄関から入ってきた。

ファントム

「遅いぞ」

シヌ

「それでも早く来た方だ。

……それより、その化け物は何だ？」

ファントム

「ロドリゴだ。

注射器を自分に打ってあんなった」

シヌ

「ファントム君が手こずる程か……
楽しい殺し合いに……」

ミレイ

「殺したらダメですよ」

仮面を外す。

シヌ

「仕方無い。

ミレイが拘束して、俺が精神を引き剥がす。
ファントム君はロドリゴを元に戻せ」

ファントム

「どつやって?」

シヌ

「サンゲヤシャを使え」

ファントム

「この……」

お前が使うなって言っただろうが……」

テンイムソウを仕舞い、サンゲヤシャをトランスする。

シヌ

「俺とミレイは力を溜めとくから、俺達に近づかせるなよ」

ファントム

「調子の良い事を……」

6章：4　　〽　**“戦争の神”**　〽　**（後書き）**

6章終わったら4・5章的な事をします。

ファントムが失踪してから1ヶ月の間の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272y/>

ファンタシースターポータブル2 ∞ 偽神達の転生（日常編続き）

2012年1月14日17時52分発行